

---

Tales of Vesperia 魔を断つ刀を持つ少年

エターナル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tales of Vesperia

魔を断つ刀を持つ少年

### 【Zコード】

Z0273X

### 【作者名】

エターナル

### 【あらすじ】

記憶を失った少年シンクは天才魔導少女リタ・モルディオと出会う。それは運命の出会いであつた……

この小説はテイルズオブヴェスペリアの二次小説です。  
ある程度原作を知つておく必要があります。

## プロローグ（前書き）

テイルズオブヴェスペリアを最近やつて勢いで書いてしました！  
他の小説どうすんだ俺！

温かく見守ってください。

## プロローグ

古代都市 アスピオ。

その中の少し離れた小屋で一人の少女が少し大きい本を読んでいた。  
彼女の周りには大量の本が積まれている。

「うーん……これさえ分かれば、魔導器<sup>プラスティア</sup>の出力を変えられるのに……」

本を読みながら少女はぶつぶつと囁いている。

「うーん……」いやあ、図書館で調べるか……」

そういつて少女は白いマントを頭から被り、本の山から抜け出し、  
家の扉を開けた。

「……いやでも……図書館つてのもアレだし……遺跡にでも行くか……ん?」

少女が俯きながら歩き出すと、足下で何か不思議な感触を感じて、  
下を見ると、下に少年が倒れていた。

見た目は自分よりも年上に見え、茶髪で、右手には刀を持っている。

「アンタ何?」

少女は足を引き、冷たく言い放つが反応がない。

「なんでこんな所に倒れているのよ?」

少女は辺りを見渡しながら言った。

他の人間は気づかなかつたのか？

「はあ……全く……私の家の前に倒れられてると困るっての……」

少女はため息をつきながら、少年を引きずつて、家に入れようとした。

すると少女は少年の左腕に注目した。

左腕には金色のリングに真ん中に宝石のようなのがはめられたのが巻かれていた。

「これって……武醒魔導器ボーティブラスター？なんでこんな奴が……それにこの刀……」

少女は呟きながらも少年を家に入れた。

\*

「ん……」

少年は重たい瞼をゆっくりと開いた。

「……」

「ん？ 用意ました？」

机に向かつて本を読んでいた少女が少年を見た。

「……一体……？」

「アンタねえ、一応私は命の恩人なんだからお礼とか言えないわけ？」

少女がため息をつきながら、半田で少年を睨んだ。

「すまない…それと、よくわからないがありがどつ」

少年は無表情で礼を言った。

「それで、『』はどうだ？」「

少年は再び少女に尋ねた。

「『』はアスピオの私の家。っていうか、アンタ、私に質問する前に自分の名前くらい名乗りなさいよ」

「名前……」

少年は頭を抑えた。

そして少年は呟いた。

「シンク……」

少年、シンクは自分の名前を名乗った。しかし、シンクはそれ以外何も思い出せなかつた。

そんなシンクの反応に少女も気づいたようだ。

「あんた…もしかして、記憶喪失なんじゃないの？」

少女が無表情でシンクに聞いた。

「解らない……名前以外……曖昧なんだ……」

少女はため息をついた。

「つたく。名前以外よく分からないうそうとうね……」

少女はシンクを見ながら考え込む形をとった。

「ん~…そうね。ねえアンタが記憶取り戻すまで、ここに住まない？」

少女はシンクに聞いた。

「いいのか？」

「いいわよ。その代わり、アンタには私に協力してもらひけど」

協力関係……か。シンクはこの少女の協力を得る他ないと判断し、了解した。

「ところで、お前の名前は？」

「リタ。リタ・モルディオよ」

少女、リタは素っ気なく答えた。

これが記憶がない少年シンクと天才魔導少女リタの出会いである。この時、シンクの持っていた刀が一瞬輝いたのをシンクとリタは知らなかつた。

## プロローグ（後書き）

主人公 設定。

シンク。

年齢：18

ICV：浪川大輔

武器：刀（刀の名前は後に分かれます）

モデルキャラクター：ベルクト（アナザーセンチュリーズエピソード3）

服装：青い西洋風なロングコート。（デビルメイクライ3のバージルの服装）

技や刀の名前は話が進んでいく内に分かれます。  
ちなみに今回の話の時系列は、原作の三年前です。

感想なんかもらえると嬉しいです。

## 魔導器の為なら…（前書き）

今回シンクの技が一つです。技はテビルメイクライの技を使って  
います。

## 魔導器の為なら…

リタとシンクが出会いて二週間が経つ。

「シンク！ 敵が来たわ！ 援護するから攻撃しなさい！」

今、二人はアスピオから少し離れた遺跡、シャイコス遺跡の中を散策していた。

二人がこの遺跡に来ているのかと zwar、最近よく盗賊団がこの遺跡に魔導器を捨てるので、それを拾いに出かけているのだ。

「了解した！」

シンクは言いながら、刀を鞘から抜き、斬り裂く。その斬撃は、束になって襲い掛かってくるカエルやオタマジャクシにも見えるモンスター、ゲコゲコと、その子供オタオタを襲った。

「ゆらめく焰猛追！ ファイアボール！」

リタの手から、火の玉が出ると、ゲコゲコに襲い掛かる。火で悶え苦しむゲコゲコにシンクは刀で一閃する。ようやく辺りが落ち着いた。

「アンタ記憶喪失なのに、戦いに慣れてきたわね」

リタは先ほどの戦闘に関しての感想を述べた。

「お前も、その年でそこまで戦えるのには驚いた」

「ふ、ふん！私は天才魔導士リタ・モルティオよ！これくらい当然よ！」

頬を少し赤くして、リタは言った。

『「うわああああ！！』

「「...」」

遠くから悲鳴が聞こえてきた。

「行くわよ、シンク！」

「あ、ああ！」

二人は悲鳴の聞こえた方向へと走った。ついてみると、そこには武装していた男一人が岩の巨人、ゴーレムに襲われていた。

男の手には、袋があった。どうやら魔導器を盗もうとしたところで襲われたようだ。

「不味いな……どうするリタ……っておいリタ！」

シンクが尋ねる前にリタはゴーレムに向かっていった。

「やらめく焰、猛追！ファイアボール！」

リタはゴーレムに火の玉を放った。

ゴーレムは盗賊達からリタに目を向けた。

「アンタ達！魔導器を置いてとつとと行け！」

リタは盗賊に向かつて叫んだ。

盗賊達は聞こえたのか、魔導器の入った袋を置いて逃げていった。

「まつたく…無茶をする…」

シンクも刀の柄に手を置きながらリタの隣に来た。

「別に助けたつもりはないわ。私は魔導器の為なら、命なんて惜しくないわ！」

「…………」

リタの言葉に、シンクはしばし無言になつた。

シンクはゴーレムに向かつて、走る。

「疾走居合ー」

シンクは刀を抜刀し、ゴーレムを斬り裂く。

そして、刀を鞘に收める。

その瞬間、ゴーレムは斜め一文字に斬り裂かれた。

「す、すゞ…」

リタはゴーレムを一撃で倒したシンクに驚きの表情を浮かべた。

シンクはリタに歩み寄り、そのままリタを抱き締めた。

「な、何やつてんのよアンタ！？」

抱き締められているリタは顔を赤くしながら、何がなんだかわからぬ表情をしていた。

「命なんか惜しくないなんて…そんな悲しいこと言ひつな…」

シンクは悲しい声でリタを強く抱き締める。

「何よ…何なのよ…アンタは…」

リタは泣くことはしなかった。だが、リタは小さい頃に両親を亡くし、ずっと魔導器の研究をして、周りからは“変人”と呼ばれ続けた彼女にとつて本気で心配をし、本気で思つてくれているシンクの言葉に、自然に目から涙が流れる。

「……すまないな。わっ、行くか。目的の物は手に入つた」

シンクはリタから離れ、先ほど盗賊が置いていった魔導器の入った袋を持った。

「う…うん…」

リタはまだ若干頬を赤くして、俯きながら頷いた。  
そして一人はシャイコス遺跡を後にした。

\*

それから数ヶ月後。

あれからリタもシンクにだけは心を開いてきた。  
シンクもリタに対して優しく接していた。  
リタは図書館から戻ってきた。

「戻ったわよ～……ってあれ？ シンク？」

扉を開くと、そこにはシンクの姿はなかつた。  
リタの使つてゐる机に書き置きがあつた。

『じばらへ修行の旅に出る。必ず戻る。 シンク』

という文面だつた。

リタは手紙を見て、ふるふると震えている。

「何よ…勝手に…いなくなるなんて…バカ…シンクのバカアーーー！」

リタの叫び声がアスピオに木靈した。

\*

「すまない…リタ」

アスピオから少し離れた場所でシンクはアスピオにいるであらうこ

タにたいして謝った。

シンクは歩き出した。

自分の持つ刀『閻魔刀』と共に……

魔導器の為なら…（後書き）

次回から原作に突入します。  
最後に出た闇魔刀はわかる人はわかりますよね。  
感想待つてます！

## 帝都ザーフィアス 出会い（前書き）

今回で原作に突入します。  
シンクのオリジナル技も少しです！

## 帝都ザーフィアス 出会い

3年後

シンクは帝都ザーフィアスに来ていた。すると、下町が何やら騒がしかった。

「どうしたんだ？」

シンクは土嚢を持った男に話し掛けた。

「アクエラスティア水道魔導器が壊れたんだよ…」

男はそうシンクに言つと、先に向かつて走った。

「水道魔導器が…」

シンクは咳くと、歩みを進めた。

進んだ先では、広場の中心にある噴水がすごい勢いで濁つた水を噴き出していた。

恐らくあの噴水の中心が水道魔導器であるひつ。

しかし…

(魔核コアがない…?)

魔導器には、それを動かす為の魔核が必ずあるのだが、この水道魔導器にはその魔核がない。

「にじちゃん！見ているなら手伝ってくれないか！？」

作業をしていた白い髪の老人はシンクに言った。

「ハンクスじいさん。 水遊びも遊びもじこじけよ。 若くねえんだからよ」

シンクの後ろから声がした。振り返るとそこには、黒い長髪で、左手に刀を持った男がいた。

「ユーリめ…やっと来たかーお前もこれからその水遊びをするんじゃよー」

「げつー。」

ハンクスの言葉にユーリと呼ばれた男は驚く。

「まれ、ここにちゃんとー。」

「わ、わかったー。」

シンクもハンクスの勢いに負け、しぶしぶ手伝つた。

「お前も災難だな。こんな手伝わされてー」

ユーリはシンクに作業をしながら話し掛けた。

「まあな」

「オレ、ユーリ。ユーリ・ローウェルだ。よろしくな

「シンクだ。よろしく、ユーリ」

二人は挨拶した。

「ところでハンクスさん！この魔導器の魔核はどうした！？」

シンクはハンクスに大声で尋ねた。

「ん？ さあ のう。……ないのか？」

シンクは作業を一旦止め、ハンクスに近づく。ユーリも後ろからついてきた。

「ああ。本来魔導器には、魔核がなければ機能しない」

「そりや そうだな。じいさん。最後に魔導器触ったの、修理に来た貴族様だよな？」

ユーリもハンクスに尋ねた。

「ああ、モルティオさんじゃよ」

「……」

ハンクスの言葉に、シンクは驚いた。

シンクの知る人物の中にモルティオはいた。それは3年前に少しの聞いたリタである。

「貴族街に住んでるのか？」

「アハハ、じゃあ

シンクは再び驚いた。

(貴族街！？リタはアーリアスペリオにいるせうだ…とこいつはアーリアスペリオにいるせうだ…といつは偽物！？)

「ほれー、ゴーリもにこちゃんもみんなを手伝わんかー。」

「……すまないハンクスさん。俺は用事があるので失礼する」

「悪いじこせん。オレも用事思い出したんで行くわ」

シンクとゴーリは広場から離れようつとむ。

「待て。お前達。まさか、モルティオさんのところへ行へつもりなのか？」

「オレ達が？貴族の街に？あんな息苦しことひ頬まれたつて行かねえよ。行くぜ、シンク」

ゴーリはそう言つてシンクを引っ張りながら行つた。

「まったく…武醒魔導器で技を使えるからって無茶だけはするんじやないぞー。」

「わかってるよー。」

ゴーリはもう一度つてシンクを連れながら広場を後にした。

\*

シンクとコーリーは、コーリーの相棒犬ラピードの案内で、モルティオ  
がいるであろう屋敷に向かっていた。

「ヨリカ…」

「そ'うみたいだな…」

シンクとコーリーはドアの前に立つ。

「なんだか人の気配がしないな…」

コーリーはそ'う言つと、ドアを軽く蹴つた。  
しかし、反応がない。

「他の入り口を探そ'う」

「やうだな」

コーリーはシンクの言葉に頷き、別の入り口を探した。

「あつたぞ」シンクは窓を見て言つた。  
見ると窓は無用心に鍵がかかっていなかつた。

「よくやつたー・シンク」

ゴーリはやう言つて中に入った。続いてシンク、ラピードと窓から侵入した。

「さて、モルティオを探しますか」

「……ああ」

シンクとゴーリとラピードは屋敷内を探したしかし、どの扉も鍵がかかっていて入れない。

最後の一階の扉を調べ終えた時、

「ゴーリ。誰かいる」

シンクはゴーリに小声で言つた。  
ゴーリは下を見ると、そこには、マントを着た小柄な人物が入り口に立っていた。

(あのマント…アスピオの…まさか、本当に…)

シンクは信じくなかった。まさか、あれは本当にリタなのではないかと。

その人物の手には青く輝く魔導器の魔核があつた。

「よし、お宝発見」

「ワニッ」

やつぱりゴーリとラピードは一階からモルティオ(?)のところまで飛び降りた。シンクも遅れて飛び降りる。  
モルティオ(?)は逃げようとするが、入り口をラピードに阻まれ

る。

モルティオ（？）は挟み撃ちされた。

「お前、モルティオだな？」

「……」

「本当にモルティオなのか？」

「……」

シンクの言葉にモルティオ（？）は少し驚いた。  
その瞬間、モルティオ（？）は煙り玉を投げた。  
辺りには煙りが立ち込める。

「ゲホッ…ゲホッ…なんだ」「つやー…」

煙りが収まるごとに、そこにはモルティオ（？）の姿はなかった。  
代わりにラピードはモルティオが持っていた袋を咥えている。

「よくやったな、ラピード」

シンクはそのまま通りの頭を撫でた。

「クウーン」

頭を撫でられたラピードは喜んでこねくり見えた。

「珍しいな。ラピードが初めてのヤシに癒へなんて」

ゴーリーはやつ言いながらラピードが咥えていた袋を受け取って、中身を見た。

「なんだよー魔核がねえぞ！」

「なんと袋には魔核が入っていなかつたのだ。

「ヤツを追いかけるしかないな」

「ああ、魔核を取り返して、一発ぶん殴つてやるつぜ」

「ワンツー！」

そして、一人と一匹はモルティオ（？）屋敷の外へ出た。

\*

シンク達が外に出ると、そこには剣と盾を持ったたらこ顔の騎士と背が低く長い槍を持った騎士がいた。

「騒ぎと聞いて来てみれば、貴様なのであるか。ゴーリー！」

「ついに食えなくなつて、貴族の家にドロボウとは……貴様も落ちたものだ！」

「なんだ、テロビボロか」

「『ル』ではないのであ～るー。」

「ボッじやないのだー！」

コーリの言葉に一人の騎士は即座につっこんだ。

「コーリ。誰だコイシラ？」

「やうか、お前は初めてだな。紹介する。こいつのたらこ感がアデ  
ホールで、小さいのがボッコスだ」

コーリは一人を指差しながらシンクに言った。

シンクは貴族街を見ると、先ほどのモルティオ（？）が馬車に乗る  
ところだった。

コーリもそれに気付き、追いかけようとするが、アデホールとボッ  
コスがそれを邪魔する。

「逃げよつとしても、そつはいかないのだ！」

そういふことで、馬車は走り出しちゃった。

「逃げてるよつに見えるか？ああ、だから出世を見逃すのか

「な、なんという暴言かー！」

「取り消すのであ～るー。」

アデホールとボッコスはコーリの言葉にカチンと来たのか武器を構  
える。

「ユーリ……お前は穩便に済ます気はないのか？」

「悪い悪い。けど、この方が手っ取り早くいいだろ？」

「はあ……まあ、確かにな」

一人はそう言つと、シンクは闇魔刀を、ユーリは二バンボシを抜く。

「オレがボコをやる。お前はデコを頼む」

「分かつた！」

シンクはアテゴールを、ユーリはボッコスを相手にする。

「お前のことは知らぬが、ユーリと一緒にいたのであれば、一緒に捕まるのである！」

「まつたく……速攻で片をつけろ。悪く思つな、デコー。」

「だから『トコ』ではないのである！」

アテゴールは剣を持ちながらシンクを斬り付けようとするが、シンクは軽く流す。

「風牙一閃！」

シンクは風を纏つた闇魔刀をアテゴールに一閃する。

「ぬお～である！」

アテゴールは一撃で吹き飛ばされた。

「おっ、せつちも終わつたか」

ゴーリが「バンボシを持ちながらシンクに近寄る。  
後ろには倒れたボッコスがいる。

「ああ。まあな」

「つたべ。お前ら、腕落ちたんじやないか?」

ゴーリは倒れてくるアーティールとボッコスに皮肉をうづく。

そこに新たに騎士が数名シンクとゴーリを囲む。

そこから、青髪のロン毛の騎士たちを駆がやつってきた。

「いや、馬車は無理だな」

「そのようだな」

「流石シユヴァーン隊。こんな下民一人捕まえられないなんて……無能だね」

男の言葉に、アーティールとボッコスは立ち上がり、敬礼をする。

「いや、これはキュモール隊長…とても見苦しことひを…」

「君たちみたいな、俺たちの卑しいヘナチヨン隊、騎士団こりないんだよ」

「グッ…シユ、シユヴァーン隊長にまじ内密に、お、お願こします

キュモールと呼ばれた男は皮肉たっぷりにアーティールとボッコスに言った。

「逃げたのが魔導器泥棒なら、逃がしたのは税金泥棒かよ」

ユーリが言つてみると、ラピードは袋を咥えたまま、離れていった。

「じょうがねえな…シンク、お前も武器捨てろ」

「チツ…仕方ないか…」

ユーリは二バンボシを捨て、シンクも闇魔刀を鞘に収めてから捨てた。

「飼い犬にも見放されるとは、傑作なのである…」

「あやまつまつまつ…」

「…その飼い犬の飼い主にボコボコにやられたのはどうのどうだ？」

？

「ぐつ……」「

シンクは流石にムツときて、アーティールとボッコスを睨み付けながら言つた。

「毎度毎度、君は忙しいね。ユーリ・ローウェル君。そっちの君は知らないけど、ちょっとだけ遊んであげるよ。僕のキュモール隊がね

「おまえらがそうだから、フレンが苦労するんだよ」

「あんな成り上りの小隊長には苦労がお似合いだよ」

キュモールの言葉を皮切りに、騎士達がコーリとシンクを囲む。

「終わつたら、こつものよえに独房にぶち込んでおいてくれよ。そつちの彼も一緒にね。十日もすれば反省するだろ? からね」

その後、シンクとコーリは騎士達にタガ殴りにされた。

## 帝都ザーフィアス 出会い（後書き）

現在ゲームをプレイしながら、執筆しています。  
二週目からなので、スイスイ進めました。  
アイテム引き継ぎだとかなり話を進めやすいです！  
次回はザーフィアス城から

お楽しみに！

感想もお願いします！

## ザーフィアス城　牢獄からの脱出（前書き）

今回は牢獄から出るまでの話です。  
もちろん、原作ヒロインも登場します。

## ザーフィアス城　牢獄からの脱出

帝都ザーフィアスの地下牢。

そこにシンクとコーリは隣同士の牢に入れられた。  
コーリはしばらくして起き上がった。

隣から声が聞こえる。

「知ってるよ。 盗賊も捕まつた。 盗品も戻つただろ?」

「いやいや、ナレは貴族の面子が邪魔してね。 今あるのは贋作よ」

「馬鹿な……！」

「ナレだけの話。 漆黒の翼もお主を探してゐるところ」

「例の盗賊ギルドか?」

騎士と隣の牢の男が話している。  
しばらくして騎士はハツとして、

「コホンッ、おとなしくしていろ。 もうすぐ食事の時間だ」

騎士はそう言い、牢から離れる。

騎士が行くと、隣にいる男がコーリに話かけてきた。

「ジッとしているのも飽きてきたでしょ? そろそろ用意めてもいいんじゃない?」

「あんな嘘を話すのが得意なのか？おひやんも暇だな

「おひやんはヒーハー。おひやん傷つくなこの」

「自分でおひやんと認めているがな」

男とは別隣から声が聞こえた。

「なんだ、起きてたのかよシンク」

「ああ、おひきから起きていた」

「おひかよ。で、おひきの話本かなのかよ？」

ゴーリは再び男に聞く。

「本当よ。世界中の俺の部下が集めてきた情報だから。ためしに何か質問してみない？海賊ギルドの沈めたお宝か？それとも…」

「なら、ここから出る方法を教えてもらいたい」

「それか…あんたら何したかわからぬけど、十日もすれば出してもらえるでしょうな？」

「それじゃト町が湖になつたまつよ」

「下町…？ああ、聞いた聞いた！確か、水道魔導器が壊れたんだって？」

「……モルティオのヤツはゼリようか…」

「モルディオって…アスピオの天才魔導士の、おも、じつこの関係よ？」

「知ってるのか？」

「まあ、知ってるよ。でも、情報を提供するからこそそれなりの報酬を…」

男が言おうとした時、シンクが割つて入った。

「ユーリ。モルディオは俺の知り合いだ。必要ないぞ」

「そうだったのか？悪いなおつさん、そういうわけみたいだ

「や、そんな…」

その時、地下牢の中に誰かが入ってきた。  
そして、男の牢の前に止まる。

「出る

「いいところだったんですね～…」

(騎士団長のアレクセイじやねえか)

男はアレクセイの言葉に従い、牢を出た。  
そしてユーリの牢の前に来ると、わざとひっくり転んだ。

「騎士団長じきって、おっさん、一体何なんだ？」

「……女神像の下」

男は小さく呟つと、ユーリに牢の鍵を渡した。

「何をしている?」

「はいはい。今行きますよ」

男とアレクセイは地下牢を出ていった。ユーリは出ていったことを確認すると牢の扉を鍵で開けた。

「俺のも頼む」

「おう。待つてろ」

ユーリはシンクの牢の扉も開けた。

「しかし、相変わらずのザル警備だな。脱獄の上乗せがつかなければいいけどな」

「大丈夫じゃないのか? …多分」

シンクとユーリはそう言しながら、眠っている見張りを通りすぎ、箱に入っていた。自分たちの武器を拾った。そして、二人は地下牢を出た。

\*

ユーリとシンクは遭遇した騎士達を倒しながら進んだ。  
その先には、騎士二人と貴族のような少女がいる。

「お戻りください！」

「例の件は我々が責任を持つて小隊長にお伝えしますので」

「そう言つてあなた方は何もしなかつたではないですか！」

ユーリとシンクはこいつそりと覗いている。

騎士が少女に近づこうとするべく、少女は騎士に剣を向けた。

「お止めになられた方が……お怪我をなさりますよ？」

「剣の扱いは心得ています！」

「致し方ありませんね。手荒な真似はしたくありませんでしたが……」

そう言つてもう一人の騎士は剣を抜いた。それに続いてもう一人も剣を抜く。

『いたゞー！』ちだ！』

更に一人の騎士がやつてきた。

「お願ひします！行かせてください！私、どうしてもフレンに伝えなければならぬことがあります！」

(フレンだつて！？)

ユーリは飛び出し、やつてきた騎士一人を蒼い疾風の衝撃波 蒼破刃 を放ち倒す。

「うわあつ！」

「がつ！？」

「な、なんだ貴様は！？」

「フレン……！？私を助けに……？だ、誰？」

少女はユーリを見て笑顔からすぐに警戒する顔になつた。騎士達はユーリに剣を向けた。

(何をやつてるんだアイツは……！)

シンクは呆れていた。

「つたぐ。こつそりのはずか、いきなり厄介ごとかよ

「こいつ、魔導器を持つてるのか！？」

「慌てるな。相手は一人だ。二人で掛かれば問題ない！」

「残念だが一人じゃないぞ！」

シンクはユーリと騎士達の間に入る。

「疾走居合！」

「蒼破刃！」

シンクは田にも止まらぬ速さの廻合いで、コーリは蒼破刃で騎士を倒した。

「つたぐ。それが騎士のやる」とかよ「まつたぐ…」

「最近の騎士団じや、Hスコートもできないのか？」

「コーリ。それにしてもさつきの行動は軽率だぞ」

「悪い悪い」

『コーリ・ローウェーラー！何処にいる〜！』

『不届きな脱走者め！逃げ出したのは分かつて〜いるのである〜！』

突然、コーリの名を叫ぶ声が聞こえた。その声は一人はアーティゴールの声であったが、もう一人の声はシンクは知らなかつた。

「ちつ、またあいつらか。…しかもルブランまでいやがる」

「ルブラン？誰だそいつは？」

シンクはコーリに尋ねた。

「シユガヴァーン隊の小隊長だよ。要するに、テゴビボロの上司だよ」

『バカも〜ん！もつと声を出さぬか…』

『そういうフルプラン小隊長は、声大きすぎて耳が…』  
少女はユーリの名を聞き、少し驚いた。

「ユーリ・ローウィル？ もしかして、フレンのお友達の？」

「わうだけど、フレンに聞いたのか？」

ユーリの問いに少女は頷く。

「はい」

「ふ～ん、あいつも城の中に、話する相手いたんだな」

「ユーリ。話は後だ。今はここから離れよつ」

「それもわうだな。そんじゃとつあえずフレンのところに案内すれば良いか？」

「あ、はいー」

「シンク、お前もそれでいいか？」

ユーリはシンクに向きながら尋ねる。

「仕方ない…早く行くぞ」

「はいーえーっと…」

「シンクだ。よろしく~」

「 ものじぶん願こしもあーシンクわる」

そして、三人はフレンの部屋へと向かった。

\*

ユーリ、シンクは少女を連れて、フレンの部屋に入った。  
しかし、肝心のフレンはいなかつた。

「 やけに忙そことへんな…」 いやあ、フレンのやつ、ビックリ遠出かもな

「 そんな…間に合わなかつた…」

「 それで、お前は一体何者だ? 何故騎士に追いかかれている?..」

シンクは唐突に少女に尋ねた。

「 それは……あのーユーリわんーシンクわんー」

「 なんだよ急ぐ?..」

「 詳しいことは言えませんけど、フレンの身が危険なんです! わたし、それをフレンに伝えて行きたいんですよ」

少女の言葉を聞くと、ユーリはベッドに腰掛けた。

「行きたければ行けばいいんじゃないの？」

「それは……」

「俺達にも急ぎの事情があるんだ。外が落ち着いたら下町に戻りたいんだよ」

「俺はそれよりもアスピオに行きたいのだがな」

「ユーリとシンクがそれぞれ言つと、少女は一人に近づいた。

「だつたら、お願ひします。私も連れて行つてください。今の私は、フレン以外に頼れる人がいないんです。せめて、お城の外までお願いします、助けてください」

少女はそういうと頭を下げた。

「事情があるのはわかつたが、せめて名前くらいは教える。俺達は名前を名乗つた。だつたらお前も名乗れ」

シンクがそう言つた瞬間、ドアがものすごい勢いで開かれた。  
そこからは、双剣を持った赤と金髪の髪のオールバックの男が現れた。

「オレの刃のエサになれ……」

男はユーリに向かつて言つた。

「ノックぐらいしろよな」

「オレはザギ……お前を殺す男の名、覚えておけ、死ね、フレン・シーフォ……！」

そう言つてザギはゴーリに向かつて双剣を振り下ろす。ゴーリはすかさず二バンボシを抜き、防ぐ。

「人違ひだ！」

「死ね」

「ちつとは人の話聞けよ」

「ザギだ。オレの名前を覚えておけフレン……オレはお前を殺し自らの血にその名を刻む」

「それ最高に趣味悪いな。あと俺はフレンじゃねえつて言つてんだろー。」

そう言つてゴーリはザギを押し退ける。

「やんな、フレン……あははっ…上り詰めてきたぞ…あはははははっ…」

ザギは急に笑いだした。

「急に様子を変えやがった…」

「あはははははっ…」

ザギは笑いながらヨーリに剣を再び振り下ろす。

しかしそれは間に入つたシンクの闇魔刀に邪魔された。

「あん？」

「シンク！」

「まったく…見てられん…！」

シンクは闇魔刀でザギを払いのけた。

「私も手伝います！」

そこに少女が剣と盾を持つて戦闘に参加した。

「危ないから下がつていろ！」

「でも…」

「いいぜ。2人でも3人でも相手してやる

「仕方ない…あまり前に出過ぎるなよ…」

「はい！」

少女の返事を聞くと、シンクはザギに闇魔刀を横一閃に斬る。だが、ザギは剣でそれを受け止める。

「お前もなかなかやるな」

「セツヤ、エーハ…モ…」

シンクはさう言つと、後ろに下がつた。

そこにゴーリが「バンボシでザギを斬り付ける。

「あははっ…上がつてきたぜ…面白…ぜお前ら…」

「つたぐ。仕事相手間違つてんぞ」

「ナウですヨー。」の人はフレンジヤありません!」

「そんな些細なことはどうでもいいんだ! オレと一緒に上り詰めようぜ!」

「職務放棄しているそここつ…」

ザギは高笑いをしながら次の攻撃に移るつとした時、入口からフードを被つた赤田の黒装束の男が現れた。

「ザギ、引け。」ハリのハスで騎士団にバレた

ザギは男の言葉を聞くと、男を殴り付けた。

「ぐつ…モ、貴様…」

「はははっ…オレの邪魔をするな…まだ上り詰める途中なんだよ…」

「今は引け…」)で楽しみを終わらせたいのか!…?」

「ちつ…」

ザギは舌打ちをすると、男を切った。男は何度も切られ倒れた。  
そしてザギはユーリに振り返り、

「フレン・シーフォ……次に会つのを楽しみにしてるわ……」

そう言い残し、ザギは姿を消した。

「騎士団に見つかる前に行くぞー！」

「ああ、もうだな」

「あの、ユーリさん」

「分かつたよ。ひとまずは城の外まで一緒にだ」

「仕方ないが。ひとまずは一緒に行くぞ」

「ありがとうございます。ユーリさん、シンクさん。私の名前はエステリーゼと言こめや」

「エステリーゼか。よろしく。それはそうと、その格好じゃ流石に目立つと思つただが……」

シンクはエステリーゼの着ているドレスを指摘した。

「それももうですね。この先に私の部屋があるので、そこに行きましょう」

場内のホールの中心には立派な女神像があった。

\*

エスティーリーゼとシンクが握手をすると、3人は男からの情報の女神像に向かった。

「ああ、こちらこそよろしく」

ユーリはエスティーリーゼの手をつかみ、すぐに放す。エスティーリーゼは次にシンクに手を差し出す。

「よろしくです」

「よろしくて意味です」

「何、これ？」

シンク達はまずはエスティーリーゼの部屋へ向かい、エスティーリーゼはさつきより動きやすい服装に変わっている。すると、エスティーリーゼはユーリに手を差し出す。

\*

「あれだな」

「『I』の像に何か秘密があるんです?」

「そうらしい。聞いたのはユーリだからな」

シンクとユーリが女神像の周りを探し始める。

「ん...?」

シンクは女神像の床がすれているのを見つけ、女神像を引っ張つてみると、そこには地下道に続く梯子があつた。

「ビンゴ!らしいな...」

「もしかして、ここから外に?」

「貴族のお姫様には、似合わない場所だからな。どうするエステリーゼ?」

「.....行きます」

エステリーゼは少し悩んだが行くと決心した。

「よし、なら行くぞ」

そう言つてシンクは先に梯子を降りた。

それに続いて、ユーリ、エステリーゼも降りた。

3人は地下道へ下りて進むと魔物に遭遇はしたが、シンクとユーリ

が先頭を切つて、エステリーゼがサポートに回つたことで乗り切り、外へと繋がる梯子を見つけて一人ずつ上つて出口から出る。

外に出るとそこは既に朝だつた。

「あ～あ、もう朝かよ。一晩無駄にしたな」

「ああ、とりあえずは下町に向かおうか?」

「それもそりだな」

ユーリはそう言いながら、最後に上つてきたエステリーゼの手を取つてあげた。

「窓から見ると、全然違つて見えます」

「そりや大げさだな」

「それは…」

「ところで、エステリーゼはどうする? そのフレンとかいう騎士を追うのか?」

「そのつもりです。先ずは騎士の巡礼の始まる花の街ハルルに向かいたいと思います」

「ハルルか… ちゅうビアスピオの途中だな。一緒について行つてやるぞ」

「いいんですか! ?」

「おいおい、勝手に話進めるな。俺だってモルティオに用があるんだ。俺も行く」

シンクとエステリーゼの話にユーリも入ってきた。

「まあ、とりあえずは下町に戻ろう。行くぜ、シンク、エステル」

「ああ」

「はい……つてエステル？ エステル…」

「エステリーゼじや長いだろ？ダメか？」

「エステル… いえ、大丈夫ですよ！」

エステリーゼ改めエステルは先ずはシンクとユーリと共に下町に向かつた。

## ザーフィアス城　牢獄からの脱出（後編）

スキット

【何故コーリだけ？】

コーリ「やうこえぱルブランの奴ら、俺の名前だけ呼んでたな。シンクもいたのに」

Hステリーゼ「シンクも牢獄にいたんですか？」

シンク「ああ、コーリと一緒にな。恐らく、あこつらに名前、教えなかつたからじやないのか？」

コーリ「つたぐ。なんで俺だけ…」

【フレンって誰だ？】

シンク「ずつと闘いのつと戯つてこた」

コーリ「なんだよ、シンクっ！」

シンク「Hステルやお前、それにあのザギとかこうヤシの言つていたフレンとは誰だ？」

コーリ「フレンか？やうこえぱお前こなフレンの」と説明してなかつたな

ユーリ「フレンは、昔から俺と一緒に下町で育つたやつで、今は騎士団の小隊長やつである」

エスティーリー、ゼ「ユーリのことば、フレンから話を聞いていたのでそれで分かったんですよ」

ユーリ「あのザギットやつは知らねえけどな」

シンク「なるほど……騎士か……」

## トライダンジョン 暫 物語の進行（前書き）

今回また町の話を飛ばしてトライダンジョン物語からスタートさせます。

## 「トイドン誓 魔物達の進行

ヨーリ、シンク、エステルそしてラピードはハンクスや下町の皆の協力で、ザーフィアスを出ることができた。

エステルはフレンに会うためにハルルの街へ、ヨーリは下町の魔核ドロボウを捕まえるためにアスピオを、シンクも別の目的でアスピオを田指すために3人と一匹は旅に出た。

ヨーリ達は現在、帝都から北の「トイドン誓」にたどり着いた。そこには騎士達がいた。

「ヨーリとシンクを追つてきた騎士でしょうか？」

「どうかな。ま、あんまり立たないよ！」

「ああ、騎士に田を付けられると面倒だからな」

「はい。私もフレンに早く会いたいですし」

「それじゃ、田立たないようじ……」

シンクが言つ前に、エステルは出店の本を読み始めた。

「本当にわかつてんのか？」

「恐ひくはな……」

カンッカンッ……

突如、鐘の音が激しく鳴り響く。

砦の先には、こちらに向かってくるモノたちがいた。  
魔物の群れだ。

砦の外の人達は、急いで砦の中に入る。  
騎士が門を閉じようとしている。

「早く入りなさい！－門が閉まるわ！－」

砦の上にいる女性の声が響く。

「矢だ、矢を持つてこい！」

「早く門を閉めろ！－！」

「くそつ…やつが来る季節じゃないだろ！」

「主の体当たりを耐えればやつら魔物は去る－訓練を思い出せ！－」

騎士の指示で、騎士達は魔物の群れに矢を放つ。

イノシシのような魔物の群れはそれでも向かってくる。  
人が一通り砦に入った。

だが、一人の少女と一人のケガをしている男性を残して。

「……よし、退避は完了した！扉を閉めろおー！」

「閉門を待ちなさい！まだ残された人が……」

女性は騎士の指示を止めようとする。

エスティルは魔物達を見て驚きの表情を浮かべる。

「あれ、全部、魔物ですか……」

「帝都に出て早々にとんでもないもんにあつたな」

「ああ、寄りにもよつて……魔物の群れにな……」

「俺、なんか憑いてんのか?」

そつまつてヨーリとラピードは門に向かつた。  
ラピードは門を閉じよつとしている騎士を威嚇する。

「フウッ…」

「な、なんだ、おまえ…つわッ、うわッ…やめり…」

騎士が手を離したことで門の閉門は止まつた。  
シンクもヨーリの所に向かおうとする。

「エスティル、おまえはいりで待つて……つておいー! エスティル!」

エスティルはシンクの声を聞き走つていった。

「ヨーリは女の子をー。」

「……はーはー」

ヨーリは呆れた顔で頷いた。

エスティルは足にケガをした男性駆け寄る。

「た、助けて……立てなくて……ひつ……! 魔物が、魔物が……!」

「大丈夫ですよ」

エステルは得意の治癒術で男性の足を治した。

「……あ、た、立てる」

「早く避難してください」

男は走つて門に向かう。  
エステルも門へ走つた。

後ろからヨーリも女の子を抱えて門に入つた。

「お人形！ママのお人形！」

女の子がいたところを見ると、人形があつた。  
エステルが気付いて向かおうとするが、シンクに腕を掴まれた。

「は、放してください！」

「俺が行く！ここにいろ！」

シンクはそう言って人形のところへ走つた。

「まったく…思いつきり目立つているじゃないか！」

シンクは悪態をつきながらも人形を拾い上げ、門に向かう。  
門は閉じようとしていた。

「シンク！」

シンクは滑り込み、ギリギリのところまで門に入れた。

\*

「なんとお礼を申していいか…」

「怪我まで治してもう二、本当にありがとうございます」

シンク達は女の子の母親と怪我を治してもう二つ男性に礼を言われていた。

「い、いえ私達は…」

「お兄ちゃん！ ありがとう！」

女の子はシンクに頭を下げて言った。

「怪我がなくてよかつたな」

シンクは優しく微笑んだ。

母親と男性はシンク達から離れていった。

「……みんな無事で本当によかつた…」

エスティルはそう言つと、ぺたりと座り込んだ。

「あ、あれ…？」

「安心した途端にそれかよ」

「まつたく…」

ユーリとシンクは笑いながら一緒に座った。

「結界の外にはあんなに凶暴な魔物がいるんですね…」

「あんな群れで来られると、結界が欲しくなるよな」

「だが、結界魔導器も貴重品だからな」

「そうですよね…魔導器を生み出した古代グライオス文明の技術が  
よみがえればいいのに…」

「グライオス文明か…」

シンクは小さく呟いた。

「それがよみがえつても、帝国が民衆のためにってのはちょっと想像しにくいな」

ユーリ達が話していると騎士がやつてきた。

「そこ」の3人、少し話を聞かせてもらいたい

だが、騎士が話し掛けるとほぼ同時に、遠くから別の声が聞こえた。

「だから、なぜに通さんのだ！魔物など俺様がこの拳でノックアウトしてやるもの！」

「簡単に倒せる魔物じゃない！何度言えばわかるんだ！」

フードを曰深に被つた男が騎士ともめている。フードの男のそばには、大剣を持った大柄な男と三日月型の武器を持つた少女がいる。

「貴様は我々の実力を侮るというのだな？」

フードの男が言つと、大柄な男は大剣を抜き掲げる。

「や、やめろ！」

騎士の警告を聞かずに男は大剣を振り下ろす。周りに風が巻き起つた。

「邪魔するな！先の仕事で騎士に出し抜かれたつづくんをここで晴らす！」

「おーーー！」

「これだからギルドの連中は…」

ゴーリ達に話し掛けっていた騎士も身構えた。

「あの様子では、門を抜けるのは無理だな」

「そんなん…フレンが向かった花の街ハルルはこの先なの?」

「騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探さう」

コーリはさう言つとあてもなく砦の周囲をぶらつぐ、すると先ほど  
の砦で叫んでいた女性がコーリたちに話し掛けってきた。

「ねえ、あなた、私の下で働かない?報酬は弾むわよ

そう言つて金が入った袋を掲げる女性にコーリは無言で皿を反りす。

「社長に対して失礼だぞ、返事はどうした?」

「名乗りもせずに金で吊るのは失礼つて言わないんだな。いやあ、  
勉強になつたわ」

「おまえ!」

女性と一緒にいた男性は、コーリの態度に怒り、コーリに詰め寄る  
うとするが、女性が止める。

「予想通り面白い子ね。私は『ギルド』『祝福の市場』<sup>ギルダ・ド・マジカ</sup>のカウフマンよ。  
商売から流通までを仕切らせてもらつてゐるわ」

「ふうん、ギルドね…」

コーリがカウフマンの『ギルド』といつて言葉に少し反応する。  
すると、地響きが起つる。

「私、今、困つてるのよ。この地響きの元凶のせいだ

「あんま想像したくねえこ」ビ、これって魔物の仕業なのか?」

「そう。平原の主のね」

「平原の主?」

エステルがカウフマンに尋ねると、代わりにシンクが答えた。

「門の向こうの魔物達の親玉だ」

「あの親玉か…」

「ビ」が別の道から、平原を越えられませんか?先を急いでるんです

「ああ?平原の主が去るのを、待つしかないんじゃない?」

カウフマンはそっぽを向いて言った。

「焦つても仕方ねえってわけだ」

「待つてなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきますー。」

そつ言ひでエステルは走つていった。

「待てエステル!はあ…」「一、ここは任せた

シンクはそつ言ひ、ラピードと一緒にエステルを追い掛けた。

\*

シンクはエスティルを追い掛け、腕を掴む。

「放してください！シンク！」

「うう」という落ち着け！ヨーリがなんとかしてくれたはずだ。今はヨーリを待

「……分かりました。ごめんなさい。わたし、フレンのところに行かなきやつて気を急いでいました」

「ファンといひやうを考えるのちわかるが、今はユーリを待とひ」

一  
はい

シンクとエスティルは座り込み、ヨーリを待つた。

「そういえばシンクは、じつにアスレホく？」

「魔核ドロボウを捕まえるのもあるが……会う人がいるんだ」

一  
会う人？

「俺には記憶がないんだ」

シンクの言葉にエステルは驚きの表情を浮かべる。

「記憶喪失というものですか？」

「正確には、三年前より以前の記憶がないんだ。そんなとき、彼女と出会った。彼女は記憶のない俺に住む場所を『教えてくれた。俺は……彼女を守りたい。その為に強くなると決めて、アスピオを出した。何も言わずに』」

「アスピオに行くのは、その人に会うためなんですね」

「ああ」

エステルはシンクの話を聞き終わると、少し考えてから、口を開いた。

「わかりました！花の街ハルルに行って、フレンと会つたら、必ずアスピオに行きましょう！」

「ワニッ！」

エステルの言葉にはラピードも頷いた。

「エステル……ありがとうございます。ラピードもな

「クウーン」

シンクはラピードの頭を撫でた。ラピードも嬉しそうに鳴く。

「エステル、シンク」

二人を呼ぶ声がした。

ユーリだ。

カウフマンとの話を終えてきたようだ。

「あ、ユーリ！」

「話は終わったのか？」

「ああ、ソシから西にある森を抜ければ、平原を越えられるつてよ」

「本当ですか！？」

「うしにせ。んじや、せつせと行うつせ」

「せつだな」

「ウンシー」

ユーリ達は、ディイドン砦を後にし、西にある森、クオイの森へ向かつた。

## トイドン皆 慢物達の進行（後書き）

次回はクオイの森です！

お楽しみに！

感想もお願いします！

クオイの森 倒れる姫（前書き）

クオイの森の話です。

アクセスがもう10000超えで驚きました。  
感想も欲しい！

## クオイの森 倒れる姫

ユーリ、シンク、エステル、ラピードはカウフマンからの情報で、西にあるクオイの森へとたどり着いた。

「……この場所にあるって……まさか、クオイの森……？」

「（汗）答、よく知ってるな」

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりきる、と本で読んだことがある……」

「そんのは迷信だ。行くぞ」

ユーリとシンクは奥に進もうとしたが、エステルは呪いを気にして進まなかつた。

「行かないのか？ま、オレはいいけど、フレンはどうすんだ？」

「……わかりました。行きましょうー！」

エステルは覚悟を決めて奥に進んだ。

\*

「蒼破刃！」

「スター・ストローク！」

「紅蓮斬！」

「ガウツ！」

ユーリー、エステル、シンク、ラピードは森の魔物を蹴散らしながら進んでいく。

「な、何の音……です？」

何か変な音をエステルが感じた。

「足元がひんやりします……まさか！これが呪い！？」

「どんな呪いだそれは？」

「木の下に埋められた死体から、呪いの声がじわじわと這い上がり、わたしたちを道連れに……」

「おーおー……」

ユーリは呆れたように言った。

「エステルは迷信を信じすぎだ。行くぞ

シンクはそう言って先に進んでいく。

「……あれは……」

シンクは何かを見つけた様だ。

「これ、魔導器か。なんでこんな場所に……」

コーリとハーパードも近づいた。

「少し休憩するか」

「そうだな」

シンクはエステルが辛そうにしてるのを見てコーリに同意を求めた。

「だ、大丈夫です」

エステルはそれを断つて歩きだした。そして、魔導器の前で止まつた。

「……あれ、これは？」

と言つてエステルは魔導器に近づいた。次の瞬間、魔導器が強烈な光を発した。

「「「つわつー」」

「さやつー」

光が収まるごと、エステルが倒れた。

「「エスティル！」」

ユーリとシンクはエスティルに駆け寄った。

「おい、エスティル！」

「これは……一体……」

\*

エスティルはラピードに枕がわりになつてもらつて、眠つている。シンクは周りの警備を、ユーリは落ちていた実をかじつた。

「にがつ」その時、エスティルが目を覚ました。

「大丈夫か？」

「うう……少し頭が……でも、平氣です。私、一体……」

「突然倒れたんだよ。何か身に覚えないか？」

「もしかしたら、エアルに酔つたのかもしれません」

「はい、そのエアルです」

「濃度が濃いエアルは人体に悪影響を与えるんだ。エステル、大丈夫か？」

警備から帰ってきたシンクがユーリに説明した。

「はい、大丈夫です」

「ふうん、だとすると呪いの噂つてのはそのせいなのかもな」

ユーリが納得していると、エステルが立ち上がった。

「倒れたらばかりなんだ、もう少し休め」

「そりはこきません。早くフレンに追いつかないと」

「また倒れて、今度は一晩中起きなかつたらどうするんだよ」

「でも……そうですよね。ごめんなさい……」

\*

一休みした後、ユーリ達は再び森を進んだ。  
もつすぐ出口とこつとこひで、

「グルルルルル……」

「ラピードが草むらに向かって威嚇していた。

すると草むらがガサガサと音がした。

「ん？」

ユーリとシンク、エスティルは草むらの方を向いた。

「エッグベアめ、か、覚悟！」

いきなり、草むらから小柄な少年が飛び出してきた。自分よりも大きい剣を振り回しながら。

「うわっ、とつとつ！」

回り続ける少年にユーリはタイミングを見て、二バンボシで、少年の武器に攻撃した。

「うああああっ！あうっ！う、いたたた……」

回っていた少年は転んだ。  
転んだ少年にラピードが近づいた。

「ひいいつーボ、ボクなんか食べても、おいしくないし、お腹壊す  
んだから」

「ガウツ！」

「ほ、ほほほんとに、たたたすけて。さやあああ～～～！～！」

「忙しいガキだな」

「何なんだコイツ」

呆れているゴーリとシンク。エステルは少年に近づいた。

「だいじょうぶですよ」

「あ、あれ？魔物が女人の人！」

「そんな訳ないだろ」

「つたぐ。なにやつてんだか」

\*

「ボクはカロル・カペル！魔物を狩つて世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

先ほどの少年、カロルは自己紹介した。

「オレは、ゴーリ。それにエステルとシンク、ラピードだ」

ゴーリがみんなを代表して自己紹介した。

「んじゃ、そういうことで」

「あ、え？ ちょっとユーリ、シンク！」

ユーリとシンクは歩きだした。

「えと、『めんなさい』

「へ？ ……って、わ～待つて待つて待つて！」

カロルは歩きだしたユーリ達の前に急いで出た。

「3人は森に入りたくてここに来たんでしょう？ なら、ボクが……」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

「へ？ うそー？ 呪いの森を？ あ、なら、エッグベア見なかつた？」

「いや、見なかつたと思つが

「そつか……なら、ボクも戻ろうかな……あんまり待たせると、絶対に怒るし……うん、よし！ 3人だけじゃ心配だから、『魔狩りの剣』のヒースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよー。」

カロルはそう言つと、自分の鞄を見せる。

「ほらほら、なんたつてボクは、魔導器だつて持つてるんだよ」

カロルはそう言つが、ユーリにエステル、シンクもラピードも魔導器を持つてゐる。

「あ、あれ、3人共なんで魔導器持つてるのーな、ならこれでどうだ！」

そう言ってカロルは少し厚い本を見せた。  
中には魔物の情報などが書いてあった。

「魔物の情報か。だが、途中から白紙だぞ？」

「こ、これからどんどん増えていく予定なのー。」

ユーリとシンクは本に魔物の情報を書き込んでいた。

「ちょっとーねえ、勝手に書き込まないでよー。」

「Hースの腕前も、剣が折れちゃ披露できねえな」

「いやだなあ。じんなのただのハンデだよ。あれ?なんかいい感じ  
?」

カロルは折れた武器を振りながら言った。  
ユーリ達はカロルを置いて行こうとした。

「ちょ、あ、方向わかつてんのー?ハルルは森出て北の方だよ。も  
お、置いてかないでよー」

カロルもユーリ達についていった。

\*

ユーリ達が先ほどまでいた魔導器の場所では…

魔導器が光出した。

そこに赤いオーラ放つ剣を持った男が剣を掲げる。

男の周りには謎の魔法陣が展開された。

クオイの森 倒れる姫（後書き）

次回はハルルの街！

エッグベア戦も含めた話にしたいと思います。  
お楽しみに！

感想もお願いします！

## 花の街ハルル 樹を生き返らせるため…（前書き）

今回はハルルの街の話です。  
長くなつてしましました。

あと、少しばかり、デビルメイクライの設定組み込みました。

## 花の街ハルル 樹を生き返らせるため…

ユーリ、エスティル、シンク、ラピードはクオイの森で出会った少年、カロルと共に花の街ハルルに到着した。しかし街には結界が張られていなかつた。

「ここがハルルなんですね？」

「うん、そうだよ」

「IJの街には結界がないのか？」

「ユーリとエスティルはこの街は初めてだつたな。この街の結界魔導器は樹についているんだ」

「魔導器の中には植物と融合して、有機的特性を身につけることで進化をするものがある、です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

エスティルが説明すると、ユーリは街の様子を見た。街の住民の中にはケガをした人が多いくいた。

「役に立つてねえみたいだけど」

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ちよつび今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて……」

「結界魔導器がやられた…といつところか?」

「うん、魔物はやつつけたけど、樹が徐々に枯れはじめてるんだ」

そこにカロルの前を通りすぎた女の子がいた。

「あつー。」

「どうしました、カロル？」

「じめんー用事があつたんだーじゃあねー！」

そう言つてカロルは走つていった。

「どうしたんだろうな？」

「さあな。勝手に忙しいやつだな。エステルはフレンを探すんだよな……」

エステルはヨーリが言い終わる前にケガをした人達に駆け寄つた。

「まつたく、大人しくすることができないのかアイツは」

「ああ、それにフレンはいいのかよ」

そう言つてヨーリとシンクはエステルのところまで歩み寄つた。

「わたしに、皆さんの手当をさせてください」

「なんと、治癒術をお使いになるのかー？」

エステルの言葉に長老らしき老人が驚きの声を上げた。

「ええ、それはぜひとも……あ、いや、ですが、私たちお金の方は  
……」

「そんなのいりません」

そう言つてHスティルはみんなのケガを治癒術で手当しました。

「ありがとうございますー本当にありがとうございますー。」

「いえ、そんな、ぜんぜん……」

「いやほや、これほど治癒術があつたなんて……」

「なんとお礼を言えばいいか」

Hスティルがみんなに感謝されてるのを見ると、シンクは離れようとしていた。

「シンク、どう行くんだよ?」

「ハルルの樹を少し見てくる」

「やうか。オレは少ししたら行く」

「わかった」

シンクはコーリ達と別れた。

\*

シンクはハルルの樹を見ていた。  
樹は徐々に枯れようとしていた。  
ふと、シンクは足下の土を見た。そこだけなぜか色が違っていた。

「これは……魔物の血か?」

シンクは土を見て呟いた。

「シンク。どうだ? 樹は」

「ユーリ……エステルもか」

そこにユーリとエステル、ラピードがやつてきた。

「お前達はこれからどうする?」

「わたしは、フレンが来るまでケガ人の治癒を続けます」

「なあ、どうせ治すなら結界の方にしないか?」

「え?」

ユーリの言葉にエステルとシンクは首を傾げた。

「魔物が来れば、またケガ人が出るんだ。今度はさつきのガキたち

が大ケガするかもしだねえ」

「それはそうですが……」

「どうやって結界を治すつもりだ?」

「こんなだけでかい樹なんだ。魔物に襲われた程度で枯れたりしないだろ?」

「それなら、土を見てみる。足下の土だけ変色している。恐らく魔物の血を土が吸ってしまって樹を枯らしているんだろう?」

「なんと…魔物の血が……」

そこに先ほどの辰とカロルがやつてきた。

「シンク、よくわかつたね」

「とにかくとは、カロルも知っていたんだな?」

「ま、まあね。……ボクにかかるば、こんなぐらうどいひとないよ」

「その毒をなんとか出来る都合のいいもんはないのか?」

ユーリがカロルに尋ねた。

「あるよ、あるけど……誰も信じてくれないよ……」

カロルは顔を俯かせて言った。

「なんだよ、言つてみなつて」

「パナシーアボトルがあれば、治せると思つただ

「パナシーアボトルか。ようす屋にあればいいがな

「行きましょ、ユーリ、シンク！」

\*

ユーリ、シンク、Hスティル、ラピードはよのす屋を訪れた。

「はいよ、いらっしゃい。今田は何がいり用で？」

「パナシーアボトルはあるか？」

「あい」「くと今切らしてゐるんだ」

「そんな……」

「素材さえあれば、合成できるだがね」

「何が必要なんだ？」

『『Huggベアの丘』と『ニアの実』『ルルリHの花びら』の3つ

だ。けど、パナシーアボトルを一体、何に使つんだ?先日も回じことを聞いてきたガキがいたんだが」

「ハルルの樹を治すんです」

「え? パナシーアボトルを樹に使つなんて、聞いたことないけどなあ

「なるほど… カロルがクオイの森でエッグベアを探していたのはそう」「う」「う」とか……」

「あの、ニアの実とはどんなものなんですか?」

「森でオレが食つてたあの苦い果実だよ」

「ルルリHの花びらは?」

「この街の真ん中にハルルの樹があるだろ? あれの花びらさ。普通なら魔導樹脂をつかうんだけど、このあたりにはないからね。ルルリHの花びらは長が持つてると思つから聞いてみてよ」

「わかつた。素材が集まつたら、また来る」

ユーリ達はそつと音つてよろず屋をする。  
そして、隠れていたカロルに話し掛けた。

「カロル、クオイの森に行くぞ」

「え?」

「森で言つてたろ? エッグベアかぐ」って

カロルは少し驚きの表情を浮かべる。

「パナシーアボトルで治るつて信じてくれるの……？」

「お前が嘘をついてるよつには見えない。だから、俺達はお前の言葉を信じる」

「シンク……も、もう、しょうがないな。ボクも忙しいんだけどね~」

カロルはいつもの調子に戻った。

「決まりですね! わたしたちで結界を直しましょう」

「エスティルも来るの?」

「フレンという男を待たなくていいのか?」

「治すなら樹を治せつて言つたのはヨーリです」

「なら、フレンが戻る前に樹治して、びびらせてやるわぜ」

ヨーリ達は再びカロルも加わり、クオイの森に向かつた。

\*

（クオイの森）

「ねえ、疑問に思ってたんだけど、三人……ラピードもなんだけど、なんで魔導器持ってるの？」

カロルが森に入った直後に尋ねた。

「普通、武醒魔導器なんて貴重品持っていないはずなんだけだな」

「カロルも持つてんじやん」

「ボクはギルドに所属してるし、手に入れる機会はあるんだよ。魔導器発掘が専門のギルド、『遺構の門』のおかげで出物も増えたし  
ね」

「ほお、遺跡から魔導器を発掘するギルドもあるのか」

「うん、そもそもしなきや帝国が牛耳る魔導器を個人で入手するなんて無理だよ」

「古代文明の遺産、魔導器は、有用性と共に危険性を持つため、帝国が使用を管理している、です」

エスティルが説明する。

「やつすがて独占になつてゐるけどな」

「確かに」

「そ、それは……」

「で、実際のと「どうなの?なんで、持つてんの?」

「オレ、冒騎士団にいたから、やめた餞別にもうつたの。ハッピード  
のは、前の「主人様の形見だ」

「餞別つて、それ盗品なんじや。……えと、エステルは?」

カロルは次にエステルに尋ねた。

「あ、わたしは……」

「貴族のお嬢様なんだから魔導器くらい持つてゐつて」

「あ、やっぱり貴族なんだ。ユーリと違つて、エステルには品があ  
るもんね」

「「つぬせえ」

「じゃあ、シンクは?」

「俺は……わからない?」

「え? ど? こ? い? と?」

「カロルには話していませんでしたね。シンクは記憶喪失なんです

よ

「えつ？ そつなの？」

「ああ、3年前より以前の記憶はない。覚えていたのは名前とこの刀の名前くらいだ」

シンクは闇魔刀を見せながら言った。

「そついえばその刀、なんて名前なの？」

「闇魔刀だ」

「 「 「 」 」 」

シンクの言葉に、カロルとエステルは驚く。

「どうしたんだよ？ そんなにすゞいのか？」

「すゞいも何も、闇魔刀って言つたら、古代ゲライオス文明の伝説の英雄『スパーーダ』の持つていた剣の一つだよ！」

「英雄『スパーーダ』。強大な魔物達を自分の持つ三つの剣で、一人で倒したと言われる伝説の剣士、と本で見たことがあります」

「ふうん。英雄ね」

「俺にはよくわからない。今はニアの実とエッグベアの爪を探すことを先決にしよう」

シンクは話題を変えて先に進んだ。

(スパーーダか……)

『スパーーダ』が自分の記憶に関わっているのではないかと、シンクは疑問に思った。

\*

ユーリ達は前にエステルが倒れた魔導器のある場所に着いた。そこでユーリは落ちていたニアの実を拾った。

「あとは、エッグベアの爪、だね」

「森の中を歩いて、エッグベアを探すんです？」

「それでは、多分見つからないと思うぞ」

「なら、どうすんだ?」

「ニアの実一つ頂戴。エッグベアを誘い出すのに使うから。エッグベアはね、かなり変わった嗅覚の持ち主なんだ」

ユーリはそれを聞くと、カロルにニアの実を渡した。

カロルはニアの実をいじりだした。

すると、ものすごい異臭が漂った。

「へれひーーーおまえ、へれひーーー。」

「ちょ、ボクが臭いみたいにー。」

カロルが近づこうとするが、ユーリ達は異臭で引く。

「先に立つからやれ！」

シンクがそう言つと、ラピードが倒れた。

「あ、ラピード、しつかりして」

「みんな警戒してね。こつエッグベアが来てもいいよつ。それに、エッグベアは凶暴な」とでも有名だから」

「その凶暴なやつの相手は、カロル先生がやつてくれるのか？」

「やだな、当然でしょ。でも、ユーリとシンクも手伝つてよね」

「わたしもお手伝いします。ほら、ラピードも」

エスティルが介抱していると、ラピードはやつと立ち上がった。

「それじゃ、これで森の中を歩いてみるか

シンクの言葉でユーリ達はカロルを先頭に歩きだした。

\*

『ガアアアアーー!』

森を歩いていると何かの叫び声が聞こえた。  
それを聞いたカロルはユーリの後ろに隠れる。

「さ、気をつけて、ほ、本当に凶暴だから……！」

「そう言つてる張本人が真っ先に隠れるな」

「エ、エースの見せ場は最後なの！」

そう言つてると茂みから出てきたのは、タンポポの形をした植物型  
のモンスター、プチプリだった。

「……これは、違いますよね」

プチプリが去ると、次に現れたのは、巨大な腕を持つ熊の魔物、エ  
ッグベアだった。

「うわああつ！」

「」「これがエッグベア……？」

エスティルが言うと、カロルは頷く。

「なるほど、カロル先生の鼻曲がり大作戦は成功つてわけか」

「へ、変な名前つけてないでよ！」

「そういうセリフは、しゃきっと立つて言うもんだ」

ユーリはそう言って、二バンボシを抜く。

「来るぞ！」

闇魔刀の柄を握っているシンクが叫ぶと、エスティルとカロルとラピードも武器を構えた。

そしてエッグベアは巨大な腕を振り回した。

4人は散開して避けた。

「蒼破刃！」

ユーリは蒼破刃を放つがあまり効いていない。

「紅蓮斬！」

シンクは闇魔刀を抜き、炎を纏った斬撃を放った。  
エッグベアは少し仰け反る。

「臥龍アッパー！」

カロルはハンマーでアッパー攻撃をしたが、エッグベアは巨大な腕で防御した。

そしてエッグベアは腕を振り回した。

「うわー！」

カロルは吹き飛ばされる。

「大丈夫ですか！聖なる活力ここに、ファーストエイド！」

エステルが駆け寄り、治療術で治した。

エッグベアがカロルとエステルに向かおうとした。

「ガウツ！」

ラピードが剣でエッグベアの背中を切る。エッグベアはラピードに視線を向けた。

「今だ！」

「わかつてゐ！」

シンクとユーリは隙をついて左右から攻撃をする。

「双牙掌！」

「風牙一閃！」

ユーリは二バンボシで斬り付けたあと、右手の拳でアップバーを繰り出し、シンクは風を纏つた闇魔刀で一閃した。

『グオオオ……』

エッグベアは力尽き倒れた。

「カロル、爪取つてくれ。オレ、わかんないし」

「え! ? だ、誰でもできるよ。すぐはがれるから」

カロルが言つと、ヨーリ達はエッグベアに近付く。

わたしにも手伝わせてください……うう

エスティルとシンケは周囲の警戒など

二〇一

わが二た

シルと二ヶ月は周りを尋ね形した

「うわああああ!!」

後ろからカロルの叫び声が聞こえ、振り向くと、カロルはガクガク震えていた。

「驚いたフリが上手いなあ、カロル先生は」

「あ、うう……まひたか……あ、あうへ、あ、まひたか……」

「ゴーリ… おまつからかつたな。」 いつかも驚いた

「悪い悪い」

セウトはゴーリはエッグベアから爪を剥ぎ取った。

「セウト、床のいぢめ」

セウトはゴーリ達は森を出口まで歩いた。

\*

ゴーリ達が森の出口にさしかかったところで、

『ゴーリ・ローウェル！名無しの男！森に入ったのはわかっている！素直にお繩につけいー』

奥からショガーン隊のルブランの声が聞こえた。

「この声、冗談だろ。ルブランのやつ、結界の外まで追つてきやがつたのか」

「名無しの男とは、俺のことか？」

「セウトなんじやねえのか？おまえ、あいつらに名前教えてないしな」

「え、なに？誰かに追われてんの？」

「ん、まあ、騎士団にやけっと」

「またまた、元騎士が騎士団になんて……」

「信じたくないだらうが、ゴーリの言つてゐることは事実だ」

「え、え、ええ～～！」

カロルが叫ぶと、

『す、素直に出でくるのである』

『い、今ならボクるのは勘弁してあげるのだ』

更にアーティールとボッコスの声も聞こえた。

『尊』ときには怯えるとは、それでもシュヴァーン隊の騎士か！』

「……ねえ、何したの？器物破損？詐欺？密輸？ドロボウ？人殺し？火付け？」

「脱獄だけだと思つんだけど……」

「とにかく今は逃げよ！」

ゴーリとシンクは林の草を使って道を阻んだ。

「これでよし」

「だな」

「だ、ダメですよー。無関係な人にも迷惑になりますー。」

「『』は呪いの森と言われているんだから、大丈夫だろ?」

そう言つてヨーリとシンク、ラピードは森を出ようとした。エスターも後に続いた。

「わ〜、待つてよ〜！」

置いてかれたカロルも走つて追い付いた。

\*

ハルルの街に着いた頃には夜となっていた。  
ヨーリ達は長からルルリエの花びらをもらい、ようす屋を訪れた。

「おっ、戻ってきたか。材料は揃つてるか?」

「ちゃんとあるよ」

そう言つてカロルは、素材を渡した。

「よし、作業に取り掛かる

店主はその後、パナシーアボトルを持って出てきた。

「パナシーアボトルの出来上がりだ」

「これで毒を浄化できるはず！早速行こうよ！」

カロルの言葉で4人は樹に行つた。  
樹には街の人たちが集まる。

「おおっ、毒を浄化する薬ができましたか！」

「カロル、任せた。面倒なのは苦手でね」

「え？ いいの？ ジャあボクがやるね！」

カロルはパナシーアボトルを受け取り、樹に向かつた。

「カロル、誰かにハルルの花を見せたかったんですね？」

「恐らくはな」

「ま、手遅れでなきゃいいけど」

カロルはパナシーアボトルをかけた。  
樹の毒が浄化されていく。

「お願いします。結界よ、ハルルの樹よ、よみがえってください」

しかし、ハルルの樹には何の変化も起きなかつた。

「そ、そんな……」

「うそ、量が足りなかつたの？それともこの方法じゃ……」

カロルは樹がよみがえらなかつたことに困惑している。

「もう一度、パナシーアボトルを！」

「それは無理です。ルルリ工の花びらはもう残つていません」

「そんな、そんなのつて……」

諦めきれないエステルは樹の前に立ち、両手を合わせ、祈つた。

「お願ひ……」

すると、エステルの周りに光の粒子が現れた。

「エステル……」

「あれは……」

光の粒子が樹を覆つた。

「咲いて……」

なんと、信じられないことに樹が生き返つたように花を咲かせ、結界が復活した。

街の人々は驚きを隠せなかつた。

「す、すゞ……」

「い、こんなことか……」

「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……」

「あり得ない……でも……」

エステルはその場で膝を下ろす。

「はあ……はあ……」

エステルは荒い息遣いをする。

「ありがとうございます。これで、まだこの街も、やつていけます

……」

長はエステルに礼を言つた。

「わ、わたし、今何を……？」

「……すげえな、エステル。立てるか？」

ユーリが尋ねると、エステルは立ち上がる。

「ユーリ」

コーリとカロルはハイタッチする。

「シンクも」

「あ、ああ……」

シンクもカロルとハイタッチした。

「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、ビックリだらうな。  
……まあみる」

「コーリとフレンって不思議な関係ですよね。友達じゃないんですね  
？」

「ただの昔馴染みってだけだよ」

「ライバルと言つた方がいいんじゃないかな？」

「そりゃ、言えてるな」

「……」

ラピードがコーリたちに近づき、ある方向を向いた。そこには城で  
会つた赤目の中たちとザギがいた。

「の人たち、お城で会つた……」

「え? なにな? え? うしたの急に!」

「え? なにな? え? うしたの急に!」

ゴーリ達は街から出ようとした。

「面倒な連中が出てきたな」

「「ルイで待つていれば、フレンも戻つてくるのに」

「そのフレンって誰?」

「「ヒステルが片想にしてる帝国の騎士様だ」」

ゴーリとシンクは同時に言つた。

「ええつ……」

「ち、違います……」

「あれ? 違うのか? ああ、もうアキてるひととか」

「もう、そんなんじゃ ありません。といふかシンクも笑わないでください!」

「ククッ……すまない。おかしくてな……」

「ま、なんにせよ、街から離れた方がいいな。シンク、アスピオってのは、どこにあるんだ?」

「東つて言つたら、フレンが行つたところですね」

「東つて言つたら、フレンが行つたところですね」

「せういえばそつだな。とりあえず、今は急いでこりを出た方がいいな」

その言葉にシンクとエステルも頷く。

「待つてくださいれ」

セヒロ長がやつてきた。

「花のお礼がしたいので、我が家へおいでください」

「すまない長。今は一刻も早くこの街から出なければならんんだ」

シンクが長の誘いを断つた。

「ですが、何かお礼をしなくては私の気持ちが収まりがつきません」

「なら、いひじよう。今度遊びにきたら、特等席で花見をさせてくれ

「あ、それいいですね! とても楽しみです!」

「……わかりました。その時は腕によつをかけて、おもてなしをさせていただきます」

「サンキュー、んじやあまたな」

セヒロ長はゴーリ達は街を出た。

「せういや、カロルはどうすんだ?」

「港の街に出て、トルビキア大陸に渡りたいんだけど……」

「それじゃ、」  
「お別れか」

「えー？」

「カロル、ありがとな。楽しかったぜ」

「お氣をつけで」

みんなの言葉にカロルはあわあわしていた。

「あ、いや、もうひとつと一緒に歩いて行こうかなあ

「なぜだ？」

「やっぱ、心細いでしょう？ボクがいないとさ」

「ま、カロル先生、意外と頼りになるもんな」

「では、みんなで行きましょう」

再びカロルも加わってアスピオに向かうことにになった。

「とにかく、あのザギとかいうやつもいるからな。来る前に」  
「出よ！」

シンクの言葉にみんな頷いた。

各自の目的のために、ユーリ達はアスピオへ向かった。

花の街ハルル 樹を生き返らせるため…（後書き）

次回は学術都市アスピオ。

よつやくりタを出せる！

お楽しみに！

感想もお願いします！

## 学術都市アスピオ 再会ある一人（前書き）

今回かなり長い！

今回はアスピオ～シャイコス遺跡～アスピオという流れです。  
やつとりタを出せた！

## 学術都市アスピオ 再会する一人

ユーリ達はハルルの街の東にあるアスピオに到着した。

「ユリがアスピオだ」

「薄暗くてジメジメして……おまけに肌寒いところだね」

「街が洞窟の中にあるせいですね」

「太陽見れねえと心までねじくれんのかね、魔核盗むとか」

「……とりあえず行くぞ」

シンクを先頭に入り口に行く。

行こうとするとそこにいる騎士に止められた。

「通行許可証の提示をお願いします」

「許可証……ですか……？」

エスティルが首を傾げる。

「ユリは帝国直属の施設だ。一般人を簡単に入れられるわけにはいかない」

「そんなの持ってるの？」

「持つてねえよ、シンクは？」

「残念だが、持っていない。中に知り合いがいるのだが、通してくれないか？」

シンクが前に出て尋ねた。

「正規の訪問手続きをしたなら、許可証が渡つてているはずだ。その知り合いとやらからな」

「いや、何も聞いていない。入れないのであれば、呼んでもらえないか？」

「その知り合いの名は？」

「リタ・モルデイオだ」

シンクの言葉に騎士達は驚いた。後ろにいるコーリも驚いていた。

「モ、モルデイオだと…？」

騎士達は一度お互いを見合つ。

「や、やはり駄目だ。書簡にてやり取りをし、正式に許可証を交付してもらひえ」

「ちえ、融通きかないんだから」

カロルの言葉に騎士は武器を構える。カロルはコーリの後ろに隠れた。

「あの、フレンがこの城の騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「施設に関する一切は機密事項です。些細なことでも教えられません」

「フレンが来た目的も？」

「わざわざですか？」

「……とにかく、フレンはここに来たんですねー。」

エスティルの言葉に騎士は慌てる。

「し、知らん！ フレンなんて騎士は……」

「じゃあせめて伝言だけでもお願ひできませんか？」

「やめとけ、ここから向こうにも時間の無駄だつて」

そう言つてゴーリ達は入り口から離れた。

「冷静に行こうぜ！」

「でも、中にはフレンが……」

「諦めちゃつていいの？」

「絶対に諦めませんー！ 今度は必ずフレンで会つたのです！」

「オレはモルディオのやつから魔導器取り返して、ついでにぶん殴

つてやる

「ゴーリ……もしそのよつなじとをしたら、お前を斬る」

シンクはさう言いながら、闇魔刀に手をかける。

「わかつたよ。んで、シンク、他の出入り口知つてゐるか?」

「……つこへーー」

ゴーリ達はシンクにつこへーーいた。

\*

ゴーリ達はシンクの案内で違う道の扉についた。

ゴーリは扉に手をかけたが、開かない。

「都合よく開こちやいないか」

「壁を越えて、中から開けるしかないですね」

「早くも最終手段か……」

「フレンが来るのを待ちましょー」

「フレンは出てきたとしても、モルティオは出でこないだろ」

「それに、待つていたら口が暮れてしまひや」

ヨーリ、シンク、エスティルが話をしていると、カロルが扉の前で鍵をいじっていた。

「よし、開いたよ」

「え？ だ、ダメです！ そんなドロボウみたいな」と…」

「……おまえのいるギルドって魔物狩るのが仕事だよな？ 盗賊ギルドも兼ねてんのか？」

「え、あ、うん……。まあ、ボクぐらいだよ。こんなことまでやれるのは」

「それもやうだな。もし本当だつたら魔狩りの剣の品格が疑われる」

「んじゃ、行くか」

やつぱりヨーリとシンクは中に入らうとした。

「ほんとこ、ダメですかってー。フレンを待ちましょ！」

「フレンが出てくる偶然に期待できるほどオレ、我慢強くないんだよ」

「右に同じだ」

「…………わ、わかりました！わたしも行きます！」

エステルは渋々了承し、中に入った。

中にはローブを着た人間がいっぽいいた。

「なんかモルティオみたいなのかいっぽいだな」

「まあ、ここの人間は研究ばかりしかしないからな」

エステルは近くにいた男性に話かけた。

「あの、少しお時間よろしいですか？」

「なんだよ？」

「フレン・シーフォといつ名の騎士が訪ねてきませんでしたか？」

「フレン？ああ、あれか、遺跡荒らしを捕まえるとか言っていた……」

「今、どうして…？」

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

「そ、そうですか。……」めんなさい

「じゃあ、失礼するよ」

そう言って男は立ち去った。

「さて、シンク、モルティオはどうしているんだ？」

「なぜ俺に聞く？」

「おまえ、帝都の牢屋で言つてただろ？モルテイオとは知り合つて」

「わつじえば言つてたな。奥の小屋に確かにいるはずだ。ついてこい」

シンクの案内でモルテイオの小屋に向かつた。

\*

「うるだ」

「『絶対、入るな。モルテイオ』。間違いないな」

ユーリはドアを開けようとしたが鍵がかかっていて開かない。次に扉を叩いた。

「普通はノックが先ですよ……」

「いないみたいだね。どうする？」

「それはないな。あいつは年中小屋にこもっているからな」

「なら、ボクの出番だね」

「え……？出番つて……」

再びカロルは鍵をいじり始めた。

「それもだめですって！」

エステルが止めるが、すでに鍵が開けられた。

「ま、ちょろいもんだね」

ユーリ、シンクと中に入つていった。

「待つて！ボクも行くよ～」

「あ、待つてください！もう、どうしていい……」

カロルとエステルも中に入った。

中には本が沢山積まれていた。

エステルは玄関で立つていて、ユーリとカロルは周りを見ていた。すると、ラピードが突然反応する。すると、ムクッと本の山からロープを纏つた人が現れた。

「ぎゃああああ～～～っ！あ～、あ～、あうあうあう」

カロルは驚いてユーリの後ろに隠れる。

「…………」

ロープ姿の人物はいきなり魔術の詠唱を始める。ヨーリはカロルを置いてその場を離れる。

「え？あれ、ちょっとー。」

「アーロボウは……」

「うわわわっ、待つてえっ！」

「ぶつ飛べ！」

ロープ姿の人物はファイアボールを力口ル目がけて放つた。

「……………」

爆発が起きた。

ローブ姿の人物はフードが外れて、少女の顔が見えた。

「久しぶりだな、リタ」

シンクカロルの前に現れ、少女に声をかけた。

「え……？」

少女、リタは驚いた顔をした。

「な、な、何でシンクがここにいるのよ……？」

「それは……戻ってきた」

シンクの言葉に、リタは顔を俯きながらブルブルと震えた。

「三年も……三年も勝手にどうか行つて……」の

「え？ リタ？」

リタは再び魔術の詠唱を始めた。

「のわつ！」

「何でボクもおおおおおー!」

リタはシンクに向かつてファイアボールを放つた。力口ルもそれに巻き込まれた。

「げほげほ。ひどい……」

「アモリ、アモリ…やつすだリタ…」

カロルとシンクは咳き込みながらリタに言った。

「」んだけやれりゃあ、帝都で会つたときも逃げる必要なかつたの  
にな」

ユーリはリタの背後に回り、刀を抜いた。

「まあ、逃げて何よ。何で、あたしが逃げなきゃならぬのよ」

「リタ、その事に関してだが……」

シンクはリタに近寄り、今までの経緯をリタに話した。

「ふうん。つまりあたしの名を語った偽物が、帝都の下町で水道魔導器の魔核を盗み、それを追つてきたこいつらと、あなたは一緒に来たと？」

「セウニス」とだな

話している二人の間にエステルが入り、リタに会釈した。

「な、なによ、あんた？」

「わたし、エステリーゼと言います。突然、お邪魔してごめんなさい……ほら、コーリとカロルも」

「ノーノーごめんなさい」

カロルは謝った。

「んで？おまえがモルディオなんだろ？」

「確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ」

「で？実際のところどうなんだ？」

「だから、そんなの知ら……あ、その手があるか……ついて来て」

「はあ？ おまえ、意味わからんねえって、まだ話が……」

「コーリ、ここはリタに従つた方がいい」

「そうよ。シャイロス遺跡に盗賊団が現れたって話、せつかく思い出したんだから」

「盗賊団？ それ本当かよ？」

「コーリはリタをまだ疑つてこる」

「協力要請に来た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ」

リタは小屋の奥に行つた。

「騎士つてフレンのことじょつか？」

「だらうな。あいつフラれたんだ」

「やういえば、外の人も遺跡荒らしがどうとか言つてたよね？」

「ということは、その盗賊団が魔核を盗んだ犯人と考えるべきだな」

「さあなあ……」

コーリ達が小声で話していると、リタがロープを脱ぎ捨てた姿でやつてきた。

「相談終わった？ ジャあ行い」

「とか言つて、出し抜いて逃げるなよ」

「コーリ、リタはそんなことせじない」

「コーリ、ここは行ってみましよう。フレンもこるみたいですし」「捕まる、逃げる、ついてくる、どすんのかわいいと決めた」

「わかった。行つてやるよ」

「シャイコス遺跡は街を出てからに東よ」

こつしてコーリ達は、リタも加わり、盗賊団がいるといつシャイコス遺跡に向かうことになった。

「シャイコス遺跡か……なつかしいな」

シンクは思に出したよつて言つた。

「あ、そういえばそうね。あん時は……！？」

リタはハツと思い出した。

三年前、シャイコス遺跡でシンクに抱き締められたことを。リタの顔は次第に赤くなつた。

「どうした、リタ？」

「な、な、な、なんでもないわよ……」

「」「」「?」「」「」

シンクだけでなく、ユーリ達も首を傾げた。

\*

「シャイコス遺跡」

「ユリがシャイコス遺跡よ」

「騎士団の方々、いませんね」

シンクがシャイコス遺跡の入り口の近くに、無数の足跡を見つけた。

「ユの足跡、まだ新しいな。数もかなりあるな」

「騎士団が、盗賊団か、その両方かつてと」「だ」

「さつと、フレンの足跡もユの中にあるんだしじょうね」

「そうかもな」

「ほら、ユリ。早く来て」

シンク、エステル、ユーリが足跡を見て話していると、いつの間にか進んでいるリタがいそぐように告げる。

「モルティオさんは暗がりに連れ込んで、オレラを始末する気だな」

「ユーリ、いい加減にしろ。リタはそんなことしない」

「底わなくていいわよ、シンク。その方があたし好みだつたかもだ  
し」

「不気味な笑みで回調しないでよ」

「な、仲良くなってしまつよ」

一行は一通り遺跡を探索するが、

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もつと奥の方でしょうか?」

「奥つて言つてもな」

「誰かいるよつて見えないよね」

「リタ、まさか地下の情報がもれてるんじゃないかな?」

「地下?」

「Uの遺跡には地下の入り口があるの。まだ一部の魔導士にしか、  
知られてないはずなのに……」

「それをオレらに教えていいのかよ?」

「しょうがないだろ。リタの潔白を証明するためだ。いいよな?」

「仕方ないわね」

「身の潔白ねえ……」

リタとシンクは、遺跡にあつた石像の横に移動して地面を見ていた。

「地面にこすれた跡があるね」

「発掘の終わった地下の遺跡ぐらう盗賊団にあげてめよかつたけど  
来て正解ね」

「なら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんじょ？」

カロルはそう言つて石像を両手で押すが、びくともしない。

「はあ、はあ」

「ここにゴーリとシンクも加わった。

「まう、行くぞ。もうひとがんばれよ」

「行くぞ」

「あ、う、うん……」

三人は押しだす。

すると地下に繋がる階段があつた。

「じゃ、行くわよ

\*

階段を降りたそこには、神殿のような遺跡があった。

「遺跡なんて入るの初めてです……」

「モー」、足元滑るから気をつけで……」

先へ進もうとするヒステルに、リタは注意する。ゴーリはその様子を見ている。

「なに見てんのよ

「モルディオさんは意外とお優しいなあと思つてね

「はあ……やつぱり面倒を引きつれてきた気がする。別に一人でも問題なかつたのよね……」

「リタはいつも、一人でこの遺跡の調査に来るんですか？」

「さうよ。三年前はかつてにどつか行つたバカと一緒に来たこともあるけど

「……」

リタはシンクを見ながら答えた。

「眼とか魔物とか、危険なんじやあつません?」

「ええ、やつ、ね……」

リタは俯きながらエスティルに答えた。

(なんかこんな会話…シンクともしたつけな…)

リタは思い出していた。

三年前、シンクが言った言葉を。

『そんな悲しきこと言ひな……』

初めて自分を心配し、理解してくれたシンクが、突然いなくなつたときは悲しみに打ち拉がれていた。

(許して…あげよつかな…もちろん、あいつが謝つたらだけど)

「リタ、どうしたのです?」

「う、うわっ、驚かせないでよー」

「おまえが返事しなかつたからじゃねえか」

コーリがそういひと、リタは考え込んでいたのに気づいた。

「……考え方してた、そんで、何?」

「先進まねえかつて」とだよ

「そ、そうね。行きましょ！」

リタは進み、ユーリ達もついていく。

\*

ユーリ達は遺跡の最深部まで進んだ。途中、ユーリはリタからソーサラーリングというアイテムをもらっている。  
最深部には、巨大な石像があった。

リタは真っ先に石像に近づいた。

「あ、おーー！」

「うわ、なにこれ？！これも魔導器？」

「らしいな」

「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器がほしいな

「ちょっと、不用意に触らないで！」

リタはユーリに注意すると石像を調べ始めた。

「この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ？「この子も、魔核がないなんて！」

すると、ラピードが人の気配に気が付く。

そこを見ると、そこにはローブを纏った人物が階上にいた。

「リタ、おまえの友達がいるぜ」

リタはユーリに言われると、ローブの人物に言った。

「ちょっとーあんた、誰よ?」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ! おまえたちこそ何者だ! ここは立ち入り禁止だぞ!」

「違うな。本当にアスピオの人間なら、ここにいるリタ・モルディオを知らないはずがない」

シンクがローブの人物に言った。

シンクの言葉にユーリ達は武器を構えた。

ローブの人物は人型魔導器に近づいた。

「くつ! 邪魔の多い仕事だ。騎士といい、こいつらといい!」

そう言うとローブの人物は人型魔導器に魔核をはめ込んだ。  
人型魔導器、ゴライアースは青い光を放ちながら動きだした。

「うつわーつ、動いた!」

ゴライアースは近くにいたリタを右腕で殴りつけた。  
リタは壁に叩きつけられた。

「「リタ…」」

シンクとエステルの声が重なる。

「エステル、俺達が引き付ける！その間にリタを！」

「わかりました！」

エステルはリタのところへ向かった。  
ユーリ、シンク、カロル、ラピードはゴライアースの攻撃を避けながら引き付けている。

「ちょっとーサボってないで手伝つてー！」

カロルはエステルとリタに言った。

「あー、もうしようがないわね！」

リタが目覚め、ローブの人物は逃げようとしていた。

「あたし、あのバカ追うからーここはあんたらに任せた！」

「任せたって、行けねえぞ！？」

「……ああーあのバカのせいで！…」

リタは舌打ちをしながら魔術の詠唱を始める。

「こいつをやるしかないか！」

「速攻ブツ倒して、あのバカを追うわよ！」

リタは自分の武器、サッシューを取出し、シンクは闇魔刀を抜く。

「来るぞ！」

シンクが言つと、「ゴライアースは暴れだした。

「こなんのが動くなんて……」

「あんたら、氣をつけて！相手は加減知らないんだから！」

「おまえも氣をつける、リタ！」

「わ、わかってるわよ！」

ゴライアースは両腕を地面に叩きつける。  
シンクとカロルは、うまく懷に入り込みかわす。

「風牙一閃！」

「爆碎ロック！」

シンクとカロルは「ゴライアースの足に攻撃を仕掛ける。「ゴライアースは仰け反る。

「ファイアボール！」

「スタートローク！」

「蒼破刃！」

そこにユーリ、エステル、リタの攻撃が当たり、ゴライアースは力尽きたように倒れた。

リタはゴライアースに駆け寄る。

「あとは動力を完全に絶てば……『メンね……』」

リタはゴライアースに謝りながら、魔核を取り出した。  
ゴライアースは完全に動きを止めた。

ユーリ達はさつきの男を追いつく。

「あなたも早くー。」

「でも、フレンは……」

「あんな怪しい奴がウロウロしてると、騎士団なんていねえ  
つて」

「じゃあ、もうフレンは……」

「恐らく、もうここにはいないだろ？、行こー。」

ユーリ達は歩き出す。

「あの子を調べたら、自立術式が解析できたのに……」

リタは残念な表情で言った。

「そのためにボクらを戦わせたの？」

「当たり前でしょ」

「極悪人だよ！」

「ドロボウ探しのついでに手伝つてもらつただけよ」

「口じゃなく足使えよ！！」

ユーリは怒鳴りながら先へ進んだ。

\*

ユーリ達は先ほど逃げたロープの男を追つた。

「あつ、いたよ！」

カロルが言つた方向を見ると、ロープの男がオタオタやゲゴゴに襲われていた。

「疾走居合！」

「ガウツ！」

シンクとラピードがゲゴゴ達を蹴散らした。

「魔核盗んで歩くなんじうじやねつがしら……」

「ひいー…やめてくれー…や、やめて、もひ、やめてー…俺は頼まれただけだ……。魔導器の魔核を持つてくれば、それなりの報酬をやるつて」

「おまえ、帝都でも魔核盗んだよな?」

「帝都へお、俺じゃねえ!」

「といひことは、他に仲間がいるといひことだな?」

「あ、ああーー、テテツキつて野郎だ!」

「そいつがリタの偽物か……」

「そいつはどこ行った?」

「今頃、依頼人に金をもらいに行つてるはずだ」

「依頼人だと……どこのどいつだ?」

ゴーリはロープの男を睨みながら尋ねた。

「ト、トリム港にいるつてだけで、詳しいことはしきねえよ。顔の

右に傷のある、隻眼でバカに体格のいい大男だ」

「そいつが魔核を集めているといひことが……」

「ソーサラーリングもどいかで盗んだのね」

「ぬ、盗んでいねえ！仕事の役に立つって依頼人に渡されたんだ！」

！」

「うそね。コソ泥の親玉なんかに手に入れられるものじゃないわ」

「ほ、本当だ！信じてくれよ！」

「なんか話が大掛かりだし、すゞしい黒幕でもいるんじゃない？」

「カロルのいう通りだな。これはただのコソ泥集団にしては大掛かりすぎる」

「騎士も魔物もやり過げ」して奥まで行ったのに一ついてねえ、ついてねえよっ！」

「騎士？やはりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！くそーーあの若造めー！」

「……うつむけー！」

地団駄を踏んでいる男にしびれを切らし、リタはサッシュを男に叩きつけた。

男は気絶して倒れた。

「ちょ、リタ、気絶しちゃったよ……どうすんの？」

「後で街の警備に頼んで拾わせるわよ

「それじゃあ、アスピオに戻るか

ヨーリ達は男を置いて、アスピオに戻った。

\*

一行はアスピオに到着した。

「……肝心のフレンはいませんでしたね」

「その騎士、何者なの?」

「ヨーリの友達です」

「ふうん、あんたの友達ね。それは苦労するわ」

リタはジト目でヨーリを見た。

「なんだよ?」

「別に。で、なんでそいつがこの街にいるの?」

「ハルルの結界魔導器を直せる魔導士を探して来たらしい」

「ああ……あの青臭いのね……あたしのところにも来たわ

「フレン、元気そうでした?」

「元気だつたんじゃない?」

「ううわ、適当……」

「騎士の要請なら他の魔導士が動くだろうしもうハルルに戻ったんじゃない?」

「…………そんな…………」

エスティルは残念そうな表情を浮かべる。

「で? 疑いは晴れた?」

「帝都の魔核ドロボウも、デデッキという奴だ。リタはそんなことをする奴じゃない」

「私もそう思います」

「思ひだけじゃ、やつてない証明にはなりねえな

「ゴーリ……貴様、いい加減に……!」

シンクはゴーリの胸元をつかむ。

「いいわよ、かばわなくて。けど、本当にやつてないから

「ま、おまえはドロボウよりも研究の方がお似合いだもんな

ゴーリはシンクの腕を払い、歩き出す。

「ユーリは素直じゃないんですね」

「……変なやつ。警備に連絡してくるから、先にあたしの研究所戻つて。それと、シンク、これ」

リタはシンクに通行証を渡した。

「いい? あたしの許可なくどうか行つたら許さないからね」

「わかつてゐる」

\*

ユーリ達はリタの研究所でリタを待っていた。

ユーリとラップードは床で寝ていて、カロルは座り込んでいて、エステルはそわそわしていて、シンクは壁にもたれていた。

「フレンが氣になるなら黙つて出て行くか?」

「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶しないと……」

「なら、大人しくしている」

「ユーリは」のあと、どうするの?」

「魔核ドロボウの黒幕のここに行つてみつかな。『テテツキつてやつも同じと』行つたみたいだし」

「だったら、ノール港まで一直線だね！」

「トリム港つて言つてなかつたか？」

「知らないのか、ユーリ？ ノール港とトリム港は繋がつてゐるんだ。カブワ・ノールのノール港の隣にカブワ・トリムのトリム港があるんだ。途中にエフミードの丘がある。ハルルの街から西に進めばすぐだ」

シンクはユーリに説明した。

「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

「……じゃ、オレも一旦、ハルルの街へ戻るか。シンクはどうあるんだ？」

「……俺はここに残る。元々目的は、ここに戻るために戻ったからな

「やうか。じゃあ」」でよならだな」

そこでドアが開く音がした。  
リタが戻ってきたのだ。

「待つてるとは言つたけど……どんなだけへつりいでんのよ」

「あ、おかえりなさい。ドロボウの方はどうなりました？」

「わあ、今いる牢屋の中ひ～ひ～泣いてんじやない?」

「疑つて悪かつた

ゴーリは立ち上がり、リタに軽く謝罪した。

「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、いついちも収穫あつたから

「んじゅ、世話かけたな

「なに? もう行ぐの?」

「ゴーリ達はハルルに行く。急ぎの用があるからな

「あんたは?」

「ここに残る

「えつー?」

「元々せこに戻るためだつたからな。おまえにも心配かけたから  
な

「シンク……」

リタは自然と嬉しそうな表情になつた。

「んじゅ、やつこつ」と

「リタ、お世話をなりました」

ユーリ達はそう言つて研究所を出た。

残つたのは、リタとシンクだった。

リタは誰もいないと理解すると、シンクに抱きついた。

「リタ？」

「……心配……したんだから……この、バカシンク……」

リタは泣きながらシンクの背中に抱きついている。

「すまない、リタ」

「……でも、許してあげる」

「……あつがとい」

リタはシンクから離れるとい、涙を拭つた。

「それどうする?」

「え?」

「行きたいんじゃないのか?エスティル達と」

「ま、まあね。でも、あんたはいいの?」

「俺はリタにっこりくわ」

シンクの言葉に、リタは少し考え込む。

「ナニね。じゃあ行くわ」

「あ

シンクとコタはコーリ達を追つた。

\*

コーリ達は広場から出口に向かおうとしていた。  
そこでリタとシンクがやつてきた。

「見送りならいいでいいぜ

「わうじゅないわ。あたし達も行く

「え、な、なに黙ってんの?」

「まあか勝手に帰るなっていつこいつとか?」

「うそ

「うそ、そんな簡単に?」

「ここのかよ?シンクも

「俺はリタが行くならついていくぞ」

「あたしはハルルの結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れたままじやまづいでしょ」

リタが思いついたように言った。

「それなら、ボクたちで直したよ」

「はあ？ 直したってあんたらが？ 素人がビーフやつて？」

「よみがえらせたんだよ。バーンってHステ……」

「素人も、侮れないもんだぜ」

カロルの言葉を遮りユーリが言った。

「ふうん、ますます心配。本当に直ってるか、確かめにいかないと。つていうかシンク、知ってるなら教えなさいよ」

「すまない。ユーリ、いいか？」

「わかつたよ。勝手にしてくれ」

ユーリが呆れて答えると、エステルはリタに近づいた。

「な、なに！？」

「わたし、同年代の友達、はじめてなんですよー！」

「あ、あんた、友達つて……」

「よろしくお願ひします」

「え、ええ……」

「よかつたな、リタ。友達が出来て」

「か、からかうなー！」

こうして、シンクは再び加わり、リタが新しくメンバーに加わった。

**学術都市アスピオ 再会する一人（後書き）**

次回はハルルからエフミニアの丘までの話にします。

お楽しみに！

感想もお願いします。

## ハルル～エフミーの丘 それぞれの見てる世界（前書き）

今回はハルルからエフミーの丘までです。

それと今さうですが、この小説はDC3版をモデルにしています。

## ハルル～エフミドの丘 それぞれの見てる世界

ゴーリ達はリタも加えて、ハルルの街に戻った。  
相変わらずハルルの樹は満開だった。

「げえ、なにこれ、もう満開の季節だっけ？」

リタはハルルの樹を見て、驚きの声を上げる。

「へへ～ん、だから言つたじやん。僕らでよみがえらせたつて  
自慢気に言つカロルに、リタはカロルの頭を一発叩いた。そして、  
樹の方に走りだした。

「おお、皆さん、お戻りですか。騎士様のおつしゃつたとおりだ」

家から長の声がし、ゴーリ達は長に近づいた。

「あの……フレンは？」

「残念でしたな、入れ違いでして……」

「え～、また～」

「結界が直つていたことには大変驚かれていました」

「あの……どこに向かつたか、わかりませんか？」

「いえ……私には何も……ただ、もしもの時はと手紙をお預かりし

てこまか

長はそう言つと、コーリに手紙を渡し、一礼し、戻つていった。中を開けると、中には手紙と一緒にコーリとシンクの似顔絵の入った手配書が入つていた。

「え?」『これ手配書?』ってな、なんで?』

「ちよつと悪ひが過ぎたかな」

「い、いつたいどんな悪行を重ねてきたんだよ?』

「ところが、なぜ俺もだ?しかもコーリと回り5000ガルド...』

…

「これって……わたしのせい……』

「ひつや、ないだろ。たった5000ガルドって』

「脱獄にしては高すぎだよ!他にもなんかしたんじやない?』

「それで、手紙にはなんて?』

コーリはエスティルに手紙を渡した。

『僕はノール港に行く。早く追いついてこ!』

『早く追いついて!』ね。つたく、余裕だな』

『それから、暗殺者には気をつけようと書かれています』

「そいつ、狙われているのに気が付いていたんだな」

「なんか、しっかりした人だね」

「身の危険つてやつには気が付いてるみたいだけど、この先、どうする?」

「そうですね……」

「オレはノール港に行くから、伝言あるなら伝えてもいい

「それは……でも……」

エスティルは口籠もる。

「ま、どうするか考えときな。リタが面倒起こしてないかちょっと見てくる」

ゴーリはエスティル達と別れ、リタのいるハルルの樹に向かった。

\*

「なあ、カロル。そもそもその武器、どうとかしないか?」

シンクはカロルの持っている武器、カロリアンハンマーを見て言つ

た。

「え？ だ、大丈夫だよー。」れくらのハンデ、ハンデー。

「見栄を張るな。それに強い武器の方がかつこいこと思つぞ」

「え、そう？ しうがないな。シンクがそう言つなら……」

「なら、よろず屋に合成してもらおう」

「あ、じゃあ、わたしはここで待つてます」

「わかった。じゃあ、またあとでな」

シンクとカロルはエスティルと別れ、よろず屋に向かった。

「いらっしゃい。何か御用かい？」

「この剣を直してもらいたい」

「……これなら、素材さえあれば直せるよ

「何がいるんだ？」

「バジリスクのひこと大きなハサミがあれば一緒に合成できるよ

「……どちらも持つてないよ。どうある、シンク？」

「大丈夫だ。俺が持つてる」

そう言ってシンクはバジリスクのつまると大きなハサミを渡した。

「あこよ。ちよつと待つてな」

そう言って店主は奥に行つた。

「シンク、どうしたの？ あんな素材

「旅に出ていたときに魔物と戦つていたら、普通に手に入った」

「へ、へえ……わうなんだ」

そう話していると、店主が完成した剣、カロリアンソードを持ってやつてきた。

「はいよ。待たせたな。完成だよ」

「あれ？ 前よりいい感じ？」

カロルはカロリアンソードを振りながら感想を言った。

「よかつたな」

「うそ、ありがとうシンク！」

「じゃあ、Hスティルのところに行くか

\*

シンクとカロルがエステルのところに行くと、そこにはエステルの

周りにルブラン、アントワール、ボッシュがいた。

シンク達の後ろからコーリー、ラピード、リタがやってきた。

「さあ、今のうちに、エステル、ゼ様は我らのもとへ

「帝都まで一重にお送りするのである」

「あとではコーリーとあの男をとつ捕まえればいいのだ」

ルブラン達は歩いてきたコーリー達に気付いた。

「ここで会つたが百年間、コーリー・ローウェル、名無しの男ーそこになあ～れえ～！」

「今日はバカにしつこいな」

「昔からのよしみとは云々、今日もお詫びを容赦せんぞー。」

「コーリーとシンクは悪くありません。わたしが連れ出すように頼んだのですー！」

「ええい、おのれ、コーリー・エステル、ゼ様を脅迫しているのだなー！」

「全くエステルの話を聞いていないなコイツら」

「貴様も黙つていろのだ！」

「違います！これはわたしの意志です！必ず戻りますから、あと少し自由にさせてください」

「それはなりませんぞ！我々とお戻りください！」

「戻れません。わかつてください！」

どうあつてもエステルを連れ戻そうとするルブランと弓箭團がらないエステル。

「……」は致し方ない。どうせ罪人も捕えるのだから……

ルブランの言葉に、アデコールとボッコスはコーリ達に剣を向けた。

「これでおまえたちの自由も今日限り！」

「我々騎士団究極の戦闘術、『オーバーリミッシュ』でいくのである……」

「勝手に盗むなよ。騎士団のもんじゃないだろ！」

「黙れである！」

「オーバーリミッシュ……？」

カロルは首を傾げた。その質問にはシンクが答えた。

「戦闘時の能力を上げる技のことだ。見ていろ！」

シンクはまう言つて、アーティホールに近づき、斬りかかる。

「くはっ……！ いててであ～る……不意討ちとは卑怯であ～る…… もうガマンならないのであ～る……！」

「じへやつて、相手に攻撃を当てる、闘氣を上げていくんだ」

「あ、やつやう、思い出したわ。サンキュー、シンクー！ じで溜めた闘氣を一気に放出すれば……」

「ああ、行ぐぞ！」

シンクとゴーリは溜めていた闘氣を一気に解き放つ。すると、シンクとゴーリから青白いオーラを纏つていて見えた。それを見たカロル、エステル、リタは、

「うわっ、ゴーリもシンクも凄い……」

「二人とも、すげーです……」

「シンク、すげー……」

ゴーリとシンクを見て各自の感想を言つていた。

「これ以上、調子に乗せるな！」

ボッコスは槍を構えて、シンクに突つ込んでいった。

「一気に決める！」

シンクは難なくボッコスの突きをかわす。

「闇裂刃！」

シンクは闇魔刀を抜き、黒い障気を纏つた刃でボッコスを斬り付けた。

「まだまだあ～る！」

アデールも諦めずにユーリに攻撃をするが、ユーリは一バンボシで剣を弾いた。

「牙浪撃！」

ユーリは一バンボシで突き、その後に、アデールを殴り、吹き飛ばす。

「ええいつ！情けない！」

ルブランは部下を見た後、今度は自分が剣を抜く。その時、リタが魔術の詠唱をしていた。

「ちょ、リタ……」

カロルの言葉も聞かず、リタはルブラン達にファイアボールを放つた。

「戻らないって言ってんだから、さっさと消えなさいよ。」

リタはルブラン達に言い放つた。

「ユーリツ！シンクツ！の人たち…」

エステルが言つた方向を見ると、そこには赤目達がいた。  
赤目達もこちらに気付いた。

「やはり、俺達も狙われているな

「今度はなにつー」

「ど、どいつこいつ？」

赤目達を知らないリタとカロルは首を傾げる。

「話はあとだ！カロル、ノール港つてのはどうちだっけ？」

「え、あ、西だよ、西！エフミドの丘を越えた先に、カプワ・ノールはあるんだ！」

それを聞いたユーリ、ラピードは走りだす。カロルもそれについていく。

エステルは立ち止まつた。

「ほり、せつさと行く

「でも、わたし……」

「……あ～つ！決めなさい、本当にしたいのはどうち？旅を続けるのか、帰るのか」

「……今は、旅を続けます」

「賢明な選択ね、あの手の大人は懇願したってわかつてくれないのよ」

「なら、行くぞ！」

シンクの言葉に、エステルとリタも走りだした。

「騎士団心得ひとつ……』その剣で市民を護る『もうだつたよな？」

ユーリの言葉を聞くと、ルブラン達も赤目達に気づいた。

「その通りッ！－！いくぞ騎士の意地を見せよッ！－！」

そう言ってルブラン達は赤目達と対峙した。

「……ごめんなさい」

エステルは小さく咳き、ハルルの街を後にした。

\*

ルブラン達を退け、ユーリ達はエフリの元に着いた。

「エリがエフリの元？」

「エリ……だけど……」

カロルは空を見上げながら呟つた。

「おかしいな……結界がなくなつてゐる」

「エリに結界があつたのか？」

「うん、来るときにはあつたよ」

「人の住んでないところに結界張るとは、贅沢な話だな」

「あんたの思いす」じじやないの？結界の設置場所ならあたしが把握してるのはずだけど、知らないわよ

「リタが知らないだけだよ。最近設置されたって、ナンが言つてしま

「ナンとは誰だ？」

「し

「え……え、えっと……ほ、ほり、ギルドの仲間だよ。ボ、ボク、  
その辺で、情報集めてくる！」

「あたしも、ちょっと見てくれる」

そう言つてカロルとリタは行つてしまつた。

「つたぐ、自分勝手な連中だな。迷子になつても知らねえぞ」

「わたしたちも行きましょ」

「もうだな」

ユーリとシンク、エステルもついていく。  
そこには壊れた魔導器が横たわつていた。  
リタが魔導器に近づこうとする。

「こりひ、部外者は、立ち入り禁止だよ。」

「帝国魔導器研究所のリタ・モルディオよ。通してもうりつかり

「アスピオの魔道士の方でしたか！し、失礼しました！」

男はリタに一礼した。

リタは構わず、魔導器を調べ始めた。

「ああ、勝手をされでは困ります！上に話を通すまでは……」

そう言つと男は走つていった。

「あの強引や、オレもわけてもらいたいね

「ユーリには必要ないと思つや」

「三人とも、聞いて！」

そこにカロルがやつてきた。

「それが一瞬だつたらしいよ！ 槍でガツン！ 魔導器ドカンで！ 空にピューって飛んでいつてね！」

「……誰が何をどうしたつて？」

「竜に乗つたやつが！ 結界魔導器を槍で！ 壊して飛び去つたんだつてさー！」

「人が竜に乗つてか？」

「んなバカな」

「そんな話、初めて聞きました」

「ボクだつてそうだけど、見た人がたくさんいるんだよ。『竜使い』が出たつて」

「竜使い……ねえ。まだまだ世界は広いな」

『ちょっと放しなさいよ！ 何すんの！？』

魔導器の方を見ると、リタが騎士に取り押さえられていた。

「なんか騒ぎ起つしてるよ」

「！」の魔導器の術式は、絶対、おかしい！

「おかしくなんてありません。あなたの言つてゐることの方がおかしいんじゃ……」

「あたしを誰だと思つてゐるのよー?」

「存じています。尊の天才魔導士でしょ。でも、あなたにだつて、知らない術式のひとつくらいありますよー。」

「こんな変な術式の使い方して、魔導器が可哀想でしょー。」

「ちょっと見てないで捕まえるのを手伝つてくださいー。」

他の騎士もリタを取り押さえよつとしつこる。

「火事だつ! 山火事だつ!」

「なんだ、あのガキ」

「山火事? 音も匂いもしないが?」

「ひうつー嘘つき小僧!」

「やばつ……もうばれたの?」

カロルは騎士達に追いかけられた。

そこに騎士の一人がユーリ達の前で止まる。

「おまえたち、さつきのガキと一緒にいたよつだが……ん? おまえら、確か手配書の……」

騎士が思い出そうとしたとすると、シンクはリタのところにいた騎士を鞘で氣絶させた。

「行くぞー。」

「え、ち、ちょっとー。」

シンクはリタの手をつかみ走る。

「あ、こら待てー。」

騎士の一人が止めようとしたが、ラピードがしつぽを叩きつけ倒れる。

「ごめんなさい」

エステルが謝り、ラピードと一緒に林の中に入った。

「おまえらー サボってないで小僧追いかけるの、手伝え！」

「ちつ……！」

\*

「ふ〜、振り切ったか」

「ああ、やうだな」

「ちょっと、シンク……手、放してよ……」

リタが顔を赤くしながら言つた。

見ると、シンクはリタの手をまだ握つていた。

「ああ、すまない」

「はあ……はあ……リタって、もつと考えて行動する人だと思つて  
いました」

「あの結界魔導器、完璧おかしかったから、つい……」

「おかしいって、また厄介事か？」

「厄介事なんてかわいい言葉で、片付けばいいけど」

「どうじつ」とだ?」

『ユーリ・ローウィールー名無しの黙～～～～～に逃げよつたあ  
つー』

林の向こうから「ブランの声が聞こえた。

「呼ばれてるわよ? 有名人。つていうかシンクも?」

「ああ……それにしても、本当にしつけいな」

「仕事熱心なのも考え方のだな」

『エステリーゼ様へ出でてくださいであります。』

今度はエステルを呼ぶアーティホールの声が聞こえた。

「あんたら、問題多いわね。 いつたい、何者よ」

「えと、わたしは……」

『ユーリ、出でていい。』

「そんな話はあとあと」

すると、ワードが構えだした。

「うわあああつー待つて待つてーボクだよー。」

林からカロルが慌てて出てきた。

「……なんだカロル……びっくりせないでください……」

「さ、面倒になる前に、さっそくノール港まで行くぞ

「えと、じりり向かえば、いいんでしょうか?」

「遠回りになるが、この先を行けば出口に行ける

「これって獣道よね? 進めるの?」

「行けるといままで行くぞ。捕まるのはたくさんだ

「魔物にも注意が必要ですね」

「結界があれば心配なかつたのにね」

「まったくよ。どつかのバカが魔導器壊すからほんとにいい迷惑!」

リタは竜使いに怒りを覚えていた。

カロルも加わり、一行は獣道を歩いた。

\*

一行が獣道を魔物を蹴散らしながら進んでいると、

『ガオオオッ！！』

獣の吠える声がした。

「ん……なに？」

「上だ！」

シンクの言葉に、全員は上に注目する。  
そこには巨大な狼の魔物、カットウーザがいた。

「あ、あれ、ハルルの街を襲つた魔物だよ！」

「へえ、こいつがね。生き残りつてわけか」

「ほつといたらまたハルルの街を荒らしに行くわね、たぶん」

「でも、今なら結界があります」

「結界の外にいたらいで、迷惑だ」

「……来るぞー!」

カットウーゾは雄叫びを上げながら降りてきた。両隣には、小型の魔物、カットウーゾ・ピコが一匹ずついる。

「先にあの二匹だ!」

シンクは迷わず、カットウーゾ・ピコに向かつて走る。カットウーゾ・ピコは飛び掛かるが、シンクは難なくかわし、斬り付ける。

『キヤウンー』

『紅蓮斬!』

まずは一匹目を倒す。

ラピードはカットウーゾの攻撃をかわしながら、おびき寄せれる。

ゴーリとカロルは、もつ一匹のカットウーゾ・ピコを撃退した。リタは遠距離から援護していた。

「揺らめく焔、猛追、ファイアボール！」

ファイアボールがカットウーボに当たる。

「どうやら、炎が苦手らしいな」

「だったら、これだ！」

ユーリはそう言つて、カットウーボの後ろに回り込む。

「爆碎陣！」

ユーリは前方に宙返りしつつカットウーボを斬り付けた。炎の陣のように二バンボシを叩きつけ、カットウーボは怯んだ。

「今だ、紅蓮斬！」

「ピアズクラスター！」

「ガウッ！」

「ファイアボール！」

「爆碎ロツク！」

最後はシンク、エステル、ラピード、リタ、カロルの総攻撃で、カットウーボは倒れた。

「な、なんだ、手応えゼロだったね」

「でも、この先もまだ何匹も出でてくるかも……」

「だ、大丈夫だつて」

「そうならないことを祈ろひ」

\*

ユーリ達はカットウーズのいた崖を抜け丘にたどり着いた。

「うわあ……」

「これ……つて……」

そこには広大な海が無限に広がっていた。  
エスティルはその光景に感動している。

「ユーリ、海ですよ、海」

「わかつてゐつて。……風が気持ちいいな

「ああ、潮風がいいな」

「本で読んだことはありますけど、わたし、本物をこんな間近で見るのは初めてなんです！」

「普通、結界を越えて旅することなんてないもんね。旅が続ければ、もつと面白いものが見られるよ。ジャングルとか滝の街とか……」

「旅が続けば……もつといろんなことを知ることができる……」

「もうだな……オレの世界も狭かつたんだな」

「あんたにしては珍しく素直な感想ね」

「リタも海初めてなんでしょ?」

カロルがリタに尋ねた。

「まあ、そうだけど」

「そつかあ……研究ばかりの寂しい人生送ってきたんだね」

「あんたに同情されると死にたくなるんだけど」

「この水は世界の海を回って、すべてを見てきたんですね。この海を通じて、世界中がつながっている……」

「また大げさな。たかだか水溜まりのひとつで」

「やう言ひコタも、感激していただろ?」

「う……ま、まあね」

「これがあいつの見てる世界か」

「ユーリー。」

ユーリの脇間にヒステルは首を傾げた。

「もうと前に、フレンチの景色を見たんだろ?」

「えうですね。任務で各地を旅しますから」

「追いついて来ていいなんて、簡単に言つてくれる?」

「ヒューリックの丘を抜ければ、ホール港はもうすぐだよ。追いつかるつて」

「せうこの意味じやねえよ

「え? ヒューリック?」

「ああ、ルブランが出てこなつてからだべ

「ホール港はここを出て海沿いの街道を西だよ。もう西の前だから

「ヒステル、海はまたいくでも見れる?」

「シンクの皿ひとおりだぜ。旅をしてこなづかんであらわせ

「.....」

「やの氣になつやな。今だつてその結果だろ?」

エステルは海をもつ一度見ると、柔らかな表情になる。

「……そうですね」

「ほり、先に行つちやうよ

そう言つてカロルは走りだす。

「慌ててこると、崖から落つるぞ

「うわあああっ！」

言つた矢先に落ちそつとなるカロル。

「バカつぽい……」

リタはカロルを見てそう呟いた。

「ねえ、シンク」

リタはユーリ達の後ろで隣にいるシンクに聞く。

「ん?なんだ?」

「あんたも、この海前に見たの?」

「ああ。最初に見たとき、いつも『リタにもこの景色を見せたい』ってな

「えつ……?」

リタは顔を赤くした。

「だ、だつたら、早く帰つてきなやつよ、バカ……」

「すまない……」

「わ、わかればここのよ。でも……その……あ、あつがと……」

「ああ……」

「ふたうともーー卑く卑く、追いつかせつけー。」

カロルの呼ぶ声が聞こえる。

「今行くー行いく、リタ」

「あ、うふ……」

シンクはリタの手を止め、コーリ達のところへ行った。

コーリ達はエフミーの口を抜け、目的地のあるカプワ・ホールへと向かった。

## ハルル～エフミーの丘 それぞれの見てる世界（後書き）

次回はカプワ・ノールの話です。

長くなりそうだ……

次回もお楽しみに！

感想もお願いします。

港の街 カプワ・ノール 暗雲渦巻く街（前書き）

今回のカプワ・ノールは前後編に分けます。  
今回はリブガロ戦まで書きました。

## 港の街 カプワ・ノール 暗雲渦巻く街

ユーリ達は目的地のノール港ことカプワ・ノールに着いた。カプワ・ノールに着いたとたんに、雨が降り出した。

「……なんか急に天気が変わったな」

「びしょびしょになる前に宿を探そうよ」

ユーリ達が歩き出しが、エステルは浮かない表情だった。

「どうした、エステル？」

「あ、その、港街といつのはもつと活気のある場所だと思っていました……」

「確かに、想像してたのと全然違うな……」

「でも、あなたの探してる魔核ドロボウもいそうな感じじよ」

「デーテックってやつが向かったのはトリム港の方だぞ?」

「どっちも似たようなもんでしょ」

「そんなことないよ。ノール港の方が一番厄介なだけだよ」

「確かにな」

「どうこうします?」

「ノール港はさあ、帝国の圧力が……」

『金の用意が出来ないときは、おまえらのガキがどうなるかよくわかつているよな?』

別の方から声で、カロルの言葉が遮られた。  
見ると、そこには、ケガをした男と女性が目の前の役人らしき男と傭兵みたいな男に頭を下げている。

「お役人様!…どうか、それだけは!息子だけは……返してください!この数ヶ月のあいだ、天候が悪くて船も出せません。税金を払える状況でないことはお役人様もご存知でしょう?」

「ならば、早くリブガロつて魔物を捕まえてこい」

「そりそり、あいつのツノを売れば一生分の税金納められるぜ。前もそう言つたる?」

そう言つて役人と傭兵は去つていった。

「なに、あの野蛮人」

「今のが、ノール港の厄介の種だ」

「そりなの?」

「うん、このカプワ・ノールは帝国の威光がものすごく強いんだ。特に最近来た執政官は帝国でも結構な地位らしくてやりたい放題だつて聞いたよ」

「その部下の役人が横暴な真似をして、誰も文句が言えないってことね」

「…………」

「そんな……」

ユーリは少し黙り、エステルは驚きの表情を浮かべた。

見てみると、ケガをした男は立ち上がり、ビニカへ行こうとする。それを女性が止めている。

「もうやめて、ティグル！ その怪我では……今度こそあなたが死んじゃう！」

「だからって、俺が行かないという子はビンなるんだ、ケラス！」

ティグルと呼ばれた男はケラスの言葉を無視し、走りだすが、ユーリに足を引っ掛けられ、転んでしまう。

「痛ッ……あんた、何すんだ！」

「あ、悪い、ひつかかっちゃった」

ユーリはわざとらしく謝った。

ケラスやエステル達はティグルに駆け寄る。

「もう…ユーリ…ごめんなさい。今、治しますから」

エステルはティグルの怪我を治癒術で治した。

「あ、あの……私たち、払える治療費が……」

「その前に言つことがあるだろ?」

「え……?」

「まつたく、税金と一緒に常識も持つていかれたのか?」

シンクの言葉に、ケラスは立ち上がる。

「…………」「めんなれー。ありがと」「やれこませ」

「あれ……? ゴーリは?」

カロルがあたりを見回す。確かに一つの間にかゴーリの姿が見えなくなっていた。

「ビー行つたんだ、あいつ?」

「先に宿でも見つけにいったんじゃないの?」

シンクとリタが話していると、路地裏のほうが騒がしかった。

「なんでしょう? ちょっとわたし、見てきます」

やつぱりエステルは路地裏へ歩いていった。

「まつたく……落ち着いて行動できないのが、あいつは?」

「あはは……」

「それよつもシンク。どうこういとよへ、リタは宿の入り口でシンクに尋ねる。

「何をだ？」

「Hフリードの丘で騎士の話し声聞こちやったのよ。あなたとユーリが指名手配されてるって」

「ああ、そのことか……実は……」

シンクはリタに今までの経緯を話した。

「ふーん……なるほどね。よかつた……」

「なにがよかつたんだ？」

「あんたが間違つた」としなかつたつてことだがよ

リタが安心したような顔で言った。

そこにエスティルが金髪の騎士に引きずられながら、宿屋に入つた。  
その後にユーリがやつてきた。

「なんかエスティルが引きずられていつたけど……」

「ふたりは宿屋の中か？」

「ああ。さつきの騎士がフレンなのか？」

「まあな

そう言ひてゴーリは中に入りひじした。

「今、行つても色々立て込んでると思ひわよ」

「長くなつたし、先に街を見て回つたり?..」

「……そうだなあ

「それなら俺も回る

ゴーリとシンクは街を見て回つた。

\*

ゴーリとシンクはやけに大きな屋敷を見ていた。

そこに入り口へと歩く海賊帽子をかぶつた少女の姿があった。

おでんをくわえながら、入り口に入ろうとするが、入り口にいた傭兵らしき男に襟を摑まれる。

「あつ

「何入るうとしてんだ、このガキが

「まあまあ、これでも食つて落ち着け」

少女は男におでんを差し出す。

「いらねえよ。ガキが来るとこりじゃねえんだ、こりは」

そう言つて男は少女を投げた。

その先にいたユーリが少女を受け止める。

「おつと、つと……」

「むむ……」

「子ども一人にずいぶん乱暴だな」

「なんだ、おまえらは。そのガキの親父か何かか?」

「オレ達がこんな大きな子どもの親に見えるつてか? 嘘だろ」

「再チャレンジなのじや」

そう言つて少女は入り口に向かつてダッシュするが、男が剣を突き付け、直前で止まる。

「あつ」

「おいおい。丸腰の子ども相手に武器向けんのか」

「ガキにこれが大人のルールだつてことを教えてやるだけだよ」

「やめておけ……」

「えこひー。」

少女は足元に煙玉を投げた。周りは黄色い煙に覆われ、視界が邪魔される。

「うわあ……」

「ぬつ……」

「な、何しやがる……。」

「うひふ……や、やりやがつた……」

男達は煙を払おうとしている。

そのままに逃げようとする少女の手をコーリーが掴む。

「おこおこ、いいまでやつとこで逃げる気か？」

「自分で美少女って書いたのが……」

「美少女の手を掴むのには、それなりの覚悟が必要なのじや」

「どんな覚悟か、教えてもらひやねえか」

「残念なのじや。今はその時ではない」

「なんだって……？」

「さりばじや」

その直後、煙が濃くなつた。  
そして煙が晴れた。

「てめえ……待てつ……！」

男の一人が屋敷に走つていつた。

「ちつ、なんだってんだあのガキ。おい、お前らもさつれと消える  
んだな」

「……つたく、やつてくれるが」

「まつたくだな」

ユーリの手にはあの少女ではなく、少女に似た人形だつた。

「そりそろHスティルとフレンの話も終わつてる頃だらうな」

「ああ。宿屋に戻ろう」

ユーリとシンクは屋敷を後にした。

\*

ヨーリとシンクはリタ、カロル、ラピードと会流し、宿屋の中に入つた。

そして、宿の一室になると、エステルとフレンが向かい合つて話していた。

「用事は済んだのか？」

ヨーリの言葉にエステルは頷いた。

「わづかのヒミツのお話も？」

「（）までの事情は聞いた。そつちの彼、シンクのことも、賞金首になつた理由もね。まずは礼を言つておく。彼女を守つてくれてありがとうございます」と

「」

「あ、わたしからもありがとうございました」

エステルはヨーリとシンクに頭を下げた。

「なに、魔核ドロボウ探すついでだよ」

「俺は巻き込まれただがな」

「問題はそつちの方だ」

「ん？」

「どんな事情があれ、公務の妨害、脱獄、不法侵入を帝国の法は認めていない」

「「」、「」めんなさい。全部話してしまいました」

「しかたねえなあ、やつた」とは本当だし

「まあ、確かにな

「では、それ相応の処罰を受けてもらつが、いいね?」

「フレン!...?」

「別に構わねえけど、ちょっと待つてくんない?」

「下町の魔核を取り戻すのが先決と言いたいのだろ?」

ユーリ達が話していると、部屋のドアが開き、一人の女性騎士と一人の小柄なアスピオの服を着た少年が入ってきた。

「フレン様、情報が……なぜ、リタがいるんですか!…!」

少年がリタを見て言った。

「あなた、帝国の協力要請を断つたそつじやないですか? 帝国直属の魔導士が、義務づけられている仕事を放棄していいんですか?」

「誰だ?」

シンクはリタに尋ねる。

「……だれだっけ?」

聞かれたリタも首を傾げた。

「……ふん、いいですけどね。僕もあなたになんて全然まったく興味なんてありませんし」

「……負けず嫌いなんだな」

「黙つてもらいますか?」

眩いたシンクに少年は睨む。

「紹介する。僕……私の部下のソディアだ」

フレンが言つと女性騎士、ソディアは一礼した。

「！」ちはアスピオの研究所で同行を頼んだウイチル。彼は私の…

…

「！」じつり……賞金首のつ…

ユーリとシンクを見ると、ソディアは剣をユーリとシンクに向ける。

「ソディア！待て……！彼は私の友人だ。そちらの彼はリタ・モルディオの知り合いだ」

「なつ…賞金首ですよ…」

「事情は今、確認した。確かに軽い罪は犯したが、手配書を出されたのは濡れ衣だ。後日、帝都に連れ帰り私が申し開きをする。その上で、彼らには受けるべき罰は受けてもらいつ

フレンの言葉にソテイアは剣を収めた。

「し……失礼しました。 ウィチル、 報告を

ウィチルはフレンに近づいた。

「もう用事は終わったんでしょ」

「この連續した雨や暴風の原因は、やはり魔導器のせいだと思います。季節柄、荒れやすい時期ですが、船を出すたびに悪化するのは説明がつきません」

「ハリウ執政官の屋敷内に、それらしい魔導器が運びこまれたとの証言もあります」

「天候を制御できるような魔導器なんて聞いたことないわ。 そんなもの発掘されてないし…… いえ、下町の水道魔導器に遺跡の盗掘……まさか……」

フレン達の話を聞いて、リタは考え込む。

「執政官様が魔導器使って、天候を自由にしてるってわけか」

「……ええ、あくまで可能性ですが。 その悪天候を理由に港を封鎖し、出航する船があれば、法令違反で攻撃を受けたとか」

「それでは、カプワ・トリムに行けないな……」

「執政官の悪いわざはそれだけではない。 リブガロという魔物を

野に放ち、税金を払えない住人たちと戦わせてあそんでいるんだ。リブガロを捕まえてくれば、税金を免除すると書いてね」

「そんな、ひどい……」

フレンの話を聞いて、エステルは絶句した。

「入り口の夫婦のケガつて、そういうからくつなんだ」

「やりたい放題だな」

「そういえば子どもが……」

「子供もがぶつかしたのかい？」

「なんでもねえよ。色々ありすぎて疲れたし、オレらのまま宿屋で休ませてもううわ」

そう言つてゴーリ達は部屋を出た。

「それと……例の『探し物』の件ですが……」

(……探し物?)

出る前にゾディアの話を聞いたエステルは首を傾げながら部屋を出た。

\*

ヨーリ達は宿屋で休まず、外に出た。

「これからどうする？」

「わたし、ラゴウ執政官に会いに行つてきます」

「え？ ボクらなんかが行つても門前払いだよ。いくらエステルが貴族の人でも無駄だつて」

「とは言つても、港が閉鎖されてちゃトリム港に渡れねえしな。『デッキつてコソ泥も、隻眼の大男も、海の向こうにいやがんだ』

「なにか献上品でも出せば、会つてくれるんじゃないかな？」

「献上品？ 何よそれ？」

「リブガロのツノだ。入り口で役人が言つてただろ？ 『リブガロのツノを売れば一生分の税金納められる』って」

「なるほどな。そんぐらい高価なもんなら、面ぐらに拝ませてくれるな」

「リブガロつてのを捕まえるつもり？」

リタの言葉にシンクは頷く。

「だったら今がチャンスだよー。雨降つてゐし」

「雨がどうかしたんです？」

「リブガロは雨が降ると出でくるんだよ。天気が変わった時にしか活動しない魔物つてのが、時たまいるんだよね」

カロルが説明する。

「よく知ってるな、カロル先生。それで？」

「……それで？ それだけだよ」

「ビーハーのんだって聞いてるんだ」

「あ、ああ……」

「……やつぱりね」

「……とりあえず、街の人聞いてみよ」

「そうですね」

「あたしも行くわ。天候操れる魔導器なんて興味あるし

「そんじゃ、まずはリブガロを探しに行くか」

ユーリ達はラバウに会つために、リブガロを探すことにした。

\*

ユーリ達は、街の人の情報で、結界の外にある森にいた。  
そこに、黄金のタテガミに黄金のツノをした馬に似たフォルムの魔  
物がいた。

「これがリブガロだよ！」

「……来るぞ！」

リブガロはユーリ達に向かって、鋭いツノをたてながら、突っ込ん  
できた。

ユーリ達は難なくかわす。

「爆碎陣！」

「あどけなき水のたわむれ、シャンパーゴー！」

「ピアズクラスター！」

「雷撃ウェーブ！」

「闇裂斬！」

ユーリ達はリブガロに一斉攻撃を放った。  
リブガロは力なく倒れた。

「さつさと連れて帰るうつよ」

「傷だらけ…………少しかわいそうですね」

「多分、死に物ぐるいの街の連中に何度も襲われたんだろうな」

「街の人気が悪いわけじゃ……」

「わかつてんつて」

ユーリはそう言ってリブガロから生えていた黄金のツノを折った。

「ユーリ…………？」

「高価なのはツノだろ？ 金の亡者ビモヒテヤ これで十分だ」

「あんたが魔物に情けなんてかなり意外なんだけど」

「のんきな」と言つてたら、ほり、起きるよー。」

カロルが言つと、リブガロは立ち上がり、ビコカへ走り去つていった。

「あれ、なんで？」

「多分、俺達の意図を理解したんじゃないかな？」

「魔物が？まさか？」

「ツノが手に入ったんだからなんだっていいさ」

「それじゃ、さつさと街に戻ろう

ユーリ達はリブガロのツノを持ってカプワ・ノールに戻った。

港の街 カプワ・ノール 暗雲渦巻く街（後書き）

次回は出来ればザギ戦まで書きたいです。

次回もお楽しみに！

感想もお願いします。

港の街 カプワ・ノール 追い詰める執政官、暗殺者再び（前書き）

今回は後編です！

新たにシンクの新しい技が登場します。

今回結構長くなっています。

## 港の街 カプワ・ノール 追い詰める執政官、暗殺者再び

ユーリ達はリブガロのツノを持ってカプワ・ノールに戻ると、入り口ではまたあの夫婦がもめていた。

ティグルの手には剣があった。

恐らくまたリブガロ挑戦しに行こうとしているのだろう。

「待つて！せつかくケガを治してもうったのに…」

ティグルはケラスの説得を聞かずに入り口へ歩きだす。

そこにユーリが近づいた。

「そんな物騒なもん持つて、どこに行こうってんだ？」

「あなた方には関係ない。好奇心で首を突っ込まれても迷惑だ」

ユーリはティグルの前にリブガロのツノを投げた。

ティグルはそれを見て目を見開く。

「…、これは……っ！」

「あなたの活躍の場奪つて悪かつたな。それは、お詫びだ

「あ、ありがとうござります」

ケラスとティグルは膝を下ろして、ユーリに礼を言った。

「ちょ、ちょっと…あげちゃつてもいいの？」

「あれでガキが助かるなら安いもんだろ」

「最初から」いつあるつもつだつたんですね

「愚ごつせ御ごつせ」

「少なくともシンクはそのつもりだったみたいよ」

「あのシノ一ツの家族の子どもが助けられるなら、喜んでやるやう」

「でも、それで獻上品がなくなつりやつたわよ。どうするの?」

「ま、執政官邸こま、別の方法で乗り込めばいいだろ」

「なう、フレンがどうなつたか確認に戻りませんか?」

「ヒベリヤカの屋敷に入つて、解決してゐかもだしね」

「だとここナビ」

「……多分、そういうまくこつてなこと思つたが」

\*

ユーリ達はフレン達のこの宿の部屋を訪ねた。

「相変わらず辛氣臭い顔してゐるな

「色々考へることが多いんだ。君と違つて」

「ふーん……」

「また無茶をして、賞金額を上げて来たんじゃないだらうね」

「お前達、執政官のところに行かなかつたのか？」

シンクは話を変えようとフレンティスへ尋ねた。

「行つたさ。魔導器研究所から調査執行書を取り寄せてね」

「それで中に入れたのか？」

「いや……執政官にはあつさう拒否された」

「なんで！？」

カロルが驚きの声を上げる。

「魔導器が本当にあると思うなら、正面から乗り込んでみたまえ、  
と安い挑発までくれましたよ」

「私たちにその権限がないから、馬鹿にしているんだ！」

ソディアは怒りを表しながら握り拳をする。

「でも、そりや、そいつの言つ通りなんじやねえの？」

「何だと！？」

ヨーリの言葉にソテイアは飛び掛かるつとするが、フレンとウイチルに止められた。

「ヨーリ、お前どっちの味方なんだ？」

「敵味方の問題じゃねえ。自信があんなら乗り込めよ」

「いや、これは罷だ。ラ「ウは騎士団の失態を演出して評議会の権力強化を狙っている。今、下手に踏み込んで、証拠は隠蔽され、しらを切られるだろ！」

「それで他に方法はねえのか？」

「…………」

ヨーリの問いにフレンは口籠もる。

「打つ手無し……みたいだな」

「……中で騒ぎでも起これば、騎士団の有事特権が優先され、突入できるんですけどね」

「騎士団は有事に際してのみ、有事特権により、あらゆる状況への介入を許される、ですね」

エスティルの説明にヨーリは何か閃いたようだ。

「なるほど、屋敷に泥棒でも入つて、ボヤ騒ぎでも起つればいいんだな」

「ヨーリ、しつこよづだけど……」

「無茶するな、だろ?」

ヨーリ達はそう言つて宿屋を後にした。

\*

ヨーリ達は執政官邸の前で隠れていた。

「おつきな屋敷だね。評議会のお役人つてそんなに偉いの?」

「評議会は皇帝を政治面で補佐する機関であり、貴族の有力者により構成されている、です」

「言わば、皇帝の代理人つてわけね」

「へえ、そなんだ」

カロル、エステル、リタの話を聞きながら、シンクはヨーリに顔を向ける。

「どうやって入る?」

「裏口はどうです？」

「残念、外壁に囲まれてて、あそこを通りにや入れんのよね」

後ろから違う人物の声がして、全員後ろを振り返ると、そこには見るからに「うさんくさいボサボサの髪をした中年の男がいた。

「えっと、失礼ですが、どちら様ですか？」

「な～に、そつちのかつこいい兄ちゃん一人とちよつとした仲なによ。な？」男はユーリとシンクを見て言った。

「いや、違うから、ほつとけ」

ユーリとシンクは迷惑顔で言った。

「おいおい、二人してひどいじゃないの。お城の牢屋で仲良くしたじゃない、ユーリ・ローウエル君よ。あと……」

「シンクだ」

「そうそう、シンク君よ」

「ん？名乗った覚えねえぞ」

ユーリの問いに、男は手配書をヒラヒラと見せた。

「ユーリは有名人だからね」

「お、お、シンクは？」

「シンクは名前知られてないじゃん。で、おじさん名前は？」

「ん？ そつだな……。とつあえずレイヴンで」

「とつあえずつて……どんだけふざけたやつなのよ」

「んじゃ、レイヴンさん、達者で暮らせよ」

「そして人知れず朽ち果てん」

「うわっ……シンク君の方はひどいね……でも、屋敷に入りたいん  
でしょ？ ま、おっさん任せときなつて」

そう言つてレイヴンは見張りの方に走つていった。

レイヴンが見張りに何かを言つてこるよりで、見張りは「ちりに」走  
つてきた。

「な、なんか」「ちりくも？」

レイヴンは「ちり」を一度見て、屋敷に悠々と入つていった。

「そ、そんなあ……」

「あいつ、バカにして！ あたしは誰かに利用されるのが大嫌いな  
のよ！」

リタは怒りの言葉を口にし、怒りにまかせ、見張りの男達をファイ  
アボールで吹つ飛ばした。

「あ～あ～、おひやがつた。どうするの?」

「どうするって、そりゃ、行くに決まってるんだろ?見張りもこなくなったし」

「ああ、おひさん見つけたら、とりあえず一発殴るわ」

「同感!行くわよ!」

そしてゴーリ達も裏口に向かった。

裏口にはレイヴンがいた。

「よハ、また会つたね。無事でなによつだ、んじゅ」

レイヴンはそのままながら、エレベーターに乗り、上へあがつて行く。

「待て、じりー。」

ゴーリ達も隣のエレベーターに乗るが、レイヴンの乗つたエレベーターとは違う下へ降りていく。

「あれ?下……」

「あのおひさん、絶対知つてたな

「まつたく……」

\*

エレベーターが止まり、地下らしきところに到着した。

「あー、もうー。」ここからじや操作できない仕組みになつてゐる……」  
リタはエレベーターが操作できないことに腹を立てている。  
エスティルは部屋の匂いをがき、顔を歪め、口を抑える。

「うーーー？」

「なんか、くさいね……」

「……血とあとはなんだ？何かの腐った臭いだな」

「死臭だ……」

ユーリとシンクの見る先には人間の骨らしきものがあり、近くには  
ブラックウルフ、ブラックライノ、ブラックバジリスクという黒い  
魔物がいた。

「魔物を飼う趣味でもんのかね」

「かもな。リブガロもいたしな」

『パ……パ、マ……助けて……』

どこかから弱々しい声が聞こえた。

「ちよつ、今度は何ー？どうなつてんの、こーーー？」

ユーリとエステルはお互い顔を見合つて頷く。

「行きましょーー誰かいるみたいですよーー！」

ユーリ達は戸のした方向に向かった。

\*

先を進むと人の骨らしきものがあちこちに散乱していた。

「うづつ……！」

カロルは小さく悲鳴を上げた。

「えつぐ、えつぐ……パパ……ママ……」

部屋の角を見ると、そこには一人の子どもが泣きながら泣くまつていた。

ユーリ達はその子に駆け寄る。

「だいじょうぶだよ。何があったか、話せる？」

エステルが優しく尋ねた。

「こわいおじさんで、つれてこられて……パパとママがぜこきんを

はりえないから……」

子どもは弱々しく話してくれた。

「ねえ、もしかして、この子、やつきの人たちの……」

「ああ、恐らくあの夫婦の子どもだな」

「……なんで、ひどこと」

「もしかして、この人たちは、ここに魔物に……？」

カロルは周りの骨を見ながら言った。  
恐らく、ここにいる魔物たちの餌にされたのだ。

「これが同じ人間のする」とか……。」

シンクは怒りで拳を強く握る。

「パパ……ママ……帰りたいよ……」

「だいじょうぶ。もう、だいじょうぶだからね。お名前は？」

「ポリー……」

コーリはポリーに駆け寄った。

「ポリー、男だろ、めそめそすんな。すぐに父ちゃんと母ちゃんに  
はあわせてやるから」

「うん……」

ヨーリ達はポリーをつれて、先に進んだ。

\*

魔物を倒しながら進んでいくと、鉄格子の部屋に着いた。そこから、黒い貴族の衣装を着た老人がやってきた。

「はて、これはどうしたことか、おいしい餌が、増えていますね」

男は不適に笑いながら言った。

「あんたがラガウさん？ 隨分と胸糞悪い趣味をお持ちじゃねえか？」

「趣味？ ああ、地下室のことですか。これは私のような高雅な者にしか理解できない楽しみなのですよ。評議会の小心な老人どもときたら退屈な駆け引きばかりで、私を楽しませてくれませんからね。その退屈を平民で紛らわすのは私のような選ばれた人間の特権というものでしょ？」

ラガウはくらへら笑いながら言った。

「まさか、ただそれだけの理由でこんなことを……？」

「救いようのないクズが……！」

エステルは驚きの表情に、シンクは怒りの表情を表していた。

「さて、リブガロを連れ帰つてくるとしますか。これだけ獲物が増えたなら、面白い見せ物になります。ま、それまで生きていれば、ですか」

「リブガロなら探ししても無駄だぜ。オレらがやつちまつたからな」

「…………なんですか？」

ラゴウは驚いた表情でコーリの言葉を聞く。

「聞こえなかつたのか？ オレらが倒したつて言つたんだよ」

「くつ……なんといつ」と……」

ラゴウはリブガロが倒されたことを知り、怒りをあらわにした。

「飼つてるなら、分かるように鈴でもつけときやよかつたんだ」

「まあ、いいでしょ。金さえ積めば、すぐ手に入ります」

鉄格子越しにエステルがラゴウの前に出た。

「ラゴウ！ それでもあなたは帝国に仕える人間ですか！」

ラゴウはエステルを見て、驚いた様子をした。

「むむひ……あなたは……まさか？」

その隙にコーリとシンクが蒼破刃と紅蓮斬を鉄格子に放つた。

鉄格子は破壊され、その反動でラ「ウは後ろに突き飛ばされた。

「き、貴様！な、なにをするのですかー誰かー」の者たちを捕らえなさい！」

ラ「ウはもう言い、逃げていった。

「早いとこ用事すまされないと、敵がぞろぞろ来るだ？」「

ユーリがそう言つてると、リタが魔術の詠唱を始めていた。

「待て、リタ！」

「何よ？騎士団が踏み込むための有事が必要なんでしょう？」

「まだ早い。証拠を見つけなきゃならない」

「天候を操る魔導器を探すんですね」

エステルの言葉にシンクとユーリは頷いた。

ユーリ達は天候を操る魔導器を探すため、先へ進んだ。

\*

敵を倒しながら進むと、そこで意外な人物に出会った。

「こーい眺めなのじや……」

部屋の真ん中で布団に巻かれて吊されていた、あの海賊帽子の少女  
だった。

「誰……？」

「セーで向してんだ?..」

ユーリは少女に聞きながら近づいた。

「見ての通り、高見の見物じや

「へえ。オレはてつあつ捕まつてるのかと想つたよ

「イヤ、どう見ても……」

「捕まつてるんだと思つたですけど……」

「そんなことないわ

シンクとHスティルの言葉を少女は体を振りながら否定した。

「お……おまえたち、知つてゐるのじや

少女はユーリとシンクを見て言った。

「えーと、お前は……ジャックとウィル

「誰なんですか?..」

少女の言葉に、エスティルは首を傾げながら尋ねる。

「オレはユーリだ。こつちはシンク。おまえ、名前は？」

「パーティなのじゅ」

「パーティか。わざと屋敷でオレたちと会ったよな？」

ユーリはそう言いながら人形を見せた。

「おお、やうなのじゅ。わちの手のぬくもりを忘れられなくて、追いかけてきたんじゅな」

パーティの呑気な言葉に、ユーリ達は呆れた。

ユーリはパーティを降ろしてあげた。

「ね、こんなところで何してたの？」

「お宝を探してたのじゅ」

「宝? こんなところ?」

カロルは首を傾げた。

「あのクズ執政官のことだから、そういうのを持つていても不思議じゃないが……」

「パーティは何してる人?」

「冒険家なのじゅ」

パーティはきつぱつと答えた。

「ど、ともかく、女の子ひとつでこんなところのウロウロするの危ないで」

「やうだね。ボクたちと一緒にに行こう」

エスティルの提案にカロルは賛成する。

「うちはまだ宝も何も見つけていないのじゅ」

「人のこと言えた義理じゃねえが、おまえ、やつてゐる」と冒険家つていうより泥棒だぞ」

「ホントに人のこと言えないな」

ゴーリの言葉にシンクはジト目でツツコんだ。

「冒険家といふのは、常に探求心を持ち、未知に分け入る精神を持つ者のことなのじゅ。だから、泥棒に見えても、これは泥棒ではないのじゅ」

「ふーん……なんでもいいけど。ま、まだ宝探しするつてんなら、止めないけどな」

「じつある?..」

ゴーリ達が話していると、パーティは再び振り返った。

「たぶん、この屋敷にはもうお宝はないのじゃ」

「一緒に来るつてさ」

「なら、行くか」

ユーリ達はパーティも連れて、先を進んだ。

\*

「侵入者アアアアアイ！！」

次の部屋に入つた途端、大剣を持った男が三人襲い掛かつた。ユーリ達はそれをかわした。

「行くぞ、ラピード！」

「ワソツ！」

シンクの言葉に、ラピードは頷く。

大剣の男がシンクに大剣を振り回すが、シンクはそれを難なくかわす。

「ガウツ！」

「ラピードはそのすきに、男の横から素早く屈み、突進する技、“瞬迅犬”で攻撃する。

「グホッ……！」

男は小さく悲鳴を上げる。

シンクはそのまま見逃さず、懷に潜り込む。

「雷閃牙！」

シンクは閻魔刀を抜き、電撃を纏つた刀身で突いた。

男は吹き飛ばされ、倒れた。

「ナイス、ラピード！」

「ワオーン！」

ラピードは頷くように吠えた。

ユーリ達を見ると、近くには同じく倒れた男達がいた。

「こんなやつらがいる所に、おまえ、よく来れるな」

シンクは男達を見ながらパーティに言った。

「危険を冒しても、手に入れる価値のあるお宝なのじや」

「それって、どんな宝？」

「アイフリードの隠したお金なのじや」

「ア、アイフリードッ……！」

パティの言葉に、カロルは驚きの声を上げる。

「アイフリードって、あの、大海賊の？」

「有名なのか？」

ユーリは首を傾げていた。

「し、知らないの？ 海を荒らし回った大悪党だよ」

「アイフリード……『海精の牙』<sup>ハイエイントウ</sup> といつ名の海賊、ギルドを率いた首領<sup>ボス</sup>。移民船を襲い、数百人という民間人を殺害した海賊として騎士団に追われている。その消息は不明だが、既に死んでいるのではと言われている、です」

「ブラックホール事件<sup>ハートレス</sup>って呼ばれてるんだけど、もうひどかったんだって」

「……ま、そう言われとるの」

エスティルとカロルの言葉に、パティは表情を暗くしていた。

「……どうしました……？」

「なんでもないのじゃ」

パティは見るからに不機嫌そうだった。

「でも、あんたそんなもん手に入れて、ビーナスのよ

「ビーナス……？決まってるのじや、大海賊の宝を手にして、冒険家として名を上げるのじや」

「危ない目に遭つても、か？」

ゴーリの言葉に、パーティは振り返る。

「それが冒険家といつ生き方なのじや」

「ふつ……面白こじやねえか」

ゴーリはふつと笑つた。

「面白こか？ビーナス、つむと一緒いやらんか？」

「性には合こそつだけど、遠慮しとくわ。そんなに暇じやないんでな」

「ゴーリは冷たいのじや。サメの肌より冷たいのじや」

「サメの肌……？」

「でも、そこが素敵なのじや」

「素敵か……？」

リタとシンクは声を合わせて言った。

「もしかしてパーティって、ゴーフの」と……」

「ひとめぼれなのじや」

パーティは堂々と言った。

「やめといた方がいいと思つナビ」

「回感だ」

「ひとめぼれ……」

「……なんでもいいが、さあせと行ひつ」

シンクは頭を押さえながら言った。

\*

先の部屋に行くとそこには巨大な魔導器のしきものが中央にあった。

「この魔導器が例のブツ?」

「うじいな」

リタは階段を上り、魔核の前に立ち、術式を開け、田にも止まら

ない早さで操作する。

「ストリームにレイアース、ロクラー＝フレック……複数の魔導器をツギハギにして組み合わせてこる……この術式なら大気に干渉して天候操れるけど……」そんな無茶な使い方して……！ ハリードの丘のといい、あたしよりも進んでるくせに、魔導器に愛情のかけらもない！」

リタは術式を操作しながら、ふつぶつと怒りをあらわにしてこる。

「これで証拠は確認できましたね。リタ、調べるのは後にして……

「……もひょっと、もひょっと調べさせて……」

「あとでフレンにそいつをまわしてもうせばこだらへ。それと何か事を始めよう！」

ヨーリ達は辺りを見回す。

「……何か壊していくものは」

「よし。なんか知らんが、うちも手伝ひのじや」

そう言つてパーティは海賊銃を構える。

「おまえはおとなしくしてこい」

「あつ~。」

パーティはヨーリに止められた。

カロルは近くの支柱をカロリアンソードで叩く。

「あへっ……も「フー！」

リタは唸りながらファイアボールを辺りに放った。流れ弾がカロルに当たった。

「うわあつ！ いきなり何すんだよ！」

「こんなぐら」にしてやんないと騎士団も来にくいでしょっ！」

「でも、これははちょっと……」

「ああ…… やりす「ギだ」

「なに、悪人にお灸を据えるにはちよ「づ」くら」なのじや」

「人の屋敷でなんたる暴挙です！」

別方向から声がして、そこにはラゴウと数人の傭兵がいた。

「おまえたち、報酬に見合った働きをしてもらいますよ。あの者たちを捕らえなさい。ただし、くれぐれもあの女を殺してはなりません」

ラゴウはエスティルを見ながら、傭兵に指示をだした。  
ユーリ達も武器を構える。

「まさか、こいつらって、『紅の絆傭兵团』？」  
ブロッヂドライアンズ

力口ルは傭兵たちを見ながら言った。

リタは未だにファイアボールで屋敷内を攻撃している。

ヨーリ達は傭兵たちを蹴散らしている。

「もう、十分だ、引くぞ！」

コーリはリタに近づいて言った。

「何言つてんの、まだ暴れ足りないわよ！」

「逃げな」と騎士団と鉢巻せだ。今の内に

リタが放つた所にはフレン達がいた。

「執政官、何事かは存じませんが、事態の対処に協力致します」

ムシ)が癒(いのち)す。アリ(アリ)

「フレン！？」

「ほりある」

「ちつ、仕事熱心な騎士ですね……」「

ラゴウが舌打ちした直後、部屋のガラスを割り何かが入ってきた。それは青い竜のような魔物に白い鎧を着た人間が乗っていた。

「う、うわあっ！あ、あれって、竜使い！？」

カロルが驚きながら言った。

竜使いはウイチルの放つ魔術を避けながら魔導器の近くに通り、通りすぎざまに魔核を自身が持つ槍で傷つけた。魔核は砕け散った。

「ちょっとーー何してくれてんの！魔導器を壊すなんて！」

リタは竜使いに向かつて怒鳴った。

「待て、こひー！」

リタは竜使いにファイアボールを放つが全てかわされた。竜使いの竜は口から炎を溜めて、それを魔導器に放つた。竜使いはその後、窓から飛び去った。

「船の用意を！」

「ラゴウはこの隙に逃げようとしていた。

「ちっ、逃がすかーー！」

ユーリ達はラゴウを追って屋敷の外に出た。

「つたく、なんなのよーあの魔物に乗つてんのー！」

「あれが竜使いだよ

「竜使いなんて勿体ないわ。バカドラで十分よーあたしの魔導器を壊してー！」

リタは竜使いに対する不満を爆発させている。

「ねこねこ……ねえの魔導器じゃなこだれ……」

シンクは呆れながら言った。

「それにしても、どうして魔導器を壊したりするんでしょう?」

「確かに。話ができる相手なら、一度聞いてみたいけどな」

「あんな奴とまともな話、できるわけないでしょ！」

リタの言葉を聞くと、ヨーリはポリーとバティに目線を向ける。

「おまえらとはいいでお別れだな」

一 ラコウでわるい人をやつつけに行くんだね」

「ああ、そうだ。お父さんとお母さんとのじるまで行けるか?」

たいじょうふ、ひとりで帰れるよ」

いい子だな

シンクはボリーの頭を撫でた。

「おまえももう危ないとこに行つたりすんなよ。」

「わかつたのじや」

パーティは頷いてポリーと走つていった。

「……あの娘、多分わかつてないわね……」

「……エステル、どうしたの?」

「わたし、まだ信じられないです。執政官があんなひどいことをしていたなんて……」

エステルは沈んだ表情で言つた。

「エステル、信じられないだらつが、これが現実だ」

「シンク……」

シンクはエステルにいつもより厳しく言つた。

「まう、急がないとラゴウに逃げられちやうよー。」

カロルの言葉に、ユーリ達は頷き、ラゴウを追つた。

\*

「あたしは「んなと」ひで向やつてんのよ……」

「あたしは「んなと」ひで向やつてんのよ……」

「行くぞ！」

シンクはそう言いながら、リタとエステルを両脇に抱える。

「え、ちよつとー何すんのよ！」／＼／＼

「シ、シンクー!?」

シンクに掴まれて、顔を赤らめる。

そしてシンケは飛び上かり 船に飛び乗った

「なんでこんなにたくさん魔核だけ？」

「知らないわよ。研究所にだって、こんなに数揃わないってのに」

箱の中には大量の魔導器の魔核が入っていた。

「もしかして、これも魔核ドロボウと関係が？」

「かもな……」「

「でも、黒幕は隻眼の大男でしょ？ラゴウとは一致しないよ」

「どこつ」とは、黒幕は他にいるところとか。リタ、このなかに、水道魔導器の魔核はないか？」

シンクは箱を見ているリタに尋ねた。

「残念だけど、それほど大型の魔核はないわ」

話していると、奥から数人の男たちが姿を現した。  
カロルがその男たちを見て、口を開いた。

「やつぱりこいつら、五大ギルドの一つ、『紅の辯傭兵团』だよ」

この男たちはおそらく紅の辯傭兵团の手下だろう。  
手下たちはユーリたちに襲い掛かつてきただので、ユーリたちは彼ら  
を倒した。

ユーリとカロルが船室の扉の前に立ち、カロルが扉を開けようとした時、

「どきやがれえ！」

「うわあっ！」

扉が勢いよく開き、カロルを突き飛ばした。

中から姿を現したのは隻眼の赤い服を着た大男だった。

「はんつ、ラゴウの腰抜けは、こんなガキ共から逃げてるのか」

「隻眼の大男……あんたか。人使つて魔核盗ませてるのは」

ユーリは後ろから二バンボシを大男に突き付けながら聞く。

「そつかも知れねえなあ……」

大男はそう言つて大剣でユーリを攻撃した。

ユーリはそれをかわし、みんなのところまで着地した。

「いい動きだ。その肝つ玉もいい……ん？」

大男はシンクに目を向けた。

「おまえ、どつかで見たことあると思つたら、蒼き狼ブルーウルフじやねえか」

「蒼き狼？」

ユーリはシンクを見て、首を傾げた。

「バルボス、さつさとこいつらを始末しなさい！」

バルボスと呼ばれた大男の後ろからラゴウが現れた。

「金の分は働いた。それに、すぐ騎士が来る。追いつかれでは面倒だ。小僧ども、次に会えば容赦はせん！」

そう言い捨てバルボスは小舟に乗った。

「待て、まだ中に、ちつ……！ ザギ……！ 後は任せますよー！」

そう言つてラゴウも小舟に乗り、バルボスが大剣で小舟のロープを切つて脱出した。

そして、後からユーリ、シンク、エステルには見覚えのある双剣の暗殺者、ザギが姿を現した。

「誰を殺させて、くれるんだ……？」

ザギはゴーリ達を睨みながら言った。

「あなたはお城で！」

「どうも縁があるみたいだな」

「また会つたか」

ゴーリ達が口々に言つと、船が爆発を起しした。

「刃がひずく……殺らせん……殺らせんおつー！」

そう言つてザギはゴーリに向かつて突進してきた。  
ゴーリはそれをかわし、ザギの刃は船の一部に当たり、船が爆発する。

「つまつと……お手柔らかに頼むぜ」

ザギは再びゴーリを睨み、斬り付けよつとする。

その間にシンクの闇魔刀が入り、ザギの斬撃を防ぐ。

「また会つたな」

「おまえ……邪魔をするなあ！」

ザギは怒つをあらわにし、シンクに標的を変えた。

「シンク！」

リタが悲鳴にも似た声をあげる。

「大丈夫だ！」

「余裕を言つてる暇があるのかあ！？」

ザギは連續して、双剣で闇魔刀を叩きつけ、シンクは膝をついてしまう。

「たゆたう闇の微笑、スプレッドゼロー！」

ザギの前に黒い塊が現れ、それが小規模な爆発を起こした。

「ぐおっ……！」

ザギは少し吹き飛んだ。

今のはリタの魔術だつた。

シンクの近くにエステルとリタが来た。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

「まったく、無茶するんじゃないわよ！」

エステルは治癒術でシンクを回復させる。

「ありがとう、エステル、リタも」

「はい」

「ふ、ふん！」

シンクの言葉に、エステルは微笑み、リタは顔を赤らめながらそっぽを向いた。

ザギはユーリ、カロル、ラピードが相手をしている。

「雷撃ウェーブ！」

カロルはカロリアンソードを帶電させてザギに振り払う。ザギはそれを後ろに下がつてかわす。

「ガウッ！」

ラピードは“瞬迅犬”でザギに突進し、ザギは一瞬仰け反った。

「今だ！爪竜連牙斬！」

ユーリはその隙に回転しながら斬りと蹴りを交互にザギに繰り出す。ほとんどの攻撃がザギの左腕に当たる。

その瞬間、船が再び爆発を起こす。

船の上はすでに炎でつつまれていた。

「ぐうおおおうあーー……い、痛てえ……！」

ザギは左腕を押さえながら痛みに顔を歪める。

「どうやら、勝負あつたな」

「……オレが、退いた……？」

ザギは再び立ち上がり笑いだす。

「アハハハッ！覚えた、覚えたぞ！ユーリ、ユーリイー！」

ザギはユーリを睨みながらユーリの名を叫ぶ。

「オレがおまえを殺す！切り刻んでやる、幾重にも一動くな、じつとしてろ！アハハハッ！！」

ザギは笑っていると、かれの足元が火を噴き出し、その勢いでザギは海に投げ出された。

すると、船が傾き、沈もうとしていた。

「え、沈むの？」

「海に飛び込むぞ！」

ユーリが海に飛び込もうとした時、

『ゲホツ、ゲホツ！……誰か、いるんですか！』

船室から人の声がした。

ユーリは真っ先に船室に走っていく。

「ユーリ！」

エステルがユーリを追い掛けようとしたが、リタとシンクに腕を掴まれる。

「エステリーゼ、ダメ！」

「でも……」

「今は海に飛び込むのが先だ！」

ユーリ以外の全員が海に飛び込んだ。  
シンクたちが海に飛び込んですぐに船は沈んだ。

「みんな、大丈夫？」

「ああ、なんとか」

「けど、ユーリは……」

エステルが沈んだ表情となつて、ユーリの名を呟くと、ユーリが海の中から出てきた。

「ユーリ！」

「ぶはっ！少し水飲んじまつたな」

ユーリは金髪の少年を抱き抱えていた。  
エステルはその少年を見て驚いた。

「ヨーデル！」

「知り合いなのか？」

シンクが尋ねていると、じゅりじゅり帝国の船がやつてきた。その船にはフレンが乗っていた。

「どうやら、無事みたいだな！」

フレンはコーリの抱き抱えていた少年を見て、エステルと同じく驚いた。

「ミーデル殿下……！今、引き上げます！ソディア、手伝ってくれ！」

フレンはユーリたちを船に引き上げ、カプロ・ノールの隣街、カップワ・トリムに船を進めた。

港の街 カプワ・ノール 追い詰める執政官、暗殺者再び（後書き）

次回はカプワ・トリムからカルボクラムまで書くつもりです！  
お楽しみに！

感想もマジでお願いします！

港の街 カプワ・トリム 亡き都市 カルボクラム 未知の魔物 襲来（前書き）

今回はトリム港からカルボクラムまでです。

港の街 カプワ・トリム<sup>ト</sup>亡き都市 カルボクラム 未知の魔物 襲来

「港の街 カプワ・トリム<sup>ト</sup>

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

ユーリが助けた金髪の少年、ヨーテルはユーリたちに礼を言った。

「ね、こいつ、誰?」

リタはヨーテルを指差しながらエステルに尋ねた。

「え、えっと、ですね……」

「今、宿を用意している。詳しい話はそちらで。それでいいね」

フレンはユーリに向かつて言った。

ユーリは無言で頷き、フレンとヨーテルは一足先に宿屋に向かつた。

宿屋の一室に入ると、そこにマフレンとパートル、そしてラゴウがいた。

\*

「……！」

「どの面下げて出てきた……！」

リタとシンクはラゴウを睨み付ける。

「おや、どこかでお会いしましたかね？」

ラゴウは知らない顔で言った。

ゴーリとエスティルは一人の前に出る。

「船でのショックで、都合のいい記憶喪失か？いい治癒術師、紹介するぜ」

「はて？記憶喪失も何も、あなたと会うのは、これが初めてですよ？」

ラゴウは不適に笑いながら言った。

「何言つてんだよ！」

「執政官、あなたの罪は明白です。彼らがその一部始終を見ているのですから」

フレンがラゴウの前に出て、言った。

「何度も申し上げた通り、名前を騙った何者かが、私を陥れようとしたのです。いやはや迷惑な話ですよ」

「ウソ言つな！魔物のエサにされた人たちを、あたしはこの目で見たのよ！」

あくまでじりを切るリゴウに、リタは怒鳴った。

「さあ、フレン殿、貴公はここのなりす者と評議会の私どもひりを信じるのです?」

「フレン……」

リゴウの言葉に、フレンは押し黙つて、顔を俯かせる。

「決まりましたな。では、失礼しますよ」

そう言つてリゴウは部屋を出ていった。

「なんなのよ、あいつはーで、こいつは何者よー?」

リタは怒りながら、ヨーテルを指差して尋ねた。

「落ち着け、リタ」

シンクがリタを宥める。

「この方は……」

フレンが説明しようとした時、エステルが前に出て、代わりに説明する。

「この方は、次期皇帝候補のヨーテル殿下です」

「へ? またまた、エステルは……」

エステルの言葉にカロルは信じられないような顔をする。

「……って、あれ？」

「あくまで候補のひとりですよ」

「本当なんだ。先代皇帝の甥御にあたられる、ヨーデル殿下だ」

「ほ、ほんとに……？」

「はい」

カロルの言葉に、ヨーデルは頷いた。

「その次期皇帝候補が、なんであんなクズ執政官に捕まつてたんだ  
？」

「それはオレも聞いてみたいね」

シンクとユーリはヨーデルに尋ねる。

「……この一件はやはり……」

エステルの言つことに、フレンは頷いている。

「市民には聞かせられない事情つてわけか」

「あ……それは……」

「エステルが騎士に追われてまできたのにも関係してんんだな」

「…………」

一人の言葉に、エステルは黙つてしまつ。

「ま、好きにすればいいさ。田の前で困つてゐ連中をほつとく帝国のじたごとに興味はねえ」

ユーリはそう言って立ち去つとした。

「ユーリ……やつかりて帝国に背を向けて、何か変わつたか？」

フレンの言葉に、ユーリは足を止める。

「人々が安定した生活を送るには帝国の定めた正しい法が必要だ」

「けど、その法が、今はラゴウを許してんだろ」

「だから、それを変えるために、僕たちは騎士になった。下から吠えているだけでは何も変えられないから。手柄を立て、信頼を勝ち取り、帝国を内部から変える。そうだったろ、ユーリ」

ユーリはフレンに向き合つ。

「……だから、出世のために、ガキが魔物のエサにされんのを黙つて見つてか？下町の連中が厳しい取立てにあつてんのを見過こすのかよ！それができねえから、オレは騎士団を辞めたんだ」

「知つてるよ。けど、やめて何か変わつたか？」

「…………」

フレンの言葉に、ユーリは再び黙ってしまった。

「騎士団に入る前と何か変わったのか？」

ユーリは無言で部屋を出ていった。

「俺はユーリに賛成だ」

シンクが口を開いた。

「シンク……」

「あなたの理想はいいとは思う。けど、そういうしてゐる間に、誰かが  
ハグみたいな奴らに苦しめられる。……無慈悲に」

「…………」

シンクの言葉に、フレンは黙る。

「あなたは、どうされるんです？」

ヨーテルがエスティルに尋ねた。  
エスティルはフレンに近づく。

「行つてもいいのでしょうか？」

「なぜですか？」

「……ユーリやシンクと旅をしてみて変わった気がするんです。帝国とか、世界の景色が……それと、わたし自身も……」

そう言つて、エスティルは微笑む。

「そうですか……わかりました。少年……！」

フレンはカロルに向かつて言つた。

「え……ボ、ボク……！？」

「ユーリに彼女を頼むと伝えておいてくれ

「は、はい……！」

フレンの言葉に、カロルは頷いた。  
フレンは今度はシンクに向かつて言つ。

「それとシンク、君にも頼みたい」

「……わかった」

「いいんですね？」

エスティルは戸惑いながら尋ねる。

「私がお守りしたいのですが、今は任務で余力がありません。それに、ユーリのそばなら、私も安心できます」

「フレンはコーリを信頼しているんですね」

「ええ」

「話がまとまつたんなら、行くわよ。あいつ、見失うわよ」

リタの言葉にシンクたちはコーリを追い掛けることにした。

\*

宿屋を出たら、コーリはすぐに見つかった。  
隣にはレイヴンがいた。

「あー…コーリー！おーい！…！」

カロルが大声で呼ぶ。

「あんの、オヤジ……！」

リタはレイヴンを見て走っていく。  
レイヴンはそれを見て一目散に逃げた。

「待て、こひー！ぶつ飛ばす！」

リタはそのままレイヴンを追いかけた。

「おー、ゴーリ。なんであのおつむん逃がした?」

「誤解されやすいタイプなんだぞ」

「え? それ、どういう意味……?」

ゴーリの言葉に、シンクとカロルは首を傾げた。すると、リタが戻ってきた。

「……逃したわ。いつか捕まえてやる……」

「ほりとけ。あんなおつむん、そもそも相手してたら疲れるだけだぞ」

そこにエスティルが息を切らしてやつてきた。

「大丈夫か、エスティル?」

「……少し、休憩させて、ください」

「ああ、じゃ少しだけな。そしたら行くべや」

「行くつてどこにだ?」

「紅の絆傭兵団の後を追つ。下町の魔核、返してもうわねえとな」

シンクの問いに、ゴーリは答えた。

「足取り、つかめたんですね?」

「北西の方に怪しいギルドの一団が向かつたんだと。やつらかもし  
んねえ」

「北西つていうと……地震で滅んだ街くらいしかなかつた気がする  
けどなあ」

カロルは思い出しながら言つた。

「そんなところに向しに行つたんでしょう？」

「さあな」

「そんな曖昧な情報で大丈夫なのか？」

「だから、行つて確かめんだろ」

ユーリの言葉に、一行は北西に向かつた。

\*

（亡き都市 カルボクラム）

そこは街の面影は残つてゐるが、完全に廃墟であった。

「いや、完璧に廃墟だな」

「「」なんど」「」誰が来るつていつのよ」

「またいい加減な情報掘まされたかな……」

「また……？」

ゴーリの言葉にカロルが首を傾げた。

「『や』で止まれ！当地区は我ら『魔狩りの剣』により現在、完全封鎮中にある」

「『』の瓶……！？」

上を見上げると、『』には三田田型の大きな武器を携えた少女がいた。

「あこつ……『イドン』砦で騒いでたやつらと一緒にいた……」

シンクは少女を見て思い出した。

「これは無力な部外者に被害を及ぼさないための措置だ」

「ナンー。」

カロルが少女を見て呼んだ。

「よかつた、やつと追いついたよ」

「…………」

ナンと呼ばれた少女はカロルを睨む。

「首領やティソーンも一緒にボクがいなくて大丈夫だった？」

「なれなれしく話し掛けでこないで」

ナンは冷たい口調でカロルに言った。

「冷たいな。少しばぐれただけなのに」

「少しほぐれた? よくそんなウソが言える! 選ばれしたくせ」!」

逃げ出してなんていないよ！」

- あた言へるかね? -

「言ひ詬じやなし！ちゃんとエッケベアを倒したんだよ！」

「それもう、ソネ

サンはなおもガルに冷たい視線を送る

二〇一

「せっかく魔狩りの剣に誘つてあげたのに……今度は絶対に逃げないって言つたのはどこの誰よ！昔からいつもそう…すぐに逃げ出して、どのギルドも追いつかれて……」

「わあああああつ！わああああつ！」

カロルはナンの言葉を大声で遮った。

「……ふん！ もひ、あんたクビよー……！ ？ 蒼き狼ー？」

ナンはシンクを見て驚いた。

「またその名か……」

「また私たちの狩りの邪魔をするのー？」

ナンはシンクに向かつて怒鳴る。

シンクは呆れ顔になつて口を開く。

「……別に、今はおまえらに用はない」

シンクはめんべくせりて言った。

「ふん、ならいいわ。魔狩りの剣より忠告する！ 速やかに当地区より立ち去れ！ 従わぬ場合、我々はあなた方の命を保障しない」

そう言い残し、ナンは去つていった。

「ナンー！」

「…………」

「それにしても、どうして魔狩りの剣とやらがここにいるんだ？ つな

「さあね」

「多分、十中八九魔物狩りだな」

そう言ってシンクとリタは先へ進もうとする。

「リタ、シンク、待つてください。忠告忘れたんですか？」

「入っちゃだめとは言つてなかつたでしょ？」

「それに紅の絆傭兵团を探しに来たんだしな」

「それもそつだな。奥を調べてみようぜ」

ユーリたちは歩きだす。

カロルも遅れてついていく。

\*

ユーリのソーサラーリングを使って先を進んでいることある一団を見つけた。

「……紅の絆傭兵团……？」

「……じゃなやうだな」

「あれが魔狩りの剣だよ」

カロルは一団を見て言った。

「あの男、『テイドン砦で騒いでたやつだな』

その先頭には『テイドン砦にいた大剣を持った男だった。

「あ、そういうや、見たな。なるほど、あいつがおまえんとこのワーダーか」

「うん、首領のクリントだよ」

クリントはコーリたちが前に戦つた魔物、ガットウーヴと対峙していた。

クリントはガットウーヴを一撃で倒した。

「……なによ、あいつ」

「とどめの一発、フェイタルストライクだ」

「なんだ? そのフェイタルストライクってのは」

シンクの言葉に、コーリは首を傾げた。

「熟練した剣の使い手なら、使えるスゴ技だ」

「ふーん……」

「そりいえばシンク。あんた、蒼き狼つてどいつもこわいよ~」

リタが唐突にシンクに尋ねる。

「なんだ、急に？」

「あの紅の絆傭兵团のバルボスや、ナンつて奴も、あんたのことをう呼んでたじやない。どひいう意味よ？」

「ああ、あれか……修行の旅をしていた時、魔物や盗賊を狩つて回つていた時期があつてな。その時にギルドの連中にそう呼ばれていたんだ」

「そりいや、なんか『邪魔をするな』とかなんとか言われてなかつたか？」

「多分、あいつらの狙つていた魔物とかを倒したりしてたから、かもな。直接会つたことはないが」

シンクは思い出しながら、言った。  
カロルはクリントたちをじつと見ていた。

「戻りたいんじゃないの？」

「そ、そんなの」

リタの言葉に、カロルは反応する。

「え……？ カロル、戻つてしまつんですか？」

「戻らないよ……一魔物狩りには飽きたからね」

「戻らないじゃなくて、戻れないんでしょ？ クビつて言われてたし」

「ち、違つよ。元々、出で行くつもりだつたんだから」

カロルは否定し続ける。

「ふーん、そう。ま、いいんじやない？」

「だから、みんなと行くよ」

「なら、あらためてよろしくな、カロル」

「それにしてもあいつら、あんな大所帯で何する氣なんだ?」

「さつきの魔物が目的なら、ひとりで十分ですもんね」

ゴーリたちは大所帯で来ている魔狩りの剣を見つめる。

「こんな人数が集まるの、今までに一度もなかつたよ」

「わうなんですか?」

「とにかくとは、それほど強力な魔物がいるってことだな……」

「後……つけてみる?」

「それも楽しそうだが、今は紅の絆傭兵団の方が先決だ」

「それもそうね」

ゴーリたちは魔狩りの剣を後にし、違う道を進んだ。

\*

ユーリたちは建物の階段を降りて、螺旋階段の奥へ行つた。すると、全員が身体に異常を訴える。

周りには緑色の粒子が飛んでいる。

「これは……」

「エアルよ。濃度が濃くなつてる……」

「やついえば、クオイの森で、エステルがそれで倒れたな……」

シンクがエアルで苦しみながらも思い出して言つた。

「あんたたち、そんなことがあつたの……？」

「あ、あれ、なに？」

カロルは奥にある機械に目を向ける。

そこには扉らしきものもあつた。

「この魔導器がドアと連動してゐみたい。ここにパスワードを入れれば、開く仕組みみたい」

「パスワード……わかるか？」

ゴーリの言葉に、リタは首を振る。

「ちちがにノーヒントじゃ わからないわ

「ヒント……もしかしてこれが？」

シンクは三枚の紙を取り出した。  
その紙には一枚ずつに、『光』『空』『球』と書かれている。

「シンク、それをどこで？」

「いや、他の建物の中をあちこち調べていたら見つかった」

シンクは真顔で答えた。

「あんたってやつは……けび、助かるわ  
リタはシンクから三枚の紙を受け取り、装置に『太陽』と打ち込む。  
すると、ドビラが開かれた。

「行こう

一行はドビラの先へ進んだ。

そこには先ほどよりもエアルが充満していた。

「水が浮いてる……」

カロルの言葉に、全員が上を見た。

そこには、魔導器らしきものが浮いていて、水を浮かせていた。

「あの魔導器の仕業みたいだな」

「たぶん、」の異常も……」

「あれ、Hフリードやカプワ・ノールの子に似てる」

「壊れてるのかな……？」

「そんなわけないだろ、ちゃんと動いてるじゃないか……」

シンクはカロルの言葉に、ツツ「んだ。

「……じゃあ……一体……」

「わからない……あの子……何をしてるの……」

「エーハヤ、……」のつを閉じ込めているからこそ……」

シンクは下に視線を落としながら言った。

そこには、今まで会ったものより巨大な魔物がいた。

「ま、魔物お……」

カロルが怯えた声で囁つ。

「病人は休んだけ。」に医者はいねーぞ」

「え……？ で、でも……ひ、うわあ……！」

魔物は下から暴れだしていた。

「結界が破れるぞ……！」

「大丈夫、あれは逆結界だから」

「逆……結界……？」

リタの言葉にカロルは首を傾げた。

「魔物を閉じ込めるための強力な結界だ。簡単には出られない。だが、なんだ、このエネルギーの量は。異常すぎるぞ」

魔物は暴れ続け、逆結界がバチバチと音を立てる。

「な、なんか消えそう……！」

それを見たりタは走りだした。

「リタっ！？」

「待て、リタ！」

シンクはそれを追いかけた。

「待つててね……今、治してあげるから……」

「無茶をするな」

リタをシンクが抱き留める。

「俺様たちの優しい忠告を無視したのはゼビのせいだ？」

違う方向から声がした。そこには、ナンにクリント、そして、フードの男、ティソンもいた。

「悪いな。こっちにや、大人しく忠告聞くよつた優しい人間はいねえんだ」

「ひん、なるほど……って、なんだ、クビになつたカロル君もいるじゃないか」

ティソンの言葉に、カロルは暗い表情をする。

「しかも、蒼き狼まで来てるってか……また俺らの獲物を横取りに来たか」

「あいにく、今はあんたらの獲物は横取りする気はねえよ」

「ちょうどいい。そのまま大人しくしていろ。こちらの用事は、このケダモノだけだ」

クリントが大剣を抜きながら、下にいる魔物を見た。

「大口叩いたからにはペットは最後まで面倒見ろよ。途中で捨てられる」と迷惑だ

ユーリが挑発じみたことを言つたとき、上から鳴き声が聞こえた。

「なにつー?」

すると上から竜使いが魔導器を壊しながらやってきた。

「またあいつー。」

リタは竜使いを睨む

『ウオオオオオンー！』

逆結界に閉じ込められていた魔物は結界が壊れたことにより、自由となつた。

「ふへ……あれ……？平氣です……」

エスティルが呟くと、周りのエアルの濃度が薄くなつていた。おそらく結界が破れたからだろう。

「け、結界破れたよっ！」

「逆結界の魔導器が壊れたから当然でしょー！つんつんにあのバカドラー！」

リタは竜使いを睨みながら怒りをあらわにしてくる。  
クリントは魔物を大剣で斬り付ける。

「そうだ、もつと暴れる！ケダモノはケダモノらしく、我が手で、  
ほふつてくれるわー！」

すると、竜使いがクリントたちの前に現れる。

「…………ほう？」

「『『まず、オレを倒せ！』』って事らしいぜ。面白えじや、ねえか  
！…」

クリントたちは竜使いと戦闘を開始していた。  
その間に、魔物が暴れだし、ユーリたちの足元が崩れた。  
シンクはリタを抱き止め、着地する。

「大丈夫か、リタ？」

「う、うん……大丈夫よ」

リタの安全を確認すると、シンクは魔物の方を見た。  
魔物はユーリが相手をしていて、途中からラピード、エステルも加  
わる。

「俺たちも行こう！」

「わかつたわ！」

シンクとリタは、ユーリたちに加わる。

「待たせたわね！」

「加勢するぞ！」

「ああ、助かる」

魔物は巨大な前足を振り下ろす。  
ユーリたちはそれをかわす。

「茨よ、アイヴィーラッショ！」

リタが魔物の足下に、茨を出現させ、攻撃するが、あまり効いていない。

「刃に宿れ、更なる力、シャープネス！」

エステルがユーリとシンクの攻撃力を上げる魔術をかける。

「蒼破牙王撃！」

「風牙一閃！」

ユーリは蒼破刃の後に牙浪撃を繰り出し、シンクは風をまとった魔刀で魔物を攻撃する。

しかし、あまり手応えがない。

「……なあ、ユーリ」

「なんだ、シンク？」

「あの魔物、様子が変じゃないか？」

「変？」

ユーリは魔物を見ながら、シンクの話を聞いた。

「敵意をあまり感じない。それに、こっちを見てるぞ」

魔物は攻撃をやめ、なぜかエステルを見る。  
そして、顔を少しエステルに近付ける。  
エステルは身構える。

『ウオオオオオン！』

魔物は吠えると、ビコかへと去つていった。

「はあ……助かりました」

「……カロルは？」

リタが周りを見渡しながら言った。

すると、後ろから魔導器が落ちてきて、上から水が流れてきた。

「全ての魔物はな、俺様に殴られるために、生まれてきたんじゃー  
！」

ティソンが腕を広げながら叫んだ。

「師匠！ 危険です！」

「極上の獲物を前に！ 命がおしくて逃げ出せるか！」

ティソンは逃げようとする竜使いに向かつて飛び上がった。  
リタも竜使いに魔術を放とうとする。

「ぐへらああつ！」

ティソンは竜使いに振り払われ落ちていく。

そして、天井が崩れようとしていた。

「天井が……！」は危険です！」

エスティルが叫ぶ。

クリントたちも獲物がいなくなつたことで撤収していった。

「オレたちも退くぞ！」

「あ～もう、あたしもあのバカドラ殴りたかったのに！」

「また次の機会にでもすればいいだろ！」

シンクとワタも出ようとある。

「待つてください、カロルはどうにか…？」

「たぶん、もう先に外へ出たんだろ？ 探しながら行くぞ…」

ゴーリたちは先ほどのトドカラへと逃げた。

\*

ゴーリたちは建物を出て、カロルを探すこととした。

「なにかあれば、すぐにそ�ーいつも、いつもひとりで逃げ出して

！」

カロルはナンと言ひ合っていた。

「ち、違ひよ！」

「何が違ひの！？」

「だからハルルの時は……」

「今はハルルのことは言つてない！やましい」とがないのなら、さつさと仲間のところに戻ればいいじゃない」

「だからそれは……」

「あたしに説明しなくていい。する相手は別にいるでしょ」

「え……？」

カロルが振り返るとユーリたちがいた。

「みんな……」

「カロル、無事でよかつたです」

「まったくよ。どに行つてたんだか。こつちは大変だつたのに

「まあ、そう言ひつな」

シンクは愚痴るリタを宥める。

カロルはみんなに頭を下げる。

「「」「」めんなさ」……」

「ま、ケガもないみたいで何よりだ」

ユーリはもう言つて、カロルの頭を撫でる。

「もうへ、行くから」

「あ、待つて……」

「自分が何をしたのか、ちゃんと考えるのね。じゃないともう知らないから」

そう言つて、ナンは走つていった。

「行こうぜ、カロル。もう疲れた」

「ユーリ……」

カロルは少し安心した顔になつた。

「しかし、紅の辯傭兵团なんていなかつたな」

「ほんと? やつぱあのおっさんの情報は次から注意しないとな

「おひや? ……ついで、まさか、あの……?」

「そう」

リタの言葉にユーリは頷く。ユーリに情報をくれたのはレイヴンだと。

「あ、あ、あのおっさん、次は顔見た瞬間に焼いてやるつー…

「穩便に、ね、穩便に行きましょ」

エステルは慌ててリタを落ち着かせる。

ユーリたちはカルボクラムを出ることにした。

\*

入り口に行くと、そこには騎士が三人いた。

真ん中には前にユーリとシンクが帝都で会ったキュモールがいた。

「グルルルルル」

ラピードがキュモールを見て威嚇する。

「よつやく見つけたよ、愚民ども。そこで止まりな」

「わざわざ海まで渡つて、暇な下つ端どもだな

「くつ……キリトリ端呼ばわりされる筋合いはないね。さ、姫様、  
こ・じ・ら・へ」

気持ち悪い口調でキュモールはエステルに近づいてゐる。

「え、姫様つて……誰？」

「姫様は姫様だろ。そこの日の前のな」

ユーリはエステルを見ながら言つた。

「え……ユ、ユーリ、どうして、それを……？」

「え……エステルが……姫様？」

「や、ぱづね。わづじやないかと思つてた

「ああ、俺も薄々そう思つっていた」

「え、リタとシンクも……？」

一人の言葉にて、エステルは戸惑いを隠せなかつた。  
エステルはキュモールの前に歩きだす。

「……彼らをどうするのですか？」

「決まつてます。姫様誘拐の罪でハツ裂きです」

「待つてください、わたしは誘拐されたのではなくて……」

「あへ、ひむきい姫様だねー」「ちこちこ来てくださいよー。」

エステルが否定しようとするが、キュモールは態度を変えて、剣を抜く。後ろにいた騎士たちも槍を構える。

「エステル！」

「そつちのハエはそこで死んじゃえ！」

「ユーリ・ローウェル、名無しの男とその一味を罪人として捕縛せよ。」

キュモールの後ろから、ルブラン、アーティール、ボッコスがやってきた。

「げつ……貴様ら、シュヴァーン隊……！待ちなよー！こいつは僕の見つけた獲物だ！むざむざ渡さんぞ！」

「獲物、ですか。任務を狩り気分でやられては困りますな」

「ぐつ……」

ルブランの言葉に、キュモールは押し切られる。

「それに先ほど、死ね、と聞こえたのですが……」

「そうだよ、犯罪者に死の咎を引かれて何が悪い？」

「犯罪者は捕まえて、法の下で裁くべきでは？」

「ふん……そんな小物、おまえらにくれてやるよ」

そう言つて、キュモールは部下を連れて、行つてしまつた。

「わわ、どうぞ、姫様はいらっしゃり、あ、お足元にお隠をつけで……」

「あの、わたし……」

「ひらりくべーだー」

ボッコスの言葉でエステルは前に行く。

「」いやつらをシコガマーン隊長の下に逮捕せよー。」

ユーリ一味ーおとなしくお繩をちょうどいするであーる。」

アテホールとボッコスはユーリたちを拘束しよつとした。

「一味つて何よーなにすんのよーはなせーあたしを誰だと……」

「ボクだって何もやつてないのにー」

「彼らに乱暴しないでくださいーお願ひします…………」

エステルはルブランに懇願しようつとした。

「エステル、心配しなくていい」

「俺たちは大丈夫だから、安心しや」

「ユーリ、シンク……」

ゴーリたちはアートホールとボッコスに引つ張られた。

「ここからさっさと歩くのである。」

「こいつ、ちよつと引っ張るなよ……。」

「シュヴァーン隊長、不屈き者を、ヘリオードへ連行します」

全員が去った後、ルブランは屋根に立つてこの隊長服の男に囁く。  
男は頷くかわりに左手を上げ、頷く。

「全員、しゃっぽー。」

ゴーリたちはルブランたちに連れられ、ヘリオードに連行された。

港の街 カプワ・トリム／<sup>亡</sup>き都市 カルボクラム 未知の魔物 襲来（後書き）

次回はヘリオードの話です。

唐突なんですが、この作品にテーマ曲をつけるなら何がいいですか  
ね？

感想と一緒にお願いします。

新興都市 ヘリオード 姫の力（前書き）

わざか連載1ヶ月あまりだと、このアクセスがついに5万をいつていた……

ありえん！ありえんぞお！

みなさんこれからも応援よろしくお願いします！

## 新興都市 ヘリオード 姫の力

「続けて18番田の罪状を確認する」

「はい、どうぞ」

ユーリたちはルブランたちに取り調べを受けていた。ほとんどがユーリのだが。ユーリ、リタ、カロルは座り、ラピードはその横で寝ている。シンクは壁にもたれている。

「滞納された税の徵収に来た騎士を川に落としたのは間違いないな？」

「そんなこともあつたな。あれ、テコだつけ？」

「やうだーおかげで私は風邪をひいて、三日間寝込んだのである

「……それで、あといくつだ? もうユーリだけでいいだろ」

「ボクはまづなつちやうんだろ?」

シンクとカロルは不満を露ぐ。

「反省の色はなし……と、徵収に残してやるのだ」

「そういや、おまえらひとこの何もしない隊長はいた? シュヴァーンにつたつけ?」

「偉いからつてサボりでしょ」

リタの言葉にルブランは反応した。

「我らが隊長を愚弄するかー！シュヴァーン隊長は、10年前のあの大戦を戦い抜いた英傑だぞ」

「ま、俺たちみたいな小物には用はないってことだな」

「ええ～い！次の罪状確認をするのであるー！」

アデールが怒鳴ると、一人の男女が入ってきた。一人は長い耳に触角のある褐色肌の女性で、もう一人は白い髪に騎士の鎧を着た男性だった。

「ア、アレクセイ騎士団長閣下！どうしてこんなところにー？」

アレクセイが来たことに、ルブランは驚いていた。  
アデールとボッコスはすぐに敬礼をした。

「アレクセイ……なんで」

「エステリー＝ゼ様、ヨーテル様、両殿下のお計らいで私たちの罪はすべて赦免された」

アレクセイはユーリとシンクを見て言った。

「な、なんですかー！」こつらは帝都の平和を乱す凶悪な犯罪者で……」

「ヨーテル様の救出並びに、エステリー＝ゼ様の護衛、騎士団として

礼を言ひつい

アレクセイが言つと、女性の方がお金の入った袋をコーリに差し出す。

「うわらわ……」

「そんなもん、こりねえよ。騎士団のためにやつたんじゃない」

「右に向じへ」

「やうか」

やう言つてアレクセイと女性は部屋を出よつとした。

「それよつ、エスティルのことだが……」

「先ほど、帝都に戻る時に承諾いただいた」

「えつ……あ、でも、お姫様なら仕方ないか」

カロルは一度驚くが、すぐに理解した。

「姫様には宿でお待ちいただいている。顔を見せてあげてほし」

そう言つて、アレクセイと女性は部屋を出た。

\*

ユーリたちが部屋を出て、外に出た。  
そこはレンガ造りの街だった。

「Hステル、帰っちゃうんだね」

「あんた、これでいいの？」

リタはユーリに尋ねる。

「選ぶのはオレじゃないだろ」

「そりゃ……そうだけど」

「それよつ、こじはどこだ？」

「新興都市ヘリオードだよ。位置的にはトリム港とダングレストって街の間だね。まだ作られて間もない新しい街なんだ」

ユーリの問いかに、カロルが答えた。

「この道を東に行けばさつきいたカルボクラム、西に抜けて西北に行けばダングレストだよ」

「ふうん、少し街の中も見て回るか」

「……あたしは好きこそしてもらひや」

「俺もそつする」

「ボクは……どうしようかな」

ゴーリたちのはじめから自由行動となつた。

\*

シンクは街の中心にある結界魔導器を見ていた。

「おや、君か」

そこにアレクセイとクリティア族の女性がやつてきた。

「あんたか……」

「君にも感謝するよ。エスティーヴ様の護衛に、ヨーデル様の救出」

「別に、俺は感謝されるようなことはしていないつもりだ」

「フレンから聞いたのだが、君はどうやら記憶喪失らしいな」

「エスティルか……」

フレンに話したのはおそらくエスティルだらう、とシンクは予想した。

「まあな、手がかりはこいつだけみたいだ」

そう言つてシンクは闇魔刀を見せた。

「ほう……伝説の英雄の剣の一本……なぜ、君が……？」

「あんたも知つてゐるのか？スパーダを」

「まあな。古い文献を調べているうちに目に入つてな。伝承によれば、このテルカ・リュミースのどこかに存在するとは聞いていたが、よもやこんなところで……」アレクセイは闇魔刀をまじまじと見つめる。

「それがあるということは、どうやら他の一本もどこかにあるということだな。君の記憶を取り戻すにも、他の一本を探すのが得策と私は思う」

「スパーダか……探してみるかな」

「頑張りたまえ、では、また」

そう言つてアレクセイは去り、クリティア族の女性は一度お辞儀をして去つた。

「スパーダ……俺の記憶の手がかり……」

シンクはそう呟いたあと、宿に行つた。

\*

シンクが宿に行くと、ゴーリたちが集まっていた。

「ん? ハスティルはどうした?」

シンクはゴーリに尋ねた。

「行つたんだけど、会つのは明日でいいからねってよ」

「やうか

「じゃあ、ボクたちも部屋に行つ

カロルの言葉に、ゴーリたちは頷き、部屋で休んだ。

\*

翌日。

「……

「ピードが何かに反応していた。

「どうした、ラピード?」

「変な音、聞こえない？」

「言われてみれば、確かに」

「ああ、なんでも、結界魔導器の調子が悪いんですよ」

ユーリたちの疑問に、宿の店員が答えた。  
それを聞いたリタが真っ先に走りだした。  
シンクがその肩を掴んだ。

「ちよっと待て、リタ！」

「待つてらんないわよ」

「騎士団長様だつているんだ。すぐに手打つてくれるだろ」

「リタが出てこつて勝手すると、<sup>騎士に伝えればいいだら</sup>HFCのHの時みたいになっちやつもんね」

「ま、気が向かば、フレンツって騎士に伝えればいいだら

「わ、わかったわよ……」

シンクの言葉に、リタは頷いた。

\*

ユーリたちは騎士団本部にいるフレンに向って行った。そこに魔法ステルもいた。

「なんか、結界魔導器が変な音出してるけど、平氣か？」

「それが気になつて、わざわざ顔を出したのか。相変わらず、田の前の事件をユーリは放つておけないんだな」

フレンは皮肉っぽく、言った。

「オレがつていうか、こいつの……」

ユーリはそう言いながら、リタを横田で見た。

「様子がおかしいのは明白よ。あたしに調べさせてー。」

「今、こちらでも修繕の手配はあるんだ。悪いが魔導器を調べさせられるわけにはいかない」

「なんですよー。」

フレンの言葉に、リタは怒鳴った。  
その時、街が大きく揺れた。

「なんだ、今の振動？」

「まさか、魔導器が？」

「おー、リタ！」

リタはその間に走つていった。

「結界魔導器に何かあつたんだろう？」

「ああ、行つてみるぞ」

「エステリーゼ様はここに！」

ユーリたちは結界魔導器のある広場に走つた。

\*

広場の中心の結界魔導器からは強い光が放たれていて、そこからエアルが噴き出していた。

しかし、本来、緑色のエアルは今は赤い粒子となつていた。周りの植物が異常な大きさに成長し、街の人々はぐつたりと倒れていた。リタが魔導器のところに行こうとしたとき、シンクが腕を掴んだ。

「待て、リタ！」

「ちよつとはなしてーこの子ほつとけないのよー」

リタは叫んだ。

「エアルがバカみたいに出てるー」の濃度じゃ命に関わるわ！

「おまえだつて危険じやねえかー？」

近くにいたコーリが怒鳴る。

その時、衝撃波が飛んできて、コーリとシンクは吹き飛ばされた。リタは急いで魔導器の方に走った。

ユーリとシンクも追いかけようとするが、エアルに邪魔される。リタは魔導器に駆け寄る。

「大丈夫、エアルの量を調整すれば、すぐに落ち着くから。元通りになるからね！」

魔導器に話し掛けるように術式を展開し、操作する。

「危ないー今すぐ離れるんだ！」

フレンが遠くからリタに叫ぶ。

フレンの後ろからアレクセイがやつてきた。

「……市民を街の外へ誘導だ。あと姫様を含めた彼らも」

「はい」

「エアルの暴走だ。どうなるか想像が付かん」

アレクセイが結界魔導器を見ながら言った。

「……そんな！この子の容量を超えたエアルが流れ込んでる。このままじゃ、エアルが街を飲み込むか、下手すりや爆発……」

「ば、爆発だつて！」「冗談じゃないぞ！」

「みんな、逃げろ！急げ！」

リタの言葉を聞いた市民が逃げ出す。

「リタ！？」

エステルがリタのところに走った。

「姫様！？」

「エスティーリー・ゼ様！」

「ちつ！」

アレクセイとフレンは驚き、ユーリは舌打ちをする。シンクはエステルについて走っていく。

「おい、シンク！」

「シンク君、待ちたまえ！」

「待てるか！」

ユーリとアレクセイが止めるが、シンクはエステルについてリタのところに向かつた。

エステルは何故か光を放っていた。

「おまえ……！？」

「リタ！だいじょ‘うぶー」

「……エステリーゼ……シンク……」

リタが一人を見て、驚いた顔をする。  
リタは急いで術式を操作した。

「よしそ、できた……」

リタがそう言つたとき、魔導器が強い光を放とうとした。  
シンクはその刹那、リタとエステルをコーリたちのところに突き飛ばす。

「ぐあああああーー！」

シンクは吹き飛ばされ、レンガの壁に激突し、意識を失つた。

「……っーー！」

「……シンクッーー！」

体を起こしたリタとエステルはシンクに駆け寄る。

「シンク、しつかりしてーー！」

「シンク……田を覚ましてーー！」

エステルはシンクに治癒術をかけた。

すると、雨が降ってきた。

「…………はあ…………はあ…………シンクを…………休ませる部屋を…………準備して  
くださー…………」

「…………おねがい…………シンクを…………おねがい…………」

エスティルとリタは弱々しく囁つた。  
そこにコーリがやつてきた。

「なに言つてやがる。おまえらもせひせひじやねえか

「すぐに準備を…………！彼は私が連れていきましょ！」

フレンがやつてきて、シンクを担いで、宿に向かつた。  
その様子を遠くから見ていた騎士がいた……

\*

宿の一室では、ベットで未だ目を覚まさないシンクにエスティルが治癒術を掛け続けている。リタはシンクの手を握りながら、眠っている。

そこへノックする音がした。

「…………ど、どうぞ」

入ってきたのはユーリだった。

「治癒術だつて無限に使えるわけじゃない。もうシンクも落ち着いてる。その辺にしておけ

「はい……」

そう言つてエステルは治癒術をやめた。

「つたぐ、無茶しやがって」

「本当にですね。リタとシンクつて、決めたことじまでも真つ直ぐで……」

「ひとりとこすんな。エステルも同罪だ」

「…………めんなさい」

エステルは謝った。

「ここ、オレが残るから、エステルはもう休め。治癒術使つて疲れたらろ?」

ユーリの言葉に、エステルは首を横に振つた。

「わたし、リタとシンクがつらやましいです。大切なものを持つているから……」

「リタはわかるが、シンクはわからないな……」

「わからぬんですか？」

「ああ、ここへ、そんなに自分のこと話せなこい」

ゴーリの言葉に、Hスティルはため息をついた。

「つていうが、今は休んどけよ」

「だいじょぶです。ゴーリの方こそで休んでください」

「おまえが倒れたら、オレがフレンに怒られるの」

「なら、怒りなげください」

Hスティルの言葉に、ゴーリは呆ながら部屋を出た。

\*

「ん……」

シンクはよつやく目を覚ました。

そこでは、Hスティルとリタがベッドに突っ伏して眠っている。

「気がついたか？よかつたな」

ゴーリが小声で尋ねた。

「あ、ああ

シンクは一人を起しきれなごよひに起き上がった。

「エステル、ずっと治癒術使つてたんだぜ。リタなんか、おまえの手を握つていたからな」

「さうか……道理で……」

シンクが自分が倒れたのを思い出していると、リタが皿蓋を開ひつとじていた。

「ん……シンク……？」

「ああ、リタ」

「シ、シンクッ！」

リタはシンクを見た途端、シンクに抱きついた。

「リタ、落ち着け！」

「落ち着けるわけないでしょ……本当に、心配したん、だから……」

抱きついていて、表情は見えなかつたが、おそらくリタは泣いているといつのはシンクにわかつた。

シンクはそつとリタの頭を撫でる。

「ああ、ありがとう……」

「おー、お一人さん、アツアツのところ悪いが、エステル目覚まし

ちまつぞ

ユーリが呆れながら言つた時、

「ふむう……あれ？シンク！田<sup>だ</sup>が覚めたんですね！」

エステルが急に体を起<sup>おき</sup>した。

リタは顔を赤くしながらはすぐ<sup>そぐ</sup>にシンクから離れた。

「あ、でも油断したらダメですよー！治つたと思った頃が危ないんで  
す」

「もう大丈夫だ」

「あと、魔導器を使うフリ、もつやめていいよ」

リタの言葉に、エステルは驚いた。

「な、何のことです？」

「魔導器なくても、治癒術使えるなんてすげえよな  
「ど、どうしてそれを……」

エステルが口<sup>くち</sup>もつたときだった。窓にむかと影が差した。そこには竜使いがいた。

「あいつはー！」

「バカドラー！」

竜使いの竜が火球を放ととした。

シンクは二人を押し退け、竜使いの前に出る。ヨーリも竜使いの前に出た。

「無茶すんな、シンク！」

「大丈夫だ！」

そう言つて二人は、闇魔刀と二バンボシで竜の火球を凌いだ。竜使  
いはなぜかとまどつようなそぶりを見せた後、振り上げていた槍を  
下ろす。

「すごい音がしたけど、どうしたの……って、うわああああ！…」

カロルが部屋に入つてきて、竜使いを見て驚いた。  
竜使いは次の火球を放たず飛び去つていった。

「な、なに！？なんだったの！？」

カロルは状況が飲み込めていない中、ヨーリたちは話していた。

「大事な話だつたのに……」

「エスティルの治癒術に関してはここまでだな……」

「ま、あたしはだいたい理解したけど」

「え？ なに？ 何の話？ ボクだけ仲間はずれ？」

「そうか。ならエスティルをフレンのところに連れていい」

「おまえはリタと一緒に留守番だ。まだ休んでいろ」

「……わかった」

「ちよつと、勝手に話進めないでよー。」

ユーリたちがカロルを無視して、話を進めていたので、カロルが文句を言いながら、シンクとリタを残し、部屋を出た。シンクは再びベットに入り、リタは隣の椅子に座る。

「あのれ……シンク……」

「ん? なんだ?」

「そのエステリーゼとあたしを、助けてくれて……あ、ありがとう」

リタは顔を赤くしながら礼を言った。

シンクはそれを見て、

「俺は当然のこととしただけだ」

そう言って微笑む。

「それでも、ありがと」

リタはそう言って微笑み返した。

\*

翌日。

ゴーリたちは宿屋の前で集まっていた。

「帝都までの道中、気をつけな」

「はー……」

「忘れ物とかないか？途中で思い出しても迷惑がけんなよ」

「忘れたら、ゴーリが届けてくれやー」

「おこおこ……」

エスティルの言葉に、シンクは呆れた。

「バカ言つてんな。やつやとフレンヒー行くわ。そこまでは送つてやつから」

「あ、あの、ゴーリたちはこのあとどうするのです？」

「やうだな。紅の辺傭兵団の足取りも途絶えちまつたし……」

「なら、ロリから西のダングレストがここと通つや」

シンクがゴーリに答えた。

「ダングレストっていうと、確かギルドの街だよな？」

「ああ、紅の絆傭兵団の情報も見つかるはずだ」

「なら、行くか、カロル。ギルド作るにしても、色々と参考になるだろうし」

ユーリの言葉に、カロルは驚いた。

「え？ ギルドのために？ なら、行くついで

ユーリたちはとりあえず広場に行つた。

「フレンって騎士いないじゃない

」「このままボクらここへくるっ！」

カロルはエステルに尋ねる。

「そうですね。そうしてもいいですか？」

「勝手をされでは困ります。エスティーレ様には帝都にお戻りいだかなかないと」

そこにアレクセイとクリティア族の女性がやつてきた。

「フレンは別件すでに旅立つた。さて、リタ・モルディオ、君には昨日の魔導器の暴走の調査を依頼したい」

そう言ってアレクセイは、リタに顔を向ける。

「……あれ調べるのはもう無理。あの子、今朝少しみたけど結局何もわからなかつたわ」

「いや、ケーブ・モック大森林に行つてもらいたい」

「ケーブ・モック大森林か。暴走に巻き込まれた植物の感じ、あの森にそつくりだつたかも」

カロルが思い出したように言つた。

「最近、森の木々に異常や魔物の大量発生、それに凶暴化が報告されてゐる。帝都に使者を送つたが、優秀な魔導士の派遣にはまだまだ時間を要する」

「あたしの専門は魔導器。植物は管轄外なんだけど?」

「エアル関連と考へれば、管轄外でもないはずだ」

「それに……あたしは……エステルが戻るなら、一緒に帝都に行きたい」

「え?」

「君は帝国直属の魔導器研究所の研究員だ。我々からの仕事を請け負うのは君たちの義務だ」

アレクセイが言つたとき、エステルがリタに近づく。

「あ、え、えつと……それじゃあ、わたしがその森と一緒に行けば

「姫様、あまり無理をおつしゃらうないでいただきたい」

「エアルが関係しているのなら、わたしの治癒術も役に立つはずです」

「それは、確かに……」

「お願いです、アレクセイ！わたしにも手伝わせてください」

「しかし、危険な大森林に姫様を行かせるわけには」

「それなら、ユーリ、シンク、一緒に行きませんか？」

そう言つてエステルはユーリとシンクを見た。

「え？ オレらうが？」

「俺は構わないが」

「ユーリたちが一緒なら、かまいませんよね？」

アレクセイは少し考え込み、

「青年方、姫様の護衛をお願いする」

「……仕方ねえな。ただし、オレにも用事がある。森に行くのはダングレストの後だ」

「致し方あるまじ

そつとアレクセイは去りつとした。

「閣下……」

「」の結果を、フレンは予期していたようだな

「ん？ フレンがどうしたって？」

『『ヒステリー』様を頼む』。フレンからの伝言だ

エスティルはアレクセイにお辞儀をした。

「よし、じゃあ、ダングレスト経由で、ケーブ・モック大森林だね」

カロルの言葉で、ユーリたちがダングレストを目指す。

**新興都市 ヘリオード 姫の力（後書き）**

次回はダンジョンストラーケーブ・モック大森林の流れになります。

次回もお楽しみに！

感想もお願いします！

ギルドの巣窟 タングレスト／ケープ・モック大森林 魔物の襲撃、うさんくさ

お待たせしました。  
今回も新技登場します。

## ギルドの巣窟 タングレスト／ケープ・モック大森林 魔物の襲撃、ついでアーヴィング

「ギルドの巣窟 タングレスト」

「ヨーリがダングレストか？」

「ああ、そうだ」

ヨーリが街を見渡して、シンクに聞いて、シンクは答えた。  
「いややかなところみたいだな」

「そりや、帝都に次いで第一の都市だし、ギルドが統治する街だからね」

「もつとじめじめした悪党のいる巣窟だと想つてたよ」

「それって、ギルドに対する偏見だよね」

カロルがムツとして言つた。

「紅の絆傭兵団の印象が悪かつたからだ」

「僕まで悪党なのかと思つたよ」

「あんたが悪党なら、ここつまづくなるのよ」

リタはヨーリを指差しながら言つた。

「それもやつだ。さて、バルボスの『じはざ』から手をつけよつか」

「ユニークなら、早いし確実だと思うが」

「ユニークとはギルドを束ねる集合組織で、五大ギルドによつて運営されている、ですよね？」

エスティルは説明して、カロルに尋ねる。

「うん、それと、この街の統治も、ユニークが取り仕切つてるんだ」「でも、いいわけ？バルボスの紅の絆傭兵団つて、五大ギルドのひとつでしょ？」

「うー」とはバルボスに手出したら、ユニークも敵に回るな

「それはユニークを統治するジンに聞いてみないと、なんとも言わないな」

シンクがカロルの代わりに答えた。

「んじゃ、そのジンに会つか。カロル、案内頼む」

「ちょっとそんなに簡単に会つて……。ボクはあんまり……」

「じゃ、シンク、あんたが案内して」

「ユニークは街の北側だ。ついでに」

シンクを先頭に、一行はユニーク本部に向かつ。

広場まで歩くと、カロルがキヨロキヨロと周りを見ている。

「あんた、何してんの？」

「え？ な、なにって、べつに」

「ん？ そこにいるのはカロルじゃねえか」

ユーリたちの前に、二人組の男がやってきた。

「どの面下げてこの街に戻ってきてんだ？」

「な、なんだよ、いきなり」

「おや、ナンの姿が見えないな？ ついに見放されちゃったか、あはははっ！」

「ち、違つて、いつもしつこいから、ボクがあいつから逃げてるの…」

「（）れがあるから、最初ダングレスト行き気乗りじやなかつたんだな）」

「（だらうな）」

ユーリとシンクはカロルを見ながら小声で話した。

「あんたらが（）つ拾つた新しいギルドの人？ 相手は選んだ方がいいぜ」

「自慢できるのは、所属したギルドの数だけだし。あ、それ自慢に

ならねえか」

カロルは顔を俯く。

「カロルの友達か？相手は選んだ方がいいぜ？」

「な、なんだと…」

「あなた方の品位を疑います」

「ぶさけやがつて！」

「あんた、言うわね。ま、でも同感」

「大の大人がよつてたかつて何やつてんだかな」

「言わせておけば……！？」

男はシンクに気づいて、表情を変えた。

「お、お前、蒼き狼！」

「帰つてきやがったのかよ、くそつ」

男たちが悪態をついた時、街に鐘の音が鳴り響いた。

「何の音……？」

「やべ……また、来やがつた……」

「行くぞ！」

そう言つて男たちは走り去つていつた。

「警鐘……魔物が来たんだ」

「魔物つて……まさかこの震動、魔物の足音……」

「だとすると、こりや大群だな」

「ま、でも心配いらないよ。最近多いけど、こここの結界は丈夫で、破られたこともないしね。外の魔物だつて、ギルドが撃退……」

カロルがそう言つて空を見上げた時、結界が突然消えた。

「……つて、ええつ……！」

「結界が、消えた……？」

「一体どうなつてんの！魔物が来てるのに！」

「つたく、行く場所、行く場所、厄介」と起こりやがつて……

ユーリがため息をつきながら言つた。

「おまえ、なんか憑いてるんじゃないのか？」

「……かもな」

「ユーリ、魔物を止めに行きましょ！」

ユーリたちは街の入り口の道に向かつた。

\*

ユーリたちの前には魔物の大群がいた。

イノシンに似た魔物、サイノツサスに、カニに似た魔物、クラブマン、カブトムシに似た昆虫型の魔物、ビートル、トカゲのような魔物、バシリスクがたくさんいる。

「すげーな、こんだけの魔物、どうから湧いてくんだ」

「ちょっとどじいじやないだろ！」

「魔物の様子も普段と違いませんか？」

「来るよー！」

リタの言葉に、全員武器を構える。

「蒼破追連！」

「紅蓮連牙斬！」

「穢れなき汝の清浄を彼の者に『えん、スプラッシュユー！』

「落破ペインショットー！」

「煌めいて、魂搖の力、フォトンー！」

「バウツー！」

ユーリは蒼破刃を2連続で繰り出し、シンクは紅蓮斬を3回連続で放ち、リタは水瓶を出現させ、広範囲に水流を放ち、カロルはカバンを振り回し、エステルは光の爆発を発生させ、ラピードは宙返りしながら尻尾で斬り上げて、魔物を撃退していく。しかし、魔物の勢いは収まることを知らない。

「あ～、ウザイ！ 次から次へと……もおつ！」

リタは愚痴を言いながら、魔物たちを蹴散らしていく。

「きやあツー！」

ユーリたちと違う方向か悲鳴が聞こえた。

そこには、逃げ遅れた女性がビートルに襲われていた。

「ちつー！」

ユーリは舌打ちをしながら、蒼破刃でビートルを倒した。

「あ、ありがとうございます……」

「礼はいいー走れ！」

ユーリの言葉に、女性は走った。

そして違う方向でも人が魔物に襲われようとしていた。

「くそつ、間に合わねえ！」

ユーリたちのいるところからでは間に合わない。

その時、一つの人影が魔物たちを斬り伏せる。

その人物は見た目は老人だが、老人とは思えない動きで魔物を蹴散らす。

「さあ、クソ野郎ども、いくらでも来い。この老いぼれが胸を貸してやる！」

そう言つて老人は魔物に向かっていく。

「とんでもねえじじいだな。何者だ？」

「あれがドン。ドン・ホワイトホースだ」

「あのじじいねえ」

シンクの言葉を聞いて、ユーリはドンを物珍しそうな目で見た。

「ドンだ！ドンがきたぞ！」

「みんな、ドンに続けえ！」

「一気に蹴散らせ！俺たちの街を守るんだ！」

「我ら『暁の雲』<sup>オウラウビル</sup>の力を見せろ！！」

ドンを先頭にギルドの人間が魔物に向かっていく。その後ろからフレン率いる騎士団の姿があつた。

「フレン！」

意外な再会にエステルは驚いた。

「魔物の討伐に協力させていただく！」

「騎士の坊主は、そこで止まれ！ 騎士に助けられたとあつては、俺らの面子がたたねえんだ。すつこんでる！」

「今は、それどこのでは！」

「どいつもこいつも、てめえの意志で帝国抜け出してギルドやつてんだ！ いまさら、やべえからって帝国の力借りるよつた恥知らずこの街にはいやしねえよお！」

「しかし…」

「そいつがてめえで決めたルールだ。てめえで守らねえで誰が守る

「ドン」とフレンの言い合ひはまだ続いている。

「何があつても筋は曲げねえってか……なるほど、こいつが本物のギルドか」

「ドンを見てヨーリはそう呟く。

「ちよつとやーのー案内しなさい」

リタがカロルに話しかけた。

「セーのつて、ボク?え、ビ、ビーリーへ。」

「結界魔導器を直しに行くんです。こままでは魔物の群れに飲み込まれます!」

エステルとカロルは走りだし、リタはユーリヒシンクに歩み寄る。

「ちよつとあんたらもー。」

「それしかなせねつだな」

「行くぞ」

ユーリヒたちは結界魔導器のあるところに向かった。

\*

リタは階段を上り結界魔導器の前に立つ。

「これなら、なんとかなるかも」

「リタ、後ろだ!」

シンクの言葉にリタは後ろを見た。そこには前にユーリたちが会つた赤目の男たちがいた。

「結界は直させんぞ」

「つたく、ほんと次から次に！もつつーー！」

リタは愚痴を言いながら戦闘態勢に入る。

赤目の人一人がリタに斬り掛かるうとする。

そこにシンクが横に入り、閻魔刀の鞘でその攻撃を防ぐ。

「リタはやらせない！氷烈斬！」

シンクは氷を纏つた閻魔刀で赤目を斬り付ける。

赤目は一撃で倒れた。

「あ、ありがとう、シンク」

「礼ならいいわ」

そこにもう一人の赤目が襲い掛かる。

「田覚めよ、無慈悲で名も無き茨の女王、アイヴィーラッショ！」

リタが詠唱すると、赤目の足下から茨が現れ、赤目を襲つた。

「さすが、リタ」

シンクがリタをほめた。すると、リタは顔を赤くした。

「と、当然よーってこんなことしてる場合じゃない」

そういつてリタは結界魔導器の前で術式を展開し、操作する。

「結界魔導器の不調はこいつらの仕業かよ

「だろ? うな

「でも、どうして?」

ユーリたちが倒れた赤目たちを見て言つていると、フレンと騎士二人がやってきた。

「いじつちも大変みたいだな

「なんだ、ドンの説得はもう諦めたのか?」

「今は、やれることをやるだけだ。それで、結界魔導器の修復は?」

「それはリタ次第だ。ま、大丈夫だがな

シンクはリタを見ながら言つた。

「君は随分と彼女を信頼してんんだね」

「まあな。俺にとつて、大切な人だからな」

シンクは最後の言葉は小声で言つた。

「……魔核は残つてゐる。術式いじつて、止めただけね。ん? これ、增幅器つー? それにまた、この術式……。Hフリードの丘のと同じ……」

リタは操作しながら呟く。

「魔物の襲撃と結界の消失。同時だつたのは偶然じゃないよな?」

「……おれりくは

「おまえが来たつて」とは、これも帝国の「だ」と関連ありつてわけか

「わからない、だから確かめに来た」

ユーリとフレンの話を聞きながら、シンクは考えた。

(おそらく裏にはバルボスやラゴウが絡んでいるのか……)

シンクはさう思いながらリタのこゝかへを見た。

「……それが、あれで、これが、」「ハーハー……」

リタが術式を操作し終わると、街の結界魔導器が再び稼働した。

「さすが、リタ」

「よし、外の魔物を一掃する! 外ならギルドも文句を言つまい!」

フレンはやつて騎士と共に走つていった。

「魔物の方はフレンに任せて、オレたちはユニーク本部にバルボスの話を聞きにいくぞ」

ユーリの言葉で、一行はユニーク本部に向かつた。

\*

ユーリたちはユニーク本部の入り口についた。

「ん? なんだおまえたち」

ユーリたちは入り口にいた男に話し掛けられた。

「ドンに会つて話したいことがあるんだ。取り次いでくれ」

「五大ギルドに関係あることなんだ」

「見ない顔だな。どこのギルドだ?」

「ドンって、ドンでもないけど」

「……あいにくドンは魔物の群れを追つて街を出でつたぞ」

「魔物の群れを?」

カロルが首を傾げながら尋ねる。

「ああ、魔物の巣を一網打尽にするんだと」

「なるほど……教えてくれてサンキューな」

「ああ」

ユーリたちはユニオン本部の入り口から離れた。

「……ドンの手伝いをしたら、ドンに認めてもらえて……」

カロルは小さく呟いた。

「しょうがねえな。街で情報を探るか」

「……え? ドンの手伝いに行かないの?」

「魔物の巣の場所、知ってるのか?」

「あ、そつか……」

ユーリの言葉に、カロルは口ごもった。

「手詰まりみたいだし、あたしたち、ケーブ・モックの調査に行つてくる」

「そんな勝手に」

「リタは面倒な仕事はさつさと終わらせたい性格なんだよ」

「けど、それなら、エステルも一緒にこと？」

「そうですね。アレクセイにはそう言いましたし……」

ユーリは顎に手を当てて考え込む。

「だいじょうぶですよ。シンクもいますし、三人でもやれます」

「そうもいかねえだろ。ケガでもされたら、オレがフレンに殺され  
る」

「いいの、ユーリ？」

「ま、有力な手掛かりもねえしな」

「なら、決まりだな。ケーブ・モック大森林はここから西だ。行こ  
う」

シンクの言葉に、ユーリたちは歩きだす。  
その様子を屋根から見ていた人影がいた。

「ケーブ・モック大森林とは、偶然つてあるもんだねえ」

\*

（ケーブ・モック大森林）

「世の中にはこんな大きな木があるんですね……」

エスティルは周りで生えている巨木の根に驚いていた。

「カジ、ここまで成長すると、逆に不健康な感じがすんな」

「カロルが言っていたとおりね。ヘリオードで魔導器が暴走したときの感じになんとなく似てる」

「気をつける……誰かいるぞ」

セツコ ヒシングクは闇魔刀を抜く準備をしている。

「よつ、偶然！」

木の影から出てきたのは、なんとレイヴンだった。

「こんなところで何してんだよ？」

「自然観察と森林浴って感じだな」

「うわん臭い」

カロルがバッサリと言った。

「あれ？歓迎されてない？」

「本氣で歓迎されたと思つてたのか?」

「そんな」と言つた。俺、役に立つぜ」

レイヴンが残念そうな顔で言つた。

「役に立つてまさか、一緒に来たい、とか?」

「もうよ、一人じゃ寂しいし。何?ダメ?」

「背後に気をつけてね。変なことしたら殺すから」

「俺も何かしたら即刻斬り殺す」

リタとシンクはついレイヴンに向つて歩きだす。

「なあ、俺つてば、そんなにさん臭い?」

レイヴンはゴーリに尋ねる。

「ああ、つせん臭だが、全身からにじみ出てるな」

「どれどれ……」

レイヴンは自分の二の腕を嗅ぎだした。

「余計な真似したら、オレ何するかわからないんでそれとしない方が  
よろしくな」

そう言ってゴーリたちはレイヴンも加えて森を進む。

\*

太い木の根を歩いて少しするとコーリたちは後ろに来ているレイヴンに振り返る。

「まあ、俺の」とほ흡気にせず、よろしくやつてくださーよ」

「どうします?」

「だったらおっさん、俺たちを納得させる何かを見せてくれ

「そりゃ、オレも賛成だ。なんか芸とかないのか?」

シンクとコーリはレイヴンに言った。

「俺を大道芸人かなんかと、間違えてない?」

レイヴンは少し考え、向こうの木の根に歩きカロルに向ける。

「ちょいちょい、こっち来て」

「え……ボ、ボク……?」

カロルはレイヴンについて行った。  
コーリたちは頭に「?」を作った。  
するとレイヴンだけ戻ってきた。

「ん？ カロルはどうしたんだ、おっさん」

「う、う、うわああつーちょっと、一人にしないでー！」

カロルはビートルに襲われながらこっちに来た。  
カロルは武器を構えている。

「ほら、ガンバレ、少年！」

「くっ、くそおおつー！」

カロルはやけくそになろうとした。するとレイヴンが弓を構え、ビートルに放つた。

「も、もう嫌ー！」

カロルは叫びながら逃げてきた。

「もうそろそろかね……」

レイヴンが呟くと、ビートルは何の前触れもなく爆発した。

「うわー！」

「中で爆発した！？」

「どうこう」とだ……？」

「な、何したんです！？」

「防御が崩れた瞬間、打ち込んで中から……ボンてねー。」

みんなの疑問にレイヴンは答えた。

「まつたく……悪趣味な芸だ」

「いいんじゃないでしょつか?」

「……いいのか?」

「ええ」

「ま、いつか……」

「あ、合格?」

「アマジで……?」

カロルは驚いた表情で言った。

「いこんじやないか? そばこのことじたば、トキナ真似したとき」と、色々やつやすこいし

「おこおこ、色々つて……」

「……それもそつよね」

シンクの言葉にリタは頷いた。

「なんか背筋が寒くなってきたんだけど……」

「えと、それなら、よろしくお願ひします」

エスティルはそう言ってお辞儀をした。

「はい、よろしく」

レイヴンはエスティルに言い返す。

\*

「…………何か…………声が聞こえなかつた？」

一行が森を大分進んでいるとカロルが言った。

「うつむをどこへ連れてってくれるのかのー」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「！」の声、どこかで……」

振り返ると、パティがビートルに捕まつていて、飛んでいた。

「パ、パティ…………？」

「なに？お酔染みやん？」

レイヴンが尋ねる。

「助けなきゃ……。」

「あーほーほー、俺様にお任せよつと……」

そつまつてレイヴンは変形弓を構え、バートルが通りすがりで矢を放つた。

「当たりました！」

矢は見事にバートルに命中した。

ユーリは走り、パーティを受けとめた。

「ナイスキャッチなのじや」

ユーリはパーティを下ろし、みんなのところに戻った。

\*

「で？せっせりアイフコードのお手て奴を探してゐのがへ？」

「アイフコード……？」

「のじや

パーティは頷く。

「嘘くわ。本当にこんなところに宝が？」

「誰に聞いたんだ？」

「測量ギルド、『天地の鑑』が色々と教えてくれるのじや。連中は世界を回つとるからの」

パーティはシンクとロタの間に答えた。

「それで『弓』の屋敷に入ったのか。でも、結局何も見つからなかつたんだわ」

「100パーセント信用できる話の方が逆にうる臭いのじや」

「ま、確かにそうかも」

「「あなたは100パーセントうる臭いだろ（わよね）」」

シンクとロタは声を合わせてレイヴンに向つた。

「ふたり共、ひどいお言葉……」

「どうあえず、つづけは宝探しを続行するのじや」

「一人でウロウロしたら、わざわざみたいにまた魔物に襲われて危険なこと……」

エスティルは心配そうにパーティに言った。

「あれは襲われてたんではないのじゃ。戯れてたのじゃ」

パーティは胸を張つて言った。

「たぶん、魔物の方はそんなこと思つてないと思つけどな」

カロルが呆れ口調で言つと、パーティの後ろからカマキリに似た緑色の魔物、グラスホッパーが現れた。

「パーティ、後ろ……」

パーティは海賊銃を抜き、グラスホッパーに数発放つた。  
グラスホッパーは力尽きて倒れた。

「つまり、ひとりでも大丈夫つてことか」

「一緒に行くかの？」

パーティはユーリに尋ねる。

「せっかくだけど、お宝探しはまたの機会にじとくわ

「それは残念至極なのじゃ。でもうちはそれでもいくのじゃ。サラバなのじゃ」

そう言ってパーティは走つていった。

「行つちやつた……」

「本当に大丈夫なんでしょうか……」

カロルとエスティルは不安そうに言つた。

「本人が大丈夫つて言つてるんだから、大丈夫なんでしょう」

「ま、オレたちは先へ進もうぜ」

ユーリの言葉で一行は森の奥へと進んでいく。

\*

ユーリたちは森の奥へとついた。その先にはオレンジ色の光が浮かんでいた。

「あれは……ヘリオードの街で見たのと同じ……エアルは弱いけど間違いない。でも……」

リタが言おうとした瞬間、後ろからドンッ！と巨大な影が降ってきた。

「みんな、気をつけろ！」

シンクの言葉に、全員後ろを振り返った。

そこにはサソリにも似た巨大な魔物、ギガラルヴァがいた。

「あ、あの魔物、ダングレストを襲つたのと様子が同じです！」

「来やがつたぞ！」

ユーリの言葉と共に、全員武器を構える。

「気をつけろ！ ギガラルヴァはちょっと手強いぞ！」

「シンクあの魔物知つてるの！？」

「ああ、まあな」

「だつたら来る前に教えなさいよ！」

リタは魔術の詠唱をしながらシンクに怒鳴つた。

「すまない……」

「話はあとだ！」

ユーリは二バンボシを抜き、ギガラルヴァを斬り付ける。しかしギガラルヴァはあまり効いているようには見えない。

「紅蓮斬！」

シンクはギガラルヴァに向かつて炎の斬撃を放つ。ギガラルヴァは効いたのか、少し仰け反つた。

「あれが弱点みたいね。だつたら……灼熱の軌跡を以つて野卑なる

蛮行を滅せよ、スパイラルフレア！」

リタはギガラルヴァに回転させた炎を放つた。  
その炎をダイレクトに受けたためかギガラルヴァはバランスを崩した。

「今だ、烈碎衝破！」

「ガウツ！」

「煌めいて、魂搖の力、フォトン！」

「爆碎ロック！」

「紅蓮連牙斬！」

「天の閃き！」

ユーリは地面に二バンボシを刺し衝撃波を放ち、ラピードは炎の鬪氣『紅蓮犬』を、エステルは光の爆発を発生させ、カロルはハンマーを地面に叩きつけ、シンクは紅蓮斬を連續して放ち、レイヴンは変形弓を上空に放ち、矢はギガラルヴァに降り落ちた。

全員の攻撃をまともに受け、ギガラルヴァは力尽きたように倒れた。

「木も魔物も、このエアルのせいだわ！」

リタはそう言つてエアルの束に近づこうとするが、ユーリたちの周りに、ギガラルヴァが4匹、四方八方に現れ、ユーリたちを囮んだ。

「さすがにこの数は……」

「ああ、『ヒーローで死んじまつのか。やよなひ、世界中の俺様のファン……』

「『世界一の軽薄男、ヒーローに眠る』ついで、墓に彫つとこてやるからなー。」

「そんなこと言わずに、『一緒に生き残りつけ』とか言えないの!?」

「お前ら真面目にやれ」「

ユーリとレイヴンのコントにシンクが怒鳴りつけた時、スタッフとユーリたちの前に白髪の男が降り立つた。

男はその手に持つ赤く輝く剣を掲げる。男の周りには円を描くように術式が現れ、強い光を放つた。

次の瞬間、ギガラルヴァたちの姿はなかつた。後ろにあるエアルの束も普通の緑色になつていた。

「誰……?」

「『ヒーロー』」「

「え……?」

カロルは首を傾げ、シンクとレイヴンは男の名を呟いた。レイヴンはみんなに聞こえない音量だったが、シンクの呟きは隣にいたリタに聞こえた。

\*

デューコークは一度、エアルの束を一警すると、すぐに立ち去るうとした。

「ちよつと待つて……」

そこにリタがデューコークに叫び、デューコークは歩みを止めた。

「その剣はなに……？見せて……！」

リタの言葉にデューコークは振り返り、リタはデューコークが持つ赤く輝く剣を見る。

「今の一體なにしたの？エアルを斬つたっていつか……」「ううん、そんなの無理だけど」

「知つてどうする？」

「そりゃもちろん……いや……それがあれば、魔導器の暴走を止められるかと思つて。前にも魔導器の暴走を見たの。エアルが暴れだしてじりじりすることもできなくて……」

「それはひずみ。当然の現象だ」

「ひ、ず……み……？」

「デュークの言葉にリタは首を傾げた。

そこにエステルがデュークの前に出て、頭を下げた。

「あの、危なごとに」るをありがとひびきにました

「エアルクレーには近づくな

「エアルクレーってなに? ここのこと? 」

リタはそう言って、後ろにあるエアルの束に目を向ける。

「世界に点在するエアルの源泉、それがエアルクレー

「エアルの、源泉……」

「デューク、わしあはありがとつ

シンクはそう言つてデュークに近づいた。

「シンクか……」

「一年ぶりだな

「ああ、そうだな」

「おまえら、知り合いか? 」

ユーリが一人に尋ねた。

「まあ、ちょっとな

「…………」

「テューラクは無言で去つて行つた。

「あんた、あいつどいつもこう関係?」

「修行の時にこの森で会つてな。その時に一度戦い方を教わつた」

「え? しゃあ、シンク、やっぱりこの森に来た」とあるんだ

「道理でさつもの魔物のことも知つていたわけか

「まあな。といひでリタ、もつ調べる」とはもつないか?」

シンクはやう言つてエアルクレーネに田を向けているリタに尋ねる。

「リラだけ調べてもダメね。他のも見てみないと」

「確かあつて、世界中にあるついたよな?」

「ええ、確かに」

「それを探しだして、もつとよく見てみないと、確かなことは何もわからんない」

「なら、ダングレストに突つてパンツ余ねつぜ」

ゴーリの言葉に、全員賛成し、森を出ることとした。

ギルドの巣窟 タングレスト／ケープ・モック大森林 魔物の襲撃、うさんくさ

次回はダングレストの話になります。  
お楽しみに！  
感想も待っています！

## ギルドの巣窟 タングレスト ユーオン誓約（前書き）

今回は結構長くなりました……

更新が遅れたのは、グレイセスFを絶賛プレイしていたからです。  
すいませんm(—)m

今回はシンクの新技はグレイセスFからの技です。  
これからもグレイセスFの技出すと思います。

## ギルドの巣窟 ダングレスト ユニオン誓約

ユーリたちはケーブ・モック大森林の入り口にさしかかっていた。その時、大きな揺れが起きた。

「うわっ、何！？また魔物の襲撃？」

カロルが揺れに驚く。

ユーリたちは物影に隠れた。すると、ビートルやグラスホッパーなど、たくさん魔物が森に戻つて行く。

「カロル、頭、上げんなよ！」

「リタ、気をつける！」

ユーリとシンクは一人に言う。

魔物たちが全員森に入つていったのを確認し、物影から出た。

「あ……の人たち……」

「ドン……！」

その先にはドン率いるギルドの人間がいた。

「……てめえらが何かしたのか？」

ユーリたちを見るなり、ドンは尋ねた。

「何かつて何だ？」

「暴れまくつた魔物が突然、おとなしくなつて逃げやがつた。何いやつた？」

「……ユーリ、あれです。エアルの暴走が止まつたから……」

エスティルが小声でユーリに囁く。

「ボクたちが、エアルの暴走を止めたから、魔物もおとなしくなつたんでんです！」

「エアルの暴走？ ほお……」

「何、おじいさん、あんた、なんか知つてんの！？」

リタが声を上げてドンに聞いた。

「いやな、ベリウスつて俺の古い友達がそんな話をしてたことがあつてな」

「……ドンが南のベリウスと友達だつて本当だつたんだ……」

「何よ、そのベリウスっていうの」

「ノードポリカで闘技場の首領ドゥーチェをしているやつだ

リタの間にシンクが前に出て言った。

「おまえ……シンクじゃねえか」

「久しぶりだな、ドン」

「え？ シンクってドンの知り合い？」

カロルがシンクとドンのやり取りに驚いていた。

「ああ、ちょっとな」

「おまえさんといつもして余るのは、一年ぶりだな」

「やつきの人といい、シンクって知り合い多いね」

カロルはシンクのことに驚きを隠せなかつた。

「で？ エアルの暴走がどうしたって？」

ドンが話を戻してカロルに尋ねた。

「本当大変だったんですね…すじくたくさん、強い魔物が次から次へと、  
でも……」

「坊主、やつこりとはな、ひつそり胸に秘めておくもんだ」

「く……？」

「誰かに認めてもらつためにやつてんじゃねえ。街や部下を守るため  
にやつてんだかんな」

「「」、「めぐなさ」……」

カロルはドンの言葉に、落り込みながら謝った。

「ちょっと、すみません。見せてくださいますか？」

「ん? 何だ?」

エスティルがドンの部下を治癒術で治した。

「おおっ……治癒術か……ありがとうございます……」

部下はエスティルに礼を言った。

「…………ん? そこそこのはレイヴンじゃねえか。何隠れてんだ!」

「うわ」「うわ」

ドンは林に隠れていたレイヴンに気付いた。レイヴンは軽く舌打ちをしてやってきた。

「うつのもんが、他人様のところ迷惑かけてんじゃあるめえな?」

「迷惑つてなによ? ここの魔物大人しくさせるのにがんばったのよ、主に俺が」

「えー? レイヴンって、『天を射る矢』<sup>アルトスク</sup>の一員なの? 」

「どうも、そういういな」

「マジかよ……」

ゴーリたちはレイヴンが天を射る矢の一員だっこいことに驚いていた。

ドンはレイヴンの腹を剣の柄で殴つた。

「いたた……じいさん、反則ー! 反則だろー!」

「黙れえ!」

「ドン・ホワイトホース」

そこにゴーリが横に入り、ドンはゴーリに目を向けた。

「何だ?」

「会つたばかりで悪いが、あんたに折り入つて話がある」

「ほお……おまえ、名前は?」

「ゴーリだ。ゴーリ・ローウェル」

「ドン、お話中、失礼します」

ゴーリがドンに話をしようとした時、ドンの部下がドンに近づき、耳打ちをした。

「ん、わかつた。野郎ども、引き上げだ。すまねえな。急用でダングレストに戻らにゃならねえ。ゴニオンを訪ねてくれりやあ、優先して話を聞くから、勘弁してくれ」

「ドンはゴーリを見て言った。

「いや、約束してくれるなら、それでかまわねえよ」

「ふん、俺相手に物怖じなしか。てめえら、いいギルドになれるぜ」

そう言つてドンは部下を引き連れ、ダングレストに戻つていった。

「で、どうよ？俺様の偉大さが伝わったかね？」

「偉大なのは、レイヴンじゃないんだじゃない？」

「それはそうだな」

「なによ、すぐケチつけるんだから」

カロルの言葉に、シンクも同意して言った。

「さ、オレたちもダングレストに戻つて、ドンに会つたらバルボス探しの続きだ」

そう言つてゴーリは歩きだした。

「リタ、ゴーリの用事が終わつたら、わたしたちもアレクセイへ報告へ……」

「おー、リタ？」

エステルがリタに話すが、リタは考え方をしていて、シンクも声をかけた。

「……あ、何？」

「ユーリの用事が済んだら、俺たちもアレクセイに報告をしようつて……おまえ、どうした？」

「な、なんでもないーほら、あたしらも戻るわよー。」

リタはやつぱり走っていく。

「どうしたんでしょう？」

「たぶん、ユアルクレーねのことが気になつてるんだがつ」

「ユアルクレーね……ですか？」

「ああ」

エステルは先ほど「ユーリのこと」を思い出しながら聞いた。

「ユーステル、シンクー早く行こうよー置置いておかなよー。」

「今行く！行こう、エステル」

「はい」

カロルの声で、エステルとシンクはユーリたちのところに向かい、ユーリたちもダングレストに戻った。

\*

ユーリたちはダンブルレストに戻ると、真っ先にユニオンへ向かつた。途中、レイヴンと別れ、レイヴンは一足先にユニオンへ向かつたのだ。

ユニオンのドンの私室に入ると、そこにはドンにレイヴン、他数人に、フレンがいた。

「よお、てめえら。帰つて来たか」

「……ユーリ」

フレンが振り返りながら、驚きの表情で呟いた。

「なんだ、てめえら、知り合いか？」

「はい、古い友人で……」

「まつ」

「ドンもユーリと面識があつたのですね」

「魔物の襲撃騒ぎの件でな。で?用件はなんだ?」

「いや……」

口<sup>レ</sup>じもるフレンにユーリは前に出た。

「オレ<sup>レ</sup>らは紅の辯<sup>ビ</sup>傭<sup>ヨウ</sup>兵団のバルボスつてやつの話を聞きにきたんだ

よ。魔核ドロボウの一件、裏にいるのはやつみたいなんでたな

「なるほど、やはつせつちもバルボス絡みか」

「……とこいつとせ、あんたもか？」

シンクの言葉にフレンは頷き、ドンの前に出る。

「ユニオンと紅の辯傭兵团の盟約破棄のお願いに参りました。バルボス以下、かのギルドは各地で魔導器を悪用し、社会を混乱させています。」  
「助力いただけるなら、共に紅の辯傭兵团の打倒を果たしたいと思つております」

「……なるほど、バルボスか。確かに最近のやつの行動は少しづかり田に余るな。ギルドとして、けじめはつけにやあならねえ」

「あなたの抑止力のおかげで、昨今、帝国とギルドの武力闘争はおさまっています。ですが、バルボスを野放しにすれば、両者の関係に再び亀裂が生じるかもしません」

「そいつは面白くねえな」

「バルボスは、今止めるべきです」

「協力つてからには、俺らと帝国の立場は対等だよな？」

「は」

ドンの言葉にフレンは頷く。

「ふんつ、やつこつ」とない帝国との共同戦線も悪いもんじやあねえ」

「では……」

「ああ、リリーは手を結んで、ことを運んだ方が得策だ。おいつ、ベリウスにも連絡しておけ。いざとなつたらノードポリカにも協力してもらつてな」

ドンは近くの男に言つて、男は頷き、早足で部屋を出た。

「なんか大事になつてきたね……」

カロルが小さく呟いた。

フレンはドンに書状らしきものを差し出す。

「ほお、次期皇帝候補の密書か」

ドンは中身を開け、書状を読むと、

「読んで聞かせてやれ」

それをレイヴンに渡す。

そして、レイヴンが書状を読み上げる。

「『ドン・ホワイトホースの首を差し出せば、バルボスの件に関し、

ユニオンの責任は不問とする』」

部屋にいたものが驚きの表情になる。

「何ですか？……？」

「うわはっまはーこれは笑える話だ」

ドンが笑い、レイヴンがフレンに書状を見せる。

「……なんだ、これは……」

フレンの書状を持つ手が震えていた。

「どうやら、騎士殿と殿下のお考えは天と地ほじ違つよつだな

「これは何かの間違いです！ヨーテル殿下がそのよつなことを

「おー、客人を特別室に案内しハー。」「ドン・ホワイトホース、  
聞いてくださいー！」これは何者かの體です！」

ドンは部下に命令し、部下はフレンを特別室、牢屋に連れていった。

「フレン……どうして？

「待て！へたに動けば、逆にあのフレンが危険にさらわれる

「…………」

フレンを追おうとするエステルをシンクが止めた。  
ドンは椅子から立ち上がり、声を上げる。

「帝国との全面戦争だ！総力をあげて帝都に攻めのぼる！密人は見せしめに奴らの目の前でハツ裂きだ！一度となめた口聞かせるな！」

そう言つてドンはレイヴンたちを引き連れ部屋を出ていった。

「た、たいへんなことになっちゃったよ」

「おかげであたしらの用件、忘れられちゃったわよ」

「ダンも話さるじやねえな」

「わたし、帝都に戻つて、本当のことを探かめできます」

「だから、落ち着け。少し様子を見よつ

「わ……わかりました」

ユーリたちはまず、ユーロン本部を出た。

\*

ユーロン本部を離れてすぐ、ユーリは突然自分の身の回りを探りはじめた。

「どうしたの、ユーリ？」

「財布、落としたみたいだ」

「「」なんときに何やつてんのー。」

「ドジのところで落としたかな?ちょっと探してくる。そのあたりで待っててくれ」

「う、うん。早く探しにきてよー。」

ユーリは一人ユニオン本部へ走つていった。

\*

「まつたぐ、何なのよ、ギルドって本当バカばっか」

ユーリと別れて、リタが悪態をついた。

周りを見ると、ギルドの人間は武装して、戦闘の準備をしていった。

「それがギルドだからな」

「だからって帝国と戦争なんて……」

リタが言おうとした時、ラピードが何かを見つける。  
その先には、紅の絆傭兵团の人間が数人集まっていた。

「あいつら、紅の絆傭兵团の……」

「なんであんなところに……」

「今は後をつけよ。カロルとエステルはユーリが来るのを待つてくれ」

「うん！」

「わかりました」

シンクはエステルとカロルに言つと、リタとラピードを連れ、後をつけた。

\*

シンクたちは物陰に隠れて、紅の絆傭兵団の人間たちを見ている。  
連中は酒場らしき場所の前にいた。

「リタ……！」

そこにカロルがやってきて、声を出さつとしたとき、リタが止める。

「しつ……ガキんちょ、あんた声でかい……」

そこにユーリとエステルもやってきた。

「……あつや、ちゅうと無理矢理押し入るつてわけにやいかなそつだな」

「でも、あの中にバルボスがいるとしたら……」

「指をくわえて見ているわけにもいかない」

「じつじよつか」

「こー」と教えてあげよつ

背後から声がして振り返ると、やうにせられイヴンがいた。

「……また、あんたか」

「ここのか? デンのところに行かなくて

「よかないけど、青年たちが下手打たないよつやんとみとつかってダンガ。ゆっくり酒場にでも行って俺様のお話聞かない?」

「わたしたちにはそんなゆづりつては……」

エスティルが断るつとするが、

「いいから、いいから、騙されたと思つて」

「そんなこと言われて、騙される奴がいると思つて……」

「騙されるのは、一度も二度も同じだ。けど、おっしゃ、『仮の顔も三度まで』ってことね? 知ってるよな?」

シンクは言いながらレイヴンを睨んだ。

「そんな怖い顔しなくとも、わかつてますつて。ほら、青年たち、笑つて笑つて。じつちよ」

ユーリたちはレイヴンについていった。

\*

ユーリたちはレイヴンを先頭に、紅の絆傭兵团のいた酒場とは反対側の酒場『天を射る重星』にきた。

「ちょいと通してもらひつよ」

レイヴンは隣の部屋の前にいる男に言つて通る。  
ユーリたちもそれについていく。

そこは豪勢な部屋で壁には天を射る矢の旗が貼られている。

「なんだ、じいは」

「ドンが偉い客迎えて、お酒飲みながら秘密の話すのところよ」

「じいじで大人しく飲んでいろと?..」

「おたくのお友達が本物の書状持つて戻つてくれば、とりあえず事

は丸く収まるのよね

レイヴンは顎に手をあてながら言った。

「悪いけど、フレンヒトリにいい格好させへわけにやいかないんでね」

「わたしたち、この騒ぎの犯人を突き止めなければならんんですけどもバルボスが……」

「まあまあ、急いで事仕損じる」

レイヴンは旗のある場所に歩く。そこには扉らしき場所があつた。

「これは……？」

「この街の地下には、複雑に地下水道が張り巡らされている。その昔、街が帝国に占領された時、ギルドはこの地下水道に潜伏して、反撃の機会をうかがつたんだと」

レイヴンが扉を見ながら説明する。

「まさか……ここがその地下水道につながってる……とか言わないよね

カロルがおそるおそる尋ねる。

「そのままかよ。で、ここからひとつ連中の足元に忍び込めるつて寸法なわけよ」

「ソレから忍び込んで奴らを捕まえる。回り道だが、確実だな

」ナニといふと、信じてよかつたでしょ?「

「それは行ってみないとわからなーいな

」さあ、おおきな用事にならひなーい?

「当然、おおきな用事はだよなー。」

ゴーリの言葉に、レイヴンは残念な表情をする。

「あつひーへおおさん、このまま、バックれる気満々だったのに

「おおきな用事はだよなー。」と、行へる

ゴーリたちレイヴンも加えて、地下水道の扉を開いた。

\*

「わあ……真つ暗です……

辺りは真つ暗だった。

「迷子になつて永遠にでられねえつてのは勘弁だぜ」

「ほら、天才魔導士のお嬢ちゃんよ、」一いつ、火の魔術でバーンと先を照らしてくれんかね」

「あたしをランプ代わりにしようつひての？いい根性してるわね」

「落ち着け、リタ」

レイヴンに喧嘩腰のリタをシンクが宥める。

「リタ、なんとかなりませんか？」

「うーん……無理。火の魔術は攻撃用なの。照明みたいに持続させ  
ルクスフラスティアるには、常時エネルギーを供給されないと。光照魔導器みたいにね」

「ありや……そつなの？」

「おっせんの当たって、外れたな」

「ワンー」

「ん? どうした、ラピード」

ラピードが何かを呑えてきた。それはマイクに似た形をしたものだつた。

「これ……もしかして魔導器？ だいぶと傷んでるけど、なんとか使えそうね」

リタがそれを受け取り、魔導器を起動させた。すると、魔導器から光が照らされた。

「だ、大丈夫なの……爆発したりしない？」

カロルが少し驚きながら聞く。

「するわけないでしょ。これ光照射魔導器の一種よ。あの充填器にエネルギーを補充して光る仕組みね」

リタはそう言いながら、目の前にある充填器らしきものを指差す。そこからは緑色のエネルギーが出ていた。

「さすがです、リタ」

「でもかなりガタきてるから、多分長持ちしない」と思つわ

「じゃあ、こいつが光つてゐるうちに先を行ひやせ」

ユーリの言葉でユーリたちは光照射魔導器を手に先に進む。

\*

「ま、魔物……！」

カロルが下を見た。

そこには白いウォント、アルビノウォントや白いオタオタ、ホワホワなどがいた。

「……襲つて……来ませんね」

「恐らく光に弱いだろ？」

「無理にことを構える必要はねえ」

ユーリがそう言つたとき、光照魔導器から光が消えた。辺りは暗くなつた。

「消える前にまたエアルを充填しないと」

リタがやつ言つたとき、下からアルビノウォントが四匹出でてきた。

「なつ……！」

「ちい……！」

アルビノウォントは自分が持つ武器をユーリたちに振り下ろす。

全員は分散して戦う。

シンクはエステルと、ユーリはラピードと、リタはカロルとレイヴンで戦う。

「気をつける、エステル！」

「はい！」

シンクの言葉に、エステルは頷きながら剣を構える。

シンクはアルビノウォントの攻撃をかわし、闇魔刀を抜刀する。

「スタートローク！」

エステルは剣を振り上げ、斬撃を地面に走らせ放つ。アルビノウォントに当たり、アルビノウォントはエステルに標的を向けた。

「いっちもいるぞー紫電滅天翔！」

シンクは雷を纏った闇魔刀をフェンシングのように何度も突き刺し、

「碎け散れ！」

そのまま振り上げた。

アルビノウォントはそのまま消滅した。他のみんなも、倒し終わつた。

「……びっくりした……油断させておいて、攻撃してくるなんて……」

「魔物にそんな知恵、あるわけないでしょ

リタはカロルの言葉を否定する。

「光に反応して襲つてきたんだろうな」

「そんのがいるのか？」

「洞窟や海底といった場所に棲息する生物の中には光に対する耐性がなくなり、強い刺激として避けるものがいる、です」

エステルが説明する。

「そつか……だから、明るい時は襲つてこないんだね」

エステルの説明に、カロルは納得した。

「あ、やつをと同じのがあるよー。」

カロルが指差す場所に先ほどと同じ充填器があつた。ユーリは光照魔導器に工アルを充填する。

「おほ、なるほどねえ」

「よつは消えないように注意して充填しながら進めつてことだな」

「ワンー。」

\*

ユーリたちは光照魔導器に工アルを充填しながら、進んでいくとあるものを見つけた。  
そこには壁に文字が刻んであった。

「なんだ、こりや？」

ユーリが首を傾げていると、エステルが壁の字を読み上げた。

「……かつて我らの父祖は民を護る務めを忘れし國を捨て、自ら眞の自由の護り手となつた。これ即ちギルドの起<sup>はじ</sup>りである。しかし今や压制者の鉄の鎖は再び我らの首に届くに至つた。我らが父祖の誓いを忘れ、利を巡り互いの争いに明け暮れたからである。ゆえに我らは今一度ギルドの本義に立ち戻り持てる力をひとつにせん。我らの劍は自由のため。我らの盾は友のため。我らの命は皆のため。ここに古き誓いを新たにする」

「ねえ……！ れつて『コニオン誓約』じゃない？」

「何よ、それ？」

リタがカロルに尋ねる。

「ドン<sup>ドン</sup>がコニオンを結成した時に作られた、コニオンの標語みたいなもんだよ」

「自分たちの！」とは帝国に頼らず自分たちで守る。そのためにはしつかり結束し、お互いのためなら命もかけよつ、みたいなことね」

レイヴンが言葉を紡いだ。

「でも、なんぞいとこに誓約がかかれてるの？」

「コニオンってのは帝国がこの街を占領した時に抵抗したギルド勢力が元になつてんのよ。それまでギルドってのは、てんでバラバラ好き勝手やってて、問題が生じた時だけ団結してた。で、事が済めばまたバラバラ。帝国に占領されて、よつやくそれじゃまずいつて悟つた訳ね」

「そのギルド勢力を率いたのが、ドンなのか？」

「そそ。 そん時、ここの地下水道も大いに役に立つたはずよ」

「じゃあ、その時ここの地下道も大いに役に立つたはずよ」

「そういうことみたいね。確かに誓約書の実物がどこにあるって話だつたけど、こんな壁の落書きとはね」

レイヴンは誓約書を見ながら言つた。

「壁に書かれた誓約書なんて、なんか素敵ですね」

エスティルはそう言つと、ある文字を見つけた。

「…………アイフリードって書いてあります」

「ああ、あの大悪党つて噂の海賊王か」

ゴーリーは思に出しながら言つた。

「ドンが言つには一応、盟友だったそよ。でも、頭の回る食えない人物で、あのドンですから相手すんのに苦労したつてさ」

「それでも盟友とか言つあたり大した器のじいさんだな、ドンつてのは」

「……我らの命は皆のため……か……」

カロルは小さく呟いた。

「面白いもんが見れたが、今はバルボスだ、そろそろ行こうぜ」

ユーリたちは誓約書を後にし、先を進む。

\*

出口ひしき場所に出ると、そこは酒場だった。

「ユリは……」

「バルボスがアジトに使つてゐる街の東の酒場、つまり……」

「俺たちが忍び込もうとした場所だな」

レイヴンが言おうとした言葉をシンクが言つた。

「じゃあ、このどいかにバルボスが……？」

「上があるみたいだな……上がつてみるか」

ユーリたちは一階へ行き、階段を上った。

\*

ダングレストの外では、ギルドと騎士団が睨み合っていた。その様子をバルボスが椅子にふんぞり返りながら見ていた。後ろにはラゴウがいた。

「バルボス！ これはどいつもことです！」

「何を言つてゐるのか、ワシにはわづぱりだな」

ラゴウとバルボスは言い合つていた。

「例の塔と魔導器の件です！ 私は報告を受けさせていませんよ！」

「なぜ、そんなことを報告しなきや ならない？」

バルボスの言葉に、ラゴウは険しい表情をする。

「な、なんですかー!? 雇い主に黙つてあんな要塞まがいな塔を……  
それに『海凶の爪』<sup>コガヤイアサンのヅメ</sup>まで勝手に使つて…」

「ワシは飼い犬になつたつもりはない。ただおまえの要望どおり、魔核を集めただ。そのおかげであの天候を操れる魔導器を作れたんだろう」

バルボスは振り返りながらラゴウに言った。

「誰が余つた魔核を持つていつていいと言いましたー？」

「お互い不可侵が協力の条件だったはずだがな」

「な、なにを……！」

「ワシが貴様のやることに口出しをしたか？」

「……バルボス、貴様！」

「執政官様がお帰りだ」

バルボスは部下に命令した。

「覚えておきなさい！貴様のよつた腹黒い男はいつか痛い目を見ますよ！」

「貴様がな」

そこにユーリたちがやってきた。

「あ、あんたら！」

「悪党が揃つて特等席を独占か？」「身分だな」

「その、とつておきの舞台を邪魔するバカはどうのどいつだ？」

そう言いながら、バルボスはユーリたちを睨む。

「ほひ、船で会った小僧どもと蒼き狼か」

「「」の一連の騒動は、あなた方の仕業だつたんですね

エスティルは指を指しながら言つた。

「それがどうした。所詮貴様らにワシを捕える」とはできません

「はあ、どうこう理屈よ」

「悪人つてのは負けることを考えてねえつてことかよ」

「なら、ユーリもやつぱり悪人だ」

カロルは笑みを浮かべながら言つた。

「おう。極悪人だ」

「なら、俺たちもだな」

「やれやれ、造反確定か。面倒な」としてくれぢやつて

ユーリとシンクが笑みを浮かべていると、レイヴンが小さく呟いた。

「ガキが吠えおつて」

バルボスが言つと、紅の辯傭兵团の人間が武器を構える。ユーリたちも武器を構える。

「手向かうか？前に言つたはずだ。次は容赦しないと

「その方が暴れがいあるつてもんだ」

「とつとと始末しろ！」

バルボスが怒鳴ったとき、外から爆発音がした。

「バカどもめ、動いたか！これで邪魔なドンも騎士団もぼろぼろに成り果てるぞ！」

「まさか、ユニークを壊して、ドンを消すために……！」

「騎士団がぼろぼろになつたら、誰が帝国を守るんです？」「ハハハ、どうして……あつ」

エスティルは氣付いたような顔をする。  
ユーリたちもその意図がわかつた。

「なるほど、騎士団の弱体化に乗じて、評議会が帝国を支配しようつてカラクリね」

「で、紅の絆傭兵団が天を射る矢を抑えてユニークに君臨する、と

「なんてこと……」

「バカの考えそうな浅知恵だな……」

「騎士団とユーリオンの共倒れか。フレンの言つてた通りだ

ユーリたちはバルボスを睨みながらそれ言つた。  
特にシンクは呆れ口調で言つた。

「ふつ、今せら知つてビツなる？ビツあがいたといひで、この戦いは止まらない！」

「それはどうかな」

「そして、おまえらの命もこので終わりだ」

バルボスがそう言つた時、外から足音が聞こえた。

「つたぐ、遅刻だぜ」

ユーリはその足音を知つていた。  
それは馬に乗つたフレンだつた。

「フレン！？」

エステルは驚きの声を上げる。

「止まれーっ！双方刃を引け！引かないか！！」

フレンはギルドと騎士団の間に入つた。

「私は騎士団のフレン・シーフォだ。ヨーデル殿下の記した書状をここに預かり参上した！」

その手には本物の書状があつた。

「帝国に伝えられた書状も逆臣の手によるものである！即刻、軍を  
退け！」

フレンは騎士団に叫ぶ。  
ドンがフレンに近づく。

「戻つてこねえかと思つたぜ」

「あいつを見捨てるつもりは、はなからありませんので」

その様子を見たバルボスは怒りの表情をラピュウに向ける。

「ラピュウ、帝国側の根回しをしつじつやがつたな！！」

「ひつ……」

「ちつ……！」

バルボスは舌打ちをすると、部下に命令した。  
部下は銃らしき魔導器をフレンに向けた。

「ユーリー！ あの人、フレンを狙つてます！」

エステルがそう語つと、カロルがラピュードがくわえていた煙管を部下に投げた。煙管は見事に命中した。

「当たつた！」

「ナイスだ、カロル」

「ガキども！ 邪魔はゆるさんぞ！」

バルボスは部下の持つていた銃の魔導器を持ち、放つた。

「うわあああ！」

「あああああ！」

ユーリたちは避け、砲弾は壁に当たり、火を噴いた。

「逃げる、出口に向かって走れ」

ユーリはそう言ってバルボスに向かう。

「ユーリ、危ない！」

「エアルを再充填するまで、少し間があるはず。その隙を狙つて…

…

リタが言つと、銃型の魔導器は再充填に入った。

「今だ！」

「遅いわあ！」

しかし、リタの思つていたより再充填は早かつた。

「うそ！？ エアルの充填が早い！」

「危ない、リタ！」

シンクがリタを庇おうとした時、頭上を何かが通り、バルボスを攻撃した。

「なつ……なんだあつ……！」

その正体は竜使いだつた。

「なんだ、ありや」

レイヴンは見るのは初めてのため、驚いていた。

「また出たわね！バカドラー！」

そつ言つてリタは魔術の詠唱に入った。

「待て、リタ！今はバルボスだ！」

「あたしの敵はバカドラー！」

「今はほつとけ！」

「ちつ…ワシの邪魔をしたこと、必ず後悔させてやるからなー！」

バルボスはそう言いながら、チヨーンソーに似た魔核のはめられた魔導器を掲げる。

すると、バルボスは宙に浮いた。

「うそつ…飛んだ！」

「おーお、大将だけトンズラか」

「しかもお決まりの捨て台詞だな

バルボスは宙に浮いたまま、ビンかへと飛んでいった。  
竜使ひはそれを追おうとする。

「あーまでーバカドーラーあんたは逃がさないんだからー。」

リタは竜使ひの前に出ようとするが、コーリが前に前に出した。  
「やつを追つなら一緒に頼むー羽のせえたのがいないんでね」

「あんた、なに黙つてんのー」こつは敵よー。」

「オレはなんとしでもやつを捕まえなきゃなんねえ」

「下町の魔核のため……だな」

「ああ、やつだ……頼むー」

コーリは竜使ひに向き直つて言つ。

竜使ひは竜をコーリに近づけた。

「助かるー。」

コーリは竜使ひに礼を言つと、竜使ひの後ろに乗つた。

「待つてーボクたちも……ー。」

「うつやじう見ても定員オーバーだー。」

コーリの言つ通り、竜にはもう乗れる場所はない。

「でも、ボクたちも……。」

「おまえらは留守番してろー。」

「そんな……。」

「ちゃんと歯磨いて、街の連中にも迷惑かかるなよー。」

「ユーリのバカあつー。」

「フレンチもちよつと行つてくもつて伝えとこでくれー。」

「うんちつてユーリは竜使ことともにバルボスを追つていった。

「ボクたちも追わないとー。」

「でも、どこに行つたのかわからなこじゃないー。」

カロルの言葉にリタは怒鳴つた。

「いや……あの方角には確か、竜巻が出ていた場所だ」

シンクは思い出したようと言つた。

「じゃあ、ユーリはそこへー?」

「恐いくな

「じゃあ、行くつー。」

「おひやんバス。ドンに報せに行かないといけないから

レイヴンは手を挙げて言った。

「ああ、行こうみんな！」

「はーーー！」

「うそー！」

「ええー！」

「ワンー！」

シンクたちはレイヴンと別れ、ゴーレムと竜使いの向かって方向に向かつた。

## ギルドの巣窟 ダングレスト ユーラン誓約（後書き）

次回は第一章ラスト！

そして、シンクの第一秘奥義を出します。

秘奥義はグレイセスFのあのキャラの技です。

お楽しみに！

感想もお願いします！

## 歯車の楼閣 ガスファロスト クリティアの槍使い、駆け付けた友（前書き）

今回、シンクの秘奥義が出ます。

書いているうちにシンクの戦闘スタイルつてグレイセスFのアスベルと大分似てるんですね。

とにかく、今回で第一章は終了です。  
楽しんで見てください。

歯車の櫻闇 ガスファロスト クリティアの槍使い、駆け付けた友

シンクたちは竜使いと共に飛んでいたユーリを追つて、ダングレストの北東にある嵐の吹き荒れていた場所に向かっていた。

「おーい…待ってくれよー！」

後ろから走つてくる人影があつた。

それを見たシンクたちは驚いた。

「レ、レイヴン！？」

「はあ……はあ……やつと追ついた……おっさん疲れたよ

レイヴンは息を荒くして、膝に手をつけた。

「なんで、来てんだよ？」「ドンに報告させ?

「それがさあ、聞いてよ。ドンが、バルボスなんぞになめられちゃ  
いけねえって言つて俺様に青年たちと一緒に行つてこいつて

「ついてくる気なの、あんた？」

リタは疑いの眼をレイヴンに向けた。

「いいんじゃないでしょうか？」

「確かに。おっさんも“一応”強いからな」

「一応つて……」

シンクたちはレイヴンと共に歩き出した。

\*

ユーリと竜使いが向かつた方向に向かうと、そこには竜巻が吹き荒れていた。代わりに巨大な歯車の塔が立っていた。

「うわあ～大きい塔～」

塔を見ながらカロルが言った。

「でも、竜巻なんて吹いていませんね」

「どうこう」とだ……

「IJの塔……もしかして」

「どうしたのよ、天才魔導少女？」

シンクの隣で考へているリタを見て、レイヴンが尋ねた。

「前にラガウの屋敷で見た魔導器、覚えてる？」

「天候を操る魔導器だろ？」

「そりゃ。それと似たのが、この塔にあるのない、シンクたちが書つていた竜巻も発生させられる。ところ」「とな……」

「ここにバルボスがいる……か？」

「うん」

シンクの言葉にリタは頷いた。

「じゃあ、コーエーはここに来てるんだねー。」

「ついでにバカドラもよー。」

リタは右拳を震わせながら言った。

「それじゃあ、すぐに行きましょー。」

エスターがそうして田の前の大扉を開けた。カロルも一緒に開けようとするが、扉はびくともしない。

「どうやら正面は無理っぽいな」

「んじゃあ、あそこからはどうよ?」

レイヴンがある場所を指差しながら言った。

そこには、梯子があった。

シンクたちは梯子を伝えて上に登った。

全員が登り終わると、田の前に紅の絆傭兵团と鳥に似た魔物、ホースラップターが現れた。

「あひる……豪勢なお出迎えで……」

レイヴンが呆れ口調で歎いた。

「貴様ら、どうやつてこい？」

「おまえらなんかに皿の葉はない」

「世わけ、やれ！」

男の言葉でホースラプターと部下達はシンクたちに襲い掛かった。  
シンクたちも武器を構える。

「みんな、行くぞ！」

「ええ！」

「はーーー！」

「うふーー！」

「ワンー！」

「おおよー！」

全員が額を、戦闘に入った。

\*

「紅蓮斬！」

シンクは紅蓮斬で大剣を持った大男を切り裂いた。

「はい、これで最後！」

リタはファイアボールでホースラップターを撃ち落とした。レイヴンも紅の辯傭兵团を変形弓で切り裂き、素早く矢をホースラップターに放つた。  
とりあえず周りは片付いた。

「おっ……やつてるな」

シンクたちの後ろから声が聞こえた。  
そこにはユーリがいた。

「ユーリ！」

エステルはユーリに気付き、ユーリに抱きついた。

「おわっと……ちょっと、離れろって……」

「大丈夫ですか？ 怪我はしてません？」

「なんともないって。心配しすぎ」

ユーリに言われ、エステルはユーリから離れた。

「おまえらも……大人しくしつけられて言ったの？」

「だつて、みんなコーリのことが心配でー！」

「ちよつと。別にあたしは心配なんにしてないわよ」

「俺もだ」

「おっさんも心配で心配で」

「嘘つけ。つてこゝか、なんでおっさんまでわざわざ来てんだ？」

コーリの間に、レイヴンはシンクたちに言つたのと同じ説明をした。

「そもそも、おまえたち、どこのから入つてきてんだよ」

「仕方ないだろ。正門が閉まつていたからな」

「だからつてなあ……」

そこにコーリの後ろから女性がやつてきた。青い髪に長い触角が特徴のクリティア族で、グラマラスな女性だった。女性を見たレイヴンは目をギョッとした。

「……だ、誰だ、そのクリティアつ娘は？」「お姫様だ？」

「おっさん、食い付きますぜ」

「オレと一緒に捕まつてたジュニアイス

「ここにちは」

ユーリが紹介し、ジュディスはシンクたちに挨拶をした。  
カロルたちも自己紹介した。

「ボク、カロル！」

「エステリー ゼット ひと言 い ま す」

「ボクらはエステル つて呼んでるんだ」

「リタ・モルディオ」

「シンクだ」

「そして俺様は……」

「「おっさん」「」

リタとシンクは同時に言った。

「レイヴンーレ・イ・ヴ・ンー」

レイヴンはすぐさま否定した

「そういう言い方する人って信用できない人多いよね  
「なーんか、納得いかないわ」

「ま、いいんじゃねえか? とりあえず」

「ウフフ……愉快な人たち」

ジユディスはそんなコーリたちを見て微笑む。ジユディスの言葉に、レイヴンは反応する。

「おお?なんだか好印象?」

「バカつぽい……」

リタが呆れ顔で咳いた。

「ジユディス、あなたはここへ何しに来てたんです?」

エスティルがジユディスに尋ねた。

「私は魔導器を見に来たのよ」

「わざわざこんな所にか?何しに?」

「私は……」

「ふらふら研究の旅してたら捕まつたんだと」

ジユディスの言葉を遮るようにコーリが言つ。

「ふーん。研究熱心なクリティア人らしいわ」

「…………」

「水道魔導器の魔核は取り返せたのか?」

「残念ながらな」

「じゃあ、この塔のどこにあるのかなあ……」

カロルは上を見上げたとき、上の階から紅の絆傭兵团の一人が大剣を振り下ろしながら降りてきた。

「うわあっ!」

「ちつ」

全員身構えたその時、何者かが、紅の絆傭兵团を斬り伏せた。

「大丈夫か!」

その人物はフレンだつた。

「フレン!-?」

全員が驚いた表情をした。

「あんた、小隊長なんだろ?ひとりで何しに来たんだ」

「人手が足りなくてね。それにどんな危険があるかも分からなかつたし」

「衝突はもう大丈夫なんですか?」

エステルの言葉に、フレンは頷いた。

「ドンが真相を伝えたので、みな落ち着きを取り戻しました。もう衝突の心配はありません。ラゴウの身柄は部下が確保した。街の傭兵たちはユニオンが制圧した。あとはバルボスだけだ。危険ですか」  
エステリーゼ様はユーリたちとここにいてください

「ひとりで行くなんて危険です！わたしたちも一緒に行きます！」

エステルはフレンを止めようとする。

「そんな、いけません！」

「待てよ、こっちもバルボスには色々と因縁があるんだ。ここまできて止まる気はねえ」

「それにエステルはどのみちあなたを追いかけて行くぞ」

「ユーリ、シンク……」

二人の言葉に、フレンは少し考えた。

「……分かった。なら一緒に行こう。時間もないし、その方がまだ安全だろ？」

「話はまとまつた？じゃ、行くわよ

リタの言葉で、みんなは歩きだす。しかしレイヴンは立ち止まつていた。

ユーリは振り返る。

「じつした、ねつねん。」

「あ、いや……こんな立派な塔に住んでこたら、血腫で死んでしまうわうなあと思つたねえ」

「ふーん……リーパーク、行けり行け。ここではつれさむ……」

「俺の方がついでかよ」

レイヴンはゴーリが行つたのを確認した。

「二歳して、かくれんぼ・ひょと顔出しへれても二こんじやなこの？」

レイヴンの後ろからドゴークが現れた。

「若者ががんばってんだ、すとせ手、貸してくれよ

「もしその必要があればなづく。今は必要を感じな」

「またまたへ。あんたにも田的があるのはわかるナビ君」

「……貴様の道化にはつき合ひ難いことだな」

「ほんと、ひどくお世話

テゴークは素っ氣ない態度で去つた。

「ちよこ待つた。一つ聞きたいんだナビ君」

「……なんだ？」

「青年一|号……いや、シンクのこと、ビームで知ってるわけ？」

「……知つていても、貴様に教える筋合いはない」

「あら、やう……」

そう言つて、レイヴンもユーリたちのところに向かった。

\*

ユーリたちはガスファロストの仕掛けや敵をなんとか切り抜け、頂上までたどり着いた。

中心には魔導器らしきものがバチバチと眩い光を放っていた。

その近くにはチエーンソー型の剣の魔導器を持つバルボスがいた。

「性懲りもなく、また来たか」

「待たせて悪いな」

「もしかして、あの剣にはまつてある魔核、水道魔導器の……！」

リタはバルボスの持つ剣を見て言つた。

「ああ、間違いない……」

「分をわきまえぬバカどもが。カプワ・ノール、ダングレスト、ついにガスファロストまで！忌々しい小僧どもめ！」

バルボスはユーリたちを睨みながら忌々しげに言った。

「バルボス、ここまでです！潔く縛に就きなさい！」

「ラゴウも捕まった。次はあんただぜ」

「間もなく騎士団も来る。これ以上の抵抗は無駄だ！」

「そう、もうあんた終わりよ」

「ふんっ、まだ終わりではないわ！十年の歳月を費やしたこの大楼閣ガスファロストがあれば、ワシの野望は潰えぬ！」

バルボスは魔導器の剣を掲げながら、声高らかに言った。

“あの男”と帝国を利用して作り上げた、この魔導器があればな！

“あの男”……？

フレンばバルボスの言葉に、眉をひそめる。

バルボスは魔導器の剣をユーリたちに向ける。剣から衝撃波が放たれ、爆発が起こる。

ユーリたちは飛び上がり、着地する。

「下町の魔核をぐだらねえ」とに使いやがつて」

バルボスは魔導器の力で下りてきた。

「ぐだらなくなどないわ。これでホワイトホースを消し、ワシがギルドの頂点に立つ！ギルドの後は帝国だ！この力さえあれば、世界はワシのものになるのだ！手始めに失せろ！ハエども！」

そう言つてバルボスは魔導器の剣を向け、衝撃波を放つ。ユーリたちの周りが爆発を起した。

「大丈夫か、みんな！？」

「あの剣はちとやばいぜ」

「ちとどうじやないぞ」

「やばいっていつか……！」りや 反則でしょ」

「圧倒的ね」

ユーリたちはバルボスの持つ剣を見ながら言った。

「グハハっ！魔導器とバカにしておったが使えるではないか！」

高らかに笑いながら、バルボスは魔導器の剣を掲げ、ガスファロストの周りが爆発を起す。

「そんな……！」

「どうした小僧ども。口先だけか？」

「ふん、まだまだ」

「お遊びはここまでだ！ダングレスト」と、消し飛ぶがいいわ！」

バルボスが言うと、魔導器の剣からエアルの渦が収束される。  
その時、

「伏せろ」

頂上のところから声が聞こえた。

その人物はデュークだった。

デュークは自分が持つ剣を掲げ、ケーブ・モック大森林の時のように、彼を囲むように術式が展開される。

「なにつ！？」

バルボスの持つ魔導器の剣が異音を上げた。

まるでデュークの剣とバルボスの剣が呼応するように見えた。

その時、周りが光に包まれた。

光が収まると、バルボスの剣は寸断されたように折れていた。

「あれは……？」

「デューク……！」

シンクはデュークを見て、驚きの表情を浮かべた。

「ヒマも興味なかつたんじゃないの？」

レイヴンもデューコークを見ると、誰にも聞こえない音量で呟いた。  
デューコークは一度、シンクを見ると、立ち去つていった。

「あいつ……！」

「リタ！今はよそ見すんな！」

バルボスは折れた剣を一度振る。しかし、魔導器の剣は機能を失い、停止した。

「…………くつ！貧弱な！」

「形勢逆転だな」

「…………賢しい知恵と魔導器で得る力など紛い物にすぎん…………か」

そう言つてバルボスは、何のしかけもない大剣を構えた。

「所詮、最後に頼れるのは、己の力だけだったな。さあ、おまえら剣を取れ！」

「あちやー、力に酔つてた分、さつきまでの方が扱いやすかったのに

「開き直つたバカほど、扱いにくいものはないわね」

バルボスを見ながら、レイヴンとリタはうなざりしたように言つた。

「ホワイトホースに並ぶ兵、“剛風のバルボス”と呼ばれたワシの

力と……ワシが作り上げた『紅の絆傭兵团』の力、とくと味わうがよい！！」

バルボスが叫び、戦いの狼煙は上がった。

\*

「来い、僕どもおつ！！」

バルボスは左腕を挙げながら叫ぶ。

それに呼応するように、四方の歯車の橋から紅の絆傭兵团の面々が出てきた。

「後悔しやがれえ！」

ユーリとフレンはバルボスに向かい、相手をする。

シンクたちは他の紅の絆傭兵团に囲まれていた。

「邪魔だ！ 脣月夜！」

シンクは満月を描くように回転しながら紅の絆傭兵团を閻魔刀で切り裂く。

「螺旋スマッシュ！」

カロルは武器を振り回しながら、周囲の敵を吹き飛ばす。

「天月旋！円月！」

ジユディスは敵を数人蹴り上げ、回転しながら槍で切り裂いた。

「邪悪なる魂搖、光の禊にて滅さん、グラシャリオ！」

エステルは敵に向かつて北斗七星を形の光を発生させ、七つの爆発を発生させた。

「氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける、フリーズランサー！」

リタは無数の氷の刃を撃ちだした。氷の刃は紅の絆傭兵団の数人に突き刺さった。

「回つときなあ！」

レイヴンは折りたたんだ変形弓と小太刀で敵を切り裂く。

「更に飛んだけ！」

更にレイヴンは周囲8方向に、同時に矢を放った。矢は見事にすべて命中した。

「ガウツ！」

ラピードは周囲の敵を回転しながら攻撃する“閃空烈破”で敵を攻撃する。

しかし、なかなかに数が減らない。

「ああっ！もひつぎつたいたい！」

「倒しても倒しても出でてくるよー。」

リタは減らない敵に嫌気をもじ、カロルは怖じ氣づいてきた。

「あれは……！」

シンクは歯車の橋の袂にあるあるものを見つけた。  
それは制御装置らしきものだった。

「あれだ！」

「えつーー？ シンクー？」

シンクは敵をはねながら、装置に駆け出し、閻魔刀を振り下ろした。

装置はバチバチと火花を放ち、壊れた。  
装置が壊れたと同時に、その装置のあつた場所の橋の歯車がクルクルと回り、折りたたまれた。

「なるほど、あの装置を壊せばいいのね」

「す、いや、シンクー！」

「じゃあ、わたしたちもー！」

「ワンジー！」

ジュディスたちもさつきので納得し、それぞれ他の装置を壊していく  
つた。

やがて全ての装置が壊れ、もう敵が増えることもなくなつた。

「やつてくれおつたな！」

ユーリとフレンを相手にしているバルボスはシンクたちを睨んだ。

「よそ見してゐる暇あるのかよ？蒼破刃！」

「魔神剣！」

ユーリは青い衝撃波を、フレンは地を這う斬撃をバルボスに放つた。バルボスは大剣の腹で防御した。

「なめるなあ！」

「ちつ…さすがにギルドの首領やつてるだけはあるな」

「ああ、強い」

「今度はこつちの番だ！ハンマー！ロール！」

バルボスは左腕のハンマーを振り回した。

ユーリとフレンは当たるギリギリで交わした。

「しぶといハエどもが！」

バルボスはなかなか倒れない一人を見て、悪態をつく。

「紅蓮斬！」

そこに、炎の斬撃がバルボスを襲う。

「ぬおつー?」

「俺が止めを刺す」

「「シンクー」「」

放ったのは青いオーラを放っているシンクだった。  
今のシンクはオーバーリミッソ状態であった。

「くつー!蒼き狼か」

「あんたにドンはやらせない!」

「ほやけー!ワシがギルドの頂点にふさわしい男なのだあー!」

そう言つてバルボスは右目の義眼から光線を放つた。  
シンクは横に体を捻り、避けた。

「そんな夢物語、夢だけで見てる!紅蓮連刃斬!」

シンクは叫びながら、紅蓮斬を連續して放つ。

「一瞬で決めるー!」の技で沈め!」

シンクの全身から炎が吹き上げた。そして、バルボスに向かい、  
瞬で切り抜け、

「緋鳳、絶炎衝!!」

斬撃と炎の同時攻撃を見舞つた。

「ガツ……ハア……！」

バルボスは口から血を吐き出し、服が所々焦げていた。  
辺りには紅の絆傭兵团はバルボス以外いなかつた。

「もう部下はいない。器が知れたな」

「分をわきまえないバカはあんただつたつてことだ」

「ぐつ……ハハハつ……な、なるほど、じうやうりそのよつだな」

ユーリとシンクの言葉に、バルボスは息苦しそうに笑う。

「ではおとなしく……」

「これ以上、無様をさらすつもりはない」

エステルの言葉を遮り、バルボスは言い放つた。  
そして、ユーリを見た。

「……ユーリとか言つたか？おまえは若い頃のドン・ホワイトホー  
スに似ている……そつくりだ」

「オレがあんなじいさんになるつてか。そつとしない話だな」

「ああ、貴様はいづれ世界に大きな敵をつくる。あのドンのよつこ。

……そして世界に食い潰される」

そして、バルボスは今度はシンクを見た。

「貴様もだ、蒼き狼」

「俺は蒼き狼じゃない。シンクだ」

「シンク……そうか。貴様はいずれ自らの存在に絶望するだらう」

「……どういふことだ?」

「クッククック……」

シンクの問いにバルボスは薄く笑つた。

「悔やみ、嘆き、絶望した貴様等がやつてくるのを、先に地獄で待つとしよう」

そう言ってバルボスは後ろに下がるうとする。  
後ろには何もなく、あるのは底が見えない下のみ。  
ユーリ、フレン、エステルは駆け寄るが遅かった。  
バルボスは下に落ち、ガスファロストの底へと消えていった。  
残つたのはユーリたちと、バルボスが持つていた壊れた魔導器の剣のみだった。

\*

ユーリたちはガスファロストの入り口にいた。

「まつたく、魔核が無事でよかつたぜ」

ユーリの手には、魔導器の剣にはめられていた水道魔導器の魔核があつた。

「水道魔導器の魔核ってそんなに小さいものだつたんですね」

「さて、魔核も取り戻したし、これで一件落着だね」

「でも、バルボスを捕まえることができませんでした……」

「ええ……それだけが悔やまれます」

「なに言つてんの、あんな悪人死んで……ふぎや……！」

シンクは途中まで言おうとしたリタの頭を叩いた。

「なにすんのよー！」

「あいつはギルドの首領としてのけじめをしたんだ。帝国騎士に捕まるくらいなら、死んだ方がマシだと思つたんだろう」

「それがギルド……か」

シンクの言葉にユーリは呟いた。

「それにまだ一件落着には早いな」

「ああ、」ヒーツがちゃんと動くかどうか確認しないと

「…………」

フレンは別のことを考えていた。それはバルボスの言った“あの男”といふ言葉が引っ掛かっていた。

「魔導器の魔核がそんなに簡単に壊れないわよ」

「ふうん、そうなんだ。しつてた、レイヴン…………？」

カロルはレイヴンに聞こいつとするが、肝心のレイヴンはそこにまじなかつた。

「おっさんなら途中でいなくなつてたな」

「またあのおっさんは……本当に自分勝手ね」

「それをリタが言つんだ」

カロルはリタをジト眼で見ながら言つた。

「人それぞれでいいんじゃない？」

「ダングレストに帰つたんだろ。会いたきや会えるぞ」

「僕も一足先に戻る。部下に仕事を押しつけたままだから。……ヒステリー・ゼ様もどうか私ども一緒に」

そう言つてフレンはエステルに顔を向ける。

「ええと……わたし……もう少しみんなと一緒にいてはいけませんか……？」

エステルは戸惑いながら言つたが、フレンは首を横に振る。

「ダングレストに着くまで、ならいこだらう。」

「責任もって送り届けるからよ。」

「……わかった。その代わり、絶対に間違いのないように頼む。寄り道も駄目だ、いいね？」

「分かつた分かつた」

「ではエスティーベ様、ダングレストで」

「ありがとう、フレン」

フレンはエステルを一瞥すると走つていった。

「一人とも、浮かない顔して、どうかしましたか？」

「いや、まだデデッキの野郎をぶん殴つてねえと思つてさ」

「ああ、リタの名を語つた奴だからな」

ユーリとシンクは言つた。

リタはシンクの言葉を聞いて、頬を赤くした。

「魔導器の魔核は戻つたんだからいいんじゃないの？そんなコソ泥なんて」

「ま、それもそうだな。どつかで余つたら絶対にぶん殴るけど……地獄で待ってる、か。やな」と言ひせり

ユーリは小さく先ほどバルボスの呟つた言葉を呴こいた。

「ほりほり、いいかげん、ダングレストに戻るつよ」

「じゃあ、私はここでお別れね」

「相棒のとこ戻るのか？」

「相棒？誰です、それ？」

「（口）からは別行動。お互いの行動に干渉はなしね」

「そつか、じゃあな」

「ええ……」

ユーリたちはジコディスと別れ、ダングレストへと戻る。

（血りの存在に絶望する……か。そんなこと言われたら、ますます自分のことを探りたくなってしまつじやないか）

シンクは空を見上げながら思つ。

(探してみるか……スパードの剣を……)

## 歯車の楼閣 ガスファロスト クリティアの槍使い、駆け付けた友（後書き）

といつわけでシンクの第一秘奥義はグレイセスFのリチャードの秘奥義から、『緋鳳絶炎衝』です。

理由はICVが浪川だということと、シンクは今まで結構、紅蓮斬とか炎系の術技結構使つてるからです。  
最初はアスベルの『白夜殲滅剣』のどっちにしようか迷つたんですね……

次回からは第二章！

第二章は多分、オリジナルの始祖の隸長が何匹か出ると思います。そして、シンクの記憶にも関わります。

お楽しみに！  
感想もお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0273x/>

Tales of Vesperia 魔を断つ刀を持つ少年

2011年11月20日09時33分発行